
バカと新学年と受験戦争

弥浦涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと新学年と受験戦争

【Nコード】

N5210X

【作者名】

弥浦涼

【あらすじ】

三年生になつた明久は雄二や姫路とは別のクラスに。明久はFクラス代表になって、ムツツリー二が……………？離ればなれになつた先に待ち受けるものとは？

問一（開幕）（前書き）

感想、要望、ご意見などお願いします。

問一（開幕）

振り分け試験当日の朝

「よし、明久。テスト前の小手調べだ！

『「三権分立」は「司法」と「立法」ともう一つは何で成り立つか？』」

「えーと……『行政』？」「おお、正解だ」

「あ、それじゃウチからも！では基礎問題！

『「 CH_3COOH 」とはなんでしょう？』」

「……………」

「アキ？」

「……………えっと、酢酸？」

「あ、正解！」

「凄いのう明久、去年は全然じゃったのに」

「へへーん、今年はFクラスにはなりたくないからね。じゃあ僕こつちだから！」

「アキっ！頑張ろうねっ！」

今日から僕は三年生。校門の辺りには桜が綺麗に咲いていた。

「吉井、遅刻だぞ」

玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。声のした方を見ると、そこには見慣れた昨年を担当がいた。

「あ、鉄じ じゃなくて、鉄人先生。おはようございます」

「もはや言い直そうともしないのか？」

「いえ、『鉄人』って呼び捨てにすると怒られるから先生って付け足したんですよ」

「どちらにせよ一番変えなきゃならない部分に変更されとらんぞ！」

「いやあ、すみません」

「まったくお前というヤツは……ほれ、受けとれ」

鉄人が箱から封筒を取りだし、僕に差し出してくる。宛名の欄には『吉井明久』と、大きく僕の名前が書いてあった。

「あれ、今年もこの面倒なやり方なんですか？」

まったく、あの妖怪ババアももつと効率よく出来ないのかな？

「いや、今年は体育館前に全員分貼り出してある。ごった返さないように個人に渡しているだけだ」

「ふーん、なるほど」

適当な相槌を打ちながら封に手をかける。去年はFクラスだったけど、雄二や姫路さんと勉強したりして大分学力が上がった今なら、EクラスかDクラスを狙えるんじゃないだろうか。

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

封を開ける手を一旦止めて、鉄人の話に耳を傾ける。

「お前は去年の今頃と比べても、かなり成長したと思う」

「へ？」

あの鉄人が僕を評価するなんて、一体何があっただろう。

「学力もそうだが、人間的に大きく成長した。去年の今頃もお前は遅刻をしたが、あのときは俺の話なんか聞かずに、封筒を開けることに気がいつていた。それを今は話を聞くために手を休めている。これは大きな成長だ」

日頃叱られているだけに、こういうのはなんだか歯がゆくなってしまう。

「お前は振り分け試験でも、その成長に見合うだけの結果を残した。俺は誇らしく思う」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

封の上の部分を開いて紙を取り出した。

「喜べ吉井。お前はもうバカなんかじゃない」

折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『吉井明久……Fクラス』

「お前は ……」

こうして僕の最低クラス生活（第二部）が幕を開けた。

問二（無事）

「あんなに頑張ったのに、どうしてまたFクラスなんだろう……？」

未だに納得のいつていない僕は、ぶつくさ言いながら三年生の階へ上がっていった。

暇潰しがてらに去年同様Aクラスを覗いてみる。

「では、クラス代表の霧島さん。挨拶をお願いします」

「……はい、坂も……霧島翔子です。よろしくをお願いします」

一人一人自己紹介しているようで、やはり今年も霧島さんが代表みたいだ。今年でやっと雄二が十八歳になるからか、結婚願望が最近増ってきている気がする。

あいつは早く結婚して大人しくなってくれと助かるんだけどなあ。

「次の方、お願いします」「はい、木下優子です。よろしくをお願いします」

秀吉のお姉さんの優子さん。去年はあまり接点がなかったっけ。同性愛者とか、シヨタコンとかいろいろ噂があつて大変だったみたいだけど、順当にAクラスに入ったみたい。

「工藤愛子です。得意科目は保健体育の実技です。よろしく」

相変わらず性に奔放な工藤さん。あんなことを去年のFクラスで言ったら須川君あたりが発狂してしまうけど、Aクラスならそんな

ことはない。

今年もムツツリー二が暴走したら工藤さんに助けてもらおうかな？

「では、次の人、お願いします」

流れ作業のように高橋先生が自己紹介を促す。そういえば、あの先生も引き続きAクラスの担任らしい。去年の合宿では相当痛い目に合わされたからよく覚えている。

「はい」

あつ……この声は……

「姫路瑞希です。去年は体調不良でFクラスでしたが、今年はちゃんと振り分け試験を受けられました。学年次席の名に恥じぬよう、頑張ります。よろしくお願いします」

そう言つてペコリとお辞儀をする姫路さん。無事に相応しいクラスで勉強出来るみたいだ。……ちよつと寂しいけど、仕方ない。そのあとに四十人くらい自己紹介をしたところで高橋先生がボソリと言つた。

「……えー、大体自己紹介は終わりましたね。今日は一人欠席ですので、その方には後日自己紹介をしていただきます。ではホームルームを終わります」

ん？ 一人欠席？ そう言えば雄二や久保君の姿が見えない。どちらかがAクラスから漏れたのだろうか。

つと、こうしてはいられない。僕も自分のクラスへ向かわないと。美波や秀吉たちと一緒にかな？

問三（既視）

三年F組と書かれたプレートのある教室の前で僕はかなり躊躇していた。

去年はクラスに入るや否や、バカ雄二にウジ虫扱いされたっけ。でも今年は違う。雄二はAクラスレベルの学力を身に付けたし、寂しいけど姫路さんはAクラスに入れたから、メンバーも随分変わっているだろう。

よし、大丈夫。何も心配はいらない。そう思って、僕は勢いよくドアを開けた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

デジャヴっ！一年たってもなんの変化もないのかよっ！？

「聞こえんのか？」

それにしてもなんて物言いだらう。いくら教師といえ礼を失しているにも程がある。

僕はその男を見た。

その背は高く、肩幅も常人の二倍はあるうかと思うほど広い。髪は短髪で、浅黒い肌をしたいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「……鉄人先生、今年もですか」

彼は、僕の担任、鉄人（西村宗一）だ。

「ああ、俺も長年教師をしているが、三年間面倒を見ることはなかなかないぞ」「っていうか、つい数分前に玄関にいましたよね？
どうして普通に教室に来れるんですか？」

「貴様のようにフラフラと寄り道をしていないだけだ」

ふむ、一理ある。

「さつさと座れ、これから自己紹介を始めるんだ」

鉄人に言われ、渋々とそこらの卓袱台に着いた。この卓袱台ともまた一年間付き合うのか……。

「よし、これから自己紹介を始める。その前に、設備に不備があれば申し出てくれ」

設備と言っても去年と同様卓袱台に座布団に畳。慣れているから別に気にならないけど、一応申し出てみる。

「先生、僕の座布団に綿がほとんど入ってないです」「耐えろ」

ふむ。

「卓袱台の足が折れてます」
「耐えろ」

じゃあ。

「先生、窓が」
「耐えろ」

それなら。

「先生」

「耐えるんだ」

「根性論以外の解決法はないんですかっ!？」

福原先生のほうがまだ親切だった気がする。

「では自己紹介を始める。廊下側の奴からやってくれ」

ああ……この先どうなるのかなあ……。

問四（面子）

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。よろしく頼むぞい」

おっ。秀吉じゃないか。相変わらずかわいい顔して爺言葉でしゃべるギャップがたまらないっ。そういえば、結局三年間同じクラスだ。

去年は夏休みとか色んなとこに遊びに行つて、仲良く出来たっけ。不純異性交遊を許さない姉さんも、なぜか秀吉だけは認めてくれる。そこが『秀吉』なんだろうなあ……。

「です。日本に来て三年目ですので、だいぶ日本語に慣れてきました」

おっ。また女子だ。今年はFクラスの女子が多いのかな？

「趣味は鈍感なアキをいじめることです」

誰だっ！？ 恐ろしくかつピンポイントな趣味を持つ奴は！

「はろはろー」

「み、美波」

「アキ、今年もよろしくね」

笑顔でそう言う美波。

「ちょっと美波！ 僕が鈍感だなんて失礼じゃない？ それだとまるで僕が告白に気づかないニブイ奴みたいじゃないかっ！」

「「「……」」」

なんだろう。クラス中から『やっぱりこいつバカだ』みたいな視線を感じる気がする。

「……アキ」

「な、何？」

「血液型は何型？」

輸血を想定した台詞に聞こえるのは気のせいだろうか。

「お姉さまっ、こんなブタ野郎の血液型より美春の血液型を聞いてくださいっ。最近美春は血液型占いに目覚めたのですっ」

あれ？この声は……

「清水さん？ 君もFクラスなの？」

彼女は清水美春さん。胸の小さいスレンダーな女の子が好きなちよつと変わっている子なんだけど……。 たしか去年はDクラスだった気がする。ちよつと不自然だ。

「どうして急にFクラスにまで下がったのさ？」

「ブタ野郎に言われる筋合いはありませんっ。美春はお姉さまと一緒に暮らすために日々努力を積み重ねているのです！」

なぜだろう。答えになっていない気がする。

「ウチと同じくらいの点数を取るために手を抜いたみたいよ。まったく」

美波の補足説明グッジョブ。

「まあ、好きな人と一緒に居たいって気持ちはわからなくもないよね、秀吉」

「……………返事に困る。あまり感心出来ぬことなのじゃが……………」

心なしか秀吉の顔がほんのり赤い。

その後もしばらく須川君とか福村君とかお馴染みのメンバーの自己紹介が続き、いい加減眠くなった頃。

ガラッ

「ん？」

不意にドアが開いて、制服を着た生徒が息を切らして入ってきた。

「あの、遅れて、すいま、せん……………」

『えっ？』

誰からと言うわけでもなく、教室の全体から驚いたような声がかかる。そりゃそうだ。普通はびっくりするだろう。

「ちょうどよかった。今自己紹介をしているから、そこでいいからしてくれ」

平然としている鉄人がその生徒に言い放った。

「は、はい！ 久保利光と言います。よろしくお願ひします……………」

問五（手抜）

「申し訳ないです。少し用事があって、遅刻してしまいました」
「そ、そんなことよりど、どうして久保君がFクラスなのさ!？」

僕は思わず声に出して叫んだ。だって叫ばずにはいられない。彼は腕輪持ちでないとはいえ、姫路さんに次ぐ実力をもっている成績優秀者なのだから。

「まさか清水さんと一緒に、好きな人と一緒にクラスになりたくて手を抜いたんじゃない……?」

「明久。お主、それは墓穴を掘っているようなものじゃぞ」

墓穴？ 別に久保君が僕と一緒にクラスになりたいわけじゃあるまいし。

「吉井君、僕が手を抜いたのは事実だよ」

「本当なの久保君?」

「ああ、それは姫路さんの成績が原因なんだ」

久保君が手を抜いてまでFクラスに来る原因が姫路さん？ どういうことなんだろう。

「なるほどの」

「なるほどね」

「なるほどな」

秀吉、美波、ついでに鉄人。なんで君らはそんなに勘がいいんだ

い？ 頼むから僕が気づくまで黙っていてほしいよ……。

「つまりこういったことか？ 『去年まで久保と同じくらいだった姫路の成績が短期間で飛躍的に上がった原因がFクラスにある』と考えたわけじゃな」

「その通りだよ。Aクラスのあの設備は整いすぎていて勉強どころではないし、上の設備を目指すモチベーションも無いしね。勉強するにはFクラスのほうが向いていると考えたのさ」

なんだろう、やっぱり久保君って……

「ねえ久保君」

「なんだい吉井君？」

「君と僕の考えは全く違うみたいだね」

久保君は勉強の為にわざわざFクラスにまで落ちたのだろうが、僕は良い設備を狙うために勉強している。ちよつと価値観みたいなものが違うんだろう。

「明久、久保の足が生まれたての小鹿のようにガクガク震えとるぞ」

「え？ 久保君、体調悪いの？」

「そうではないのじゃが……」

教室に入ってきたとき急いでいたし、走って疲れたのだろう。どちらにせよ休ませなきゃ。

「先生、久保君を保健室に連れて行ったほうが良いんじゃないですか？」

「それもそうだな。じゃあ清水、連れていけ」

「はい、わかりました」

あれ？ 男性嫌いの清水さんが久保君を連れていくことに不快を示さないなんて意外だな。

「ささっ、行きますわよ」「……………（ガクガク）」

なんだか新鮮な光景だなあ。ひよっとしたら、今年はまともな生活を送れるかも知れない。

『貴方が一緒とはラッキーですわ』

『これは僕らの目的を果たすために好都合だ』

「秀吉、男女の会話ってほのぼのするね」

「お主と島田はほのぼのしていたら取り返しのつかないことになりそうじゃ……………」

時々秀吉はよくわからないことを言い出すなあ。

問六（就任）

その後淡々と残りの自己紹介が進んでいく。

結局、雄二はFクラスじゃないみたいだ。久保君がFクラスってことは、その代わりに雄二がAクラスになったんだらう。

「最後だ吉井。前に出る」

鉄人が顎で僕を誘導した。やれやれ……僕の番か。ちゃちゃつとやっちゃおう。

「一発かまして来るのじゃ明久」

「頑張りなさいよ！」

女子二人の声援を受けながら、僕は教壇に立った。

「えっと、吉井明久です。ほとんど顔見知りなんで説明することはないけど、一年間よろしくお願いします」

一年の最初の挨拶としては無難な方だらう。去年みたく無駄に煽っても意味はないし。

「「「……………で？」「」」

クラスから返ってきた返事はそんなものだった。

「いや……………で？」って言われても、なにも言うことはないし……………」

「それなりの言葉があるじゃらう」

「なんていうかこう……………派手に行こうぜ、みたいな」

ひよつとして、『観察処分者』だからなにか変わった挨拶がある
と思っただのかな？ もしくは『ダーリン』のくだりをもう一度や
りたいとか？

「ひよつとして、アキ……気づいてないの？」

「はい？」

気づいてないって、何がだろう？ なにか特別なイベントでもあ
ったっけ？

「島田、それはあり得るぞい。何せあの明久じゃからの」

なんだろう、秀吉の台詞に悪意を感じる気がする。

「明久。お主、体育館前のクラス掲示は見たかの？」 「ああ、それ
なら遅刻ギリギリだったから見てないよ」

でもクラスは結局鉄人から封筒を貰ってわかったから問題なかつ
ただけだね。

「それなら貰った封筒をよく見てみるのじゃ」

「封筒？」

確か開けたあとポケットに突っ込んだ記憶が……あ、あった。

「うん、あったよ？」

「名前の隣になにか書いておらぬか？」

もう一度まじまじとその紙切れを眺めてみる。

『吉井明久…… Fクラス』

「自分のクラスの横に印があるけど？」

「これがなんだと言うのだろうか？ 別にたいしたことじゃないと思うんだけど。」

「おい吉井、今朝紙を渡したあと俺が言ったことを聞いてなかったのか？」

鉄人が急に横槍を入れてきた。

「大方、またFクラスだと知った途端に意識がフェードアウトして聞こえてなかったのじゃろう」

「まあ、アキラしいっちゃアキラしいわね……」

むう。全く要領が掴めないじゃないか。

「結局なんなのさ？ 僕をバカ扱いするのは後にして、早く説明してよ！」

「吉井。もう一度教えてやる。その印はな」

鉄人はそこで一言区切ると、よく通る声で教室中に響くように言った。

「 クラス代表の証だ」

問七（急変）

「え？」

「正直、去年学年最下位だった貴様が、Fクラスの代表になれるまで成績を上げるとは思っていなかったぞ」

「ワシも掲示で知って驚いたのじゃ」

「ウチも信じられなかったわ。でもアキの頑張りを見てきたから、すぐに理解できた。おめでとう、アキ」 『そうだけ吉井！』

『今年一年よろしくな！』 『頑張れ代表！』

皆の声援が教室の中で大合唱となる。『観察処分者』という肩書きを聞いたときの皆の反応は、こんなに温かいものじゃなかった。もっと冷たくて、ひどい扱いで、バカにされてきた。それが今、皆が僕のことを、代表として認めて、信頼してくれようとしている。そうか……そうか……

「ふざけやがって雄二のバカ野郎があつ！！」

「「「ええっ！？」」「」」

「アンタは一体どういう思考回路してるのよ！？」

皆が何か言ってるが、そんなことは関係ない。問題はそう。他に
ある。

「……あの雄二がこの設備を使わずにいる、ということだ」

「アンタは人の幸せを奪うことしか考えられないの！？」

『そうだけ吉井！』

『見損なつたぞ吉井！』

どうやらこれはクラス全体から反発を受けている状況のようだ。

「じゃあ……雄二はここよりいい設備で過ごした上に、あと数カ月で結婚するんだ」

『『『許すまじ坂本』』』

新年度FFF団初業務。

『坂本雄二を捕縛してこい。怪我を負わせても構わん』

『『はっ、須川会長』』

『Let's GO!!』

『『『イヤツハア!!』』』

「待たんか貴様らっ!! 授業中だ!!」

鉄人がFFF団を止めに行った。さすがの鉄人でも凶戦士化したFFF団を全員止めるには時間がかかる。

「さてと、今の内体育館に行こうかな」

「お主悪知恵は働くのじゃのう」

ふっ。悪いけどその程度じゃもう堪えないのさ。

「……ねえアキ」

「な、なに？」

「アキは気にならないの？」

「へ？」

美波が言ってるのはなんのことだろう？

「その……いつもより早起きして、誰と一緒にのクラスか確かめるとか……アキは、無いの？」

美波の目は真剣だ。おそらく、美波は振り分け試験の後、友達と離れるのが怖かったのだろう。寂しくないなんて言ってるけど、ほんとはどこか寂しいんじゃないか。

「うーん。僕は『早く知りたい』とかは無いね。誰と一緒にのクラスかは入るまでの楽しみにしたいし」

「じゃあ……」

「うん、例えば美波や秀吉たちと別のクラスになっても僕は二人を特別扱いしないからね。離れてもずっと一緒に居たいし」

まあ、雄二が含まれていないのはお決まりだ。

「……う、うるひゃいわよバカ！」

そう言つと、美波はどこかへ走ってしまった。

「明久。お主、そこは全く成長しないの」

秀吉が呆れたように首を横に振った。

ガラッ

「じゃまするぞ　　ってお前ら以外誰もいないのか」

窓から誰かが入ってきた気配がした。

「じゃあ、僕は体育館にいくかな。代表として各クラスの布陣も確

認みたいし」「ワシもお供するのじゃ」「俺はここに隠れてるからな」

そうだ、念のため筆記用具を持っていこう。

「必要なのはこれかな?」「明久、何故コンパスが必要なのじゃ?」「明久、翔子が来たら『知らない』って言うてくれ」「うん、わかったよ」

とりあえず相手に見られないようにコンパスを構えて

「死に腐れや雄二いつ!!」

僕は悪友に向かって凶器を振りかざした。

問八（事実）

「おおつとなんだ！？ いきなり明久が狂戦士モードになったぞ！」
「黙れ反逆者！ 一人のうのと快適生活を送りやがって！ 僕の苦しみを嘲笑いに来たのか外道め！」

コイツだけは……コイツだけは生かして返さん！

「おい秀吉、なんで明久は理性が吹き飛んでやがるんだ？」

「……お主がFクラスの設備を使わずにいることが気に食わぬらしい」

「……そりゃなんともコイツらしいな」

コイツらしいってどういう意味！？ 僕だってもうただのバカじゃないのに！

「ところで明久。お前、Fクラスの代表になったそうじゃねえか。また難儀なこつて」

「僕だつてなりたくてなった訳じゃないよ！ 振り分け試験だつて世界史と日本史は調子よかつたし、事前の小手調べでも間違わなかつたんだからEクラスには入れたはずなのに！」

確かその直前にやった模擬試験では、合計で1200点くらいだった。これはEクラスの上位レベルの成績だから、Fクラス脱出は確実だと思つたのに……。

「まったく……代表になつてもバカは相変わらずなんだな」

「なんだと雄二！ もう一回言ってみろ！」

「相変わらずバカだな」

「……（シクシク）」

「言われて泣くならリクエストしなければよいじゃろつに」

誰だつてバカつて言われたら傷付くじゃないかあ……。

「あのな明久。俺がバカだと言ったのは『お前だけ成績が上がった訳じゃない』って意味だ」

「……へ？」

「つまり、『学園全体の成績が上がり、Eクラスに入るボーダーラインが上がった』ってことじゃ」
「なるほど」

この僕でさえ去年から400点も伸ばせたんだから、他の皆も数百点の成績向上があるということだ。

「だから僕はFクラスなのか……」

「気にするでない。それに、もし明久があと何点が取ってEクラスに行ってしまったら、ワシや島田と一緒にクラスではなかったのじやぞ?」

確かに、秀吉の言う通りだ。もしEクラス入りしたら知らない人だらけだろうし、何より僕を嫌っている中林さんと一緒になつてしまつかもしれない。

「うん。やっぱり美少女二人と離れるのは寂しいね」「だからワシは男じゃ!」

やだなあ秀吉。もう二年も一緒なんだから、君が美少女だつてことはまるわかりだよ?

「そういえば、雄二はAクラスに入れたんでしょ？
霧島さんとは仲良く出来てる？」

高橋先生が言ってた『欠席』っていうのは、きっと雄二が霧島さんから逃げて教室に居なかったからだろう。

「……何言ってるんだ明久？」

「へっ？」

雄二が額に手を当てて溜め息をついた。

「俺はBクラス代表だ」

問九（解明）

「彘!？」

「何だ明久、知らなかったのか？」

だつて雄二がBクラスだなんて意外過ぎるでしょ！ てつきり余裕でAクラスだと思つてたのに……。

「いや、お前のことだから遅刻して掲示を見損なつたつて所だろうな」

「なんでわかるのさ!？」

「それだけお主は単純なのじゃ」

「それはそう何だが、正直、俺も驚いた。てつきりAクラスだと思つたんだが、まさかBクラスだとはなあ。いやあ、意外だつたよ」

「本音は？」

「翔子と同じクラスで学校生活をしなくて済んで良かった」

よし、後で霧島さんにそれとなく告げ口しよう。

「お主、霧島に密告しようとしてるじゃろ」

「なんでわかるの!？」

「それだけ分かりやすいんだよ。つたく、今からそんなに代表が務まるのか？」

「余計なお世話だ」

とは言つても、やはり不安はある。去年は雄二や姫路さんがいてくれたから試召戦争もなんとか勝てたけど、いくらなんでも僕に代表が務まるとは思えない。

「そうか……。うん、明久なら俺の助けが無くても大丈夫だろう」
「え？」

一体どういう風の吹き回しだろう？ コイツが僕を褒めるなんて滅多に無いのに。

「せっかく明久の為にクラス表を持ってきたんだが、必要無いよな」
「申し訳有りませぬ雄二さま」

悪友に対して土下座？ そんなの全然気にしないねっ。

「だからそこがワンパターンじゃと言うのに……」
「いちいち言わないでよ秀吉っ！」

雄二が再び溜め息をついた。

「仕方ねえ明久、今回だけだぞ？」
「うんっ」

僕の返事を聞くや否や、雄二はズボンのポケットからA3の用紙を取り出した。

「正直、今回の振り分け試験は大波乱だったな」
「うむ、成績を伸ばした者とわざと落としたりした者が意外じゃったの」
「ねえねえ雄二。いいから早く見せてよ？」

僕の発言を遮るように、雄二が『待て』と手を挙げた。

「俺たちはもう敵同士なんだ。だからお前が知ってる奴等でクラスが変わった奴だけ教えてやる」

雄二の言い方は冷酷だった。でもコイツは正しいことを言っている。

雄二は別の紙を取りだし、それに書いていった。

『久保利光・F』

「明久」

「ん？」

「憐れだな……」

「あはは、何言ってるのさ雄二。久保君は至極真面目で清純な人だよ？ ……ねえ秀吉。なんでそんな目で僕を見るの？」

「……不憫じゃ」

『根本恭二・A』

「あ、根本君が上がったんだね」

「代わりに俺が代表だな」

『小山友香・B』

「畜生つ雄二め羨まし……くない」

「だろ？」

『清水美春・F』

「明久」

「ん？」

「憐れだな……」

「ああ……」

(同じ性癖でもこれだけは反応が違うのじゃな)

『姫路瑞希・A』

「まあこれで、明久の願いも叶ったってもんだな」

「なっ……違うったりや雄二！」

「ふふっ、噛んでおるぞ明久〜？」

「もうっ！ 雄二、次！」 「はいよ」

『坂本雄二・B・代表』

「雄二、次」

「俺はどうでもいってのか!？」

「いや雄二。これはさっき言ったから明久も間違っではおらぬぞ」

「ちっ……、まあいい。次でラストだ」

最後？ あと僕の知り合いと言ったら

『ムツリーニ
土屋康太・C・代表』

え？

問十（経験）

「ムツツリーニがCクラス代表おおっつ!？」

何だよそれ!? 印刷ミスとか情報操作の類いじゃないの？

「驚くのも無理はないぞ明久。始めは俺たちも信じられなかったんだ」

「西村教諭に確認したのじゃが、コンピューターのミスとかではないそうじゃ」

保健体育しか得意科目じゃないあのムツツリーニがCクラス

いや、もう少しでBクラスに入れるくらいの成績を身に付けていたなんて……。

「雄二、そんなの……」

「ああ。恐らく……」

「「カンニングに決まっている」」

「なぜ素直に本人の実力と考えられんのじゃ!？」

素直? なにそれ食えるの？

「いきなりAクラスだと不自然だからCクラスにセーブしたんだろ
うね」

「大方、カメラか何かで隣のやつを解答を見たんだろ」

まったくムツツリーニだったら。いつからそんなに卑怯な手段をと

るようになつたんだい？

「そう言えば、ムツツリーニは試験の数週間前からAクラスの工藤に勉強を見てもらっていたそうじゃ」

「えっ、そうなの？」

工藤さんと言えばムツツリーニ。ムツツリーニと言えば工藤さんと言えるほど仲の良い(?)ライバル関係の二人だ。その組み合わせは不自然ではないが……。

「なあ秀吉。いくらAクラスの優秀なやつに教え込まれたって、あのムツツリーニが保健体育以外の科目でそれなりの点数をとれるようになるには、数週間では無理なんじゃないか？」

「うむ……確かにのう」

とはいえ、ここで談義をしてもしょうがない。本人に事実確認をとらないと。

『キーンコーンカーンコーン』

「おっ、ちょうどいいな。Cクラスに行って本人に聞くとするか」

「というか今まで授業中じゃったのじゃな」

あれ？ そう言えばおかしいな。

「雄二」

「なんだ？」

さっきコイツは『霧島さんが来たら居ないと言ってほしい』と頼んできた。

「どうして授業中なのに教室から出てきたの？　いくら霧島さんとはいえ、授業中に隣のクラスに攻め込みに来るとは思えないんだけど？」

「ああ、それなら」

雄二は立ち上がり、僕と秀吉の腕を引っ張って廊下に出てドアを閉めると、爽やかな笑顔でこう言った。

「翔子ならチャイムが鳴ると同時にBクラスに攻め込んで、いないとわかったらFクラスに来ると予想したからだ」

「もう突っ込まんぞ」

カラカラ（Fクラスの窓から誰かが侵入した音）

『……雄二の匂いがここからする』

霧島さんは人間の範囲を越えているんじゃないだろうか。

「おっ、予想より早かったな」

「突っ込まんぞ」

秀吉の目に光が灯っていないように見えるのは気のせいかな？

「そう言えば雄二」

「うん？」

「去年は霧島さんには先を読まれっぱなしだったけど、克服したの？」

「全ては経験だ」

なんでだろ。コイツが言つと凄く説得力がある。

「さあ、翔子がFクラスで油売ってる内にCクラスに行くぞ」

「おおっ」

「ワシは『常識』と言つものを知っている人間に会いたいのじゃ…」

「…」

問十一（疑問）

「さて、と。準備はいいか二人とも？」

「うん」

「うむ」

現在僕らはCクラスの入り口の前に立っている。新学期早々に騒ぎを起こすわけにもいかないし、極力丁寧に行こうというのが僕らの見解だ。

「よし、じゃあ行くか」

コンコンツ、ガラララツ

「Bクラス「きゃああっ」代表の「わああっ」坂本だ。Cクラス「さ、坂本だあつ」の「た、た、助け」代表は「頼むから巻き込まないでくれ！」いるか？」

ガラララツ、ピシヤツ。

この間4秒。

「悪名名高いというのも困り者じゃのう」

「同情するなら俺のいい評判を広めてくれ」

じゃあ同情しない、というのが僕の選択肢だったりする。

やれやれ、雄二じゃ頼りないから僕が代わりにムツツリー二を探してあげようかな？ 「えっと、Fクラス代表の吉井明久です。ムツツリー二はいる？」って感じでいいだろう。

コンコンッ、ガラララッ

「え『今度は吉井明久が来たああああああっつつつ！！！！
！』る？」

ガラララッ、ピシヤッ。

どうしよう、結果的にアルファベットしか喋ってないよ。
秀吉がやれやれ、と言いたげに首を横に振った。

「仕方ないのう。二人とも見ておけ。ムッツリーニを呼び出すには
これが一番じゃ」

そう言つと、秀吉は胸に片手を当てて大きく息を吸った。

「きゃああっ、スカートがめくれちゃうっつ！！（女子声）」

パシヤッ、ザツツツッ！！！！

着地の前にもシャッターを押すなんて荒業をしながら、一人の高
校生がCクラスから飛び出てきた。

「さて……ムッツリーニに話を聞きますか」

「盗聴の心配がない」というムッツリーニたつての希望で、場所は
Cクラスで会議開始。

「聞きたいことはわかっていると思うが、ムッツリーニ。お前が試験でCクラス代表レベルの点数をとった方法を教えてくれないか？」

雄二がストレートに質問をする。コイツはこういふときの交渉が天的に上手い。僕も代表としてこんな風に出るだろうか。

「……………理由は簡単」

ムッツリーニが腕組みをしながら答える。

「……………それだけの学力を身に付けた」

「ムッツリーニ、それってどういう」

ガラッ

「ムッツリーニくんっ！ おめでとーっ」

「……………っ！！（ダバダバ）」

僕の発言を遮り、教室に飛び込むや否やムッツリーニに抱き付き、鼻血を大量に流させたのは、

「工藤さん、ムッツリーニが困ってるよ？」

Aクラスの工藤愛子さんだ。

「あれ？ 吉井君たち、居たの？」

「うむ、ムッツリーニの得点には驚かされたからのっ。経緯を聞きたくて来たのじゃ」

当の本人は工藤さんの腕の中で気持ち良さそうに流血している。

「そっか。じゃ、ムッツリーニ君はしばらく生き返りそうにないし、ボクが教えてあげるよ」

「ああ、助かる」

(工藤までも流血が普通だと認識しておるのか……)

秀吉が何かぶつくさ言ってるけど、工藤さんが教えてくれるなら嘘は無いだろう。

「えつとね、色々あってボクがムッツリーニ君に勉強を教えることになったんだ」

「工藤よ、その色々、という部分は教えてもらえんのか？」

「うーん。ちょっと長いし、彼の個人的な事だからまた後でいいかな？」

「ああ、いいだろ」

「うん。じゃあ話すよ。ムッツリーニ君があれだけの点をとれたのはね」

問十二（真実）（前書き）

工藤さんの回想シーンとなります。

一応、辻褄は合わせたつもりです（汗）

問十二（真実）

「ムッツリー二君。勉強教えるのはいいけど、最終的にどこに入りたいの？」

「……………Cクラス上位、もしくはBクラス下位レベル程度」

「それなら総合で1600点程度が目標だね。一応聞いてくけど、今までで最高はいくつくらい？」

「……………1000点が平均」「えつ……………てことはあと三週間で600アップを目指すわけかな？」

「……………今から紐なしバンジーをしてくる」

「それは飛び降りと大差ないよ！？ 早まるのはまだ早いから！」
「……………本当に？」

「うん。厳しいけれど、ムッツリー二君は伸ばす余地なら吉井君並みに沢山あるからね」

「……………明久と比べられた」

「ハイハイ、現実見ないと。ボクが優しく教えてあげるから」
「……………恩に着る」

「感謝は試験の後でね？ それで、確か保健体育は本気を出せば700点行けるよね？ 覗き騒ぎのとき、そうだった気がするけど」

「……………あれは実力以上。多分600が限界」

「そっか……………。ならあと9科目で1000点……………一教科平均110以上か。今がFの下位だとして、Eの上位を目指すつもりじゃないとダメだね。それも全部の科目だから、平均して一教科あたり3日も勉強出来ないよ？」

「……………終わった？」

「ううん、まだ終わりじゃない。なにか抜け道があるハズだよ。『選択科目制度』が始まるから、教科は移行出来るし」

「……………でも、俺は保健体育にしか興味が湧かない」

「そつだよねえ。はあ……」

「……………工藤」

「なんだいムツツリー二君」

「……………無理なら無理と言ってほしい」

「ほえっ?」

「……………工藤の邪魔はしたくない」

「そんな風に思わなくていいよ? むしろムツツリー二君は保健体育のライバルなん」

「……………どうした?」

「ね、ねえムツツリー二君っ」

「……………?」

「エッチなコトは好き?」……………っ!!(ドバツ)「ああっ鼻血を止めてよ!」別に誘惑したわけじゃないからっ!」

「……………紛らわしい」

「ごめんごめんっ。ムツツリー二君の性欲を生かした勉強法を思い付いたんだよっ!」

「……………教えてくれ」

「うん。まずは古典。『源氏物語』や『千夜一夜物語』なんかは浮気とか色っぽいお話が多いよね? 勉強する意欲が湧くと思っただけど?」

「……………盲点だった」

「あはは。それに、古典が出来れば自然と現国も少しは出来るようになるし」

「……………でも、それだけじゃ全然足りない」

「んふふ〜。まだまだこれからさ。世界史なんかどう?」

「……………全く興味がない」

「全部じゃないよ。ある一部に限定して勉強するんだ」

「……………ある一部?」

「裸像の下」

「……………そんなものでは興奮しない(ダバダバ)」

「ああもうまた鼻血が！」……………構わない、続ける」

「ホントに大丈夫かな!? あ、あとは地理。将来色んな国の女の子と触れあうかも知れないから、世界の文化は学ぶべきだよ」

「……………夢がある」

「その夢を見る前に死んじやわないでね？」

「……………大丈夫、輸血の準備はしてある」

「鼻血を止める努力をしないあたりが男らしいよ……………」

「……………勉強する範囲はこれで決まり、か？」

「ううん、まだあと一番いい所が残ってるよ。それはね

生

物さ」

「……………?」

「実は遺伝とか『受精』の分野って難しくって平均点が低めなんだけど、ムツツリーニ君なら満点も狙えるし、他の数学とかは基本を抑えて部分点を……………って意識失って聞いてないね」

「……………(ドバドバドバ)」

「はぁ……………三週間で何リットル輸血すればいいんだろ……………?」

問十二(真実)(後書き)

感想よろしくお願いします！

問十三（協定）

「とまあ、そういうことだよ。納得してくれたカナ？」

「うん、納得できたよ」

でも、理論上納得できるとはいえ、たった三週間でそこまで成績を上げられるムツツリー二も凄い。

「ただ、一つ困ったことがあるんだよね」

「一体なんじゃ？」

秀吉が聞くと、工藤さんはムツツリー二の頭をポンポンと叩いて溜め息をついた。

「ムツツリー二君は勉強してる間ずっと鼻血を出してるから、多少の流血なら気にならなくなっちゃってね……」

「……………あれは知恵熱のせい」

「それでさつきも平然としておつたのじゃな」

工藤さんは去年までは木下姉妹の次に常識のある女の子だったんだけど、流血に慣れてしまうと大分常識人というカゴテリから外れてしまうかもしれない。

「なあ工藤、ちょっと聞いていいか？」

突然雄二が割って入ってきた。

「何？ あ、代表のことなら直接本人に聞いた方がいいよ」

「いや、それなら嫌でも家に連れ込まれて聞かされるから心配はい

らん」

開き直ったなコイツ。

「俺が聞きたいのは……根本のことだ。今日は休んでいるらしいが？」

「あはは、それね……」

工藤さんの表情が曇る。そういえば根本君はAクラスに入ったんだっけ。去年Bクラス代表だったんだからあり得ない話じゃない。

「実は、ボクもあんまりいい気がなくてね。代表と姫路さんは前に翻弄されたことがあるみたいだし、優子とは合わなそうだし。悪い予感はあるんだ」

「翔子や木下を嵌めて主導権を握りかねないからな。小悪党が力を手にしたら一番厄介だ」

実際、根本君の評判はかなり悪い。それに去年は姫路さんのラブレターを盗んだり、嫌なタイミングで試召戦争を仕掛けてきたりと色々かき回された。

その根本君がAクラスに入ったということは、一体何を意味するのだろうか？

「そこでだ。この場にいるやつで協定を結びたい」

「協定、じゃと？」

「ああ。今回の振り分け試験は何かとイレギュラーが多かった。俺も多少は予測していたが、まさか元Fクラスが四つに分散してしまつとは思わなかった」

特に、雄二とムツツリー二については雄二も予想外だろう。もち

ろん、僕がFクラス代表ということも。

「そこで、今後不測の事態が起こったときに対応するために協定を結ぶんだ」

「成る程のう」

雄二は僕やムツツリーニ、秀吉という特殊な手駒と姫路さんという強力なカードを失った。もちろんBクラスの生徒は成績優秀だが、手駒としては普通かもしれない。

ムツツリーニや僕は指揮官としての能力に欠けるし、何よりムツツリーニはクラスに知り合いがない。何か起きてすぐに対応出来るとは言い難いだろう。

「明久、お前の周りにはいる面子をよく見てみる」

えーっと、この場には、

「美少女が二人とムツツリが一人とゴリラが一匹いるね」

「吉井君、ムツツリだなんて酷いな。ボクはオープンなエロを追求しているのにつ」

まさか雄二より先に工藤さんが乗ってくるとは思わなかった。

「明久。俺が聞いているのはそういうことじゃない。B、C、Fクラスの代表とA、Fクラスの生徒がいるんだ」

「あ、なるほど」

「根本に不審な動きがあつたら連絡し、不測の事態が起こつたら極力協力しあう、というのが協定の内容だ」

代表としての経験が無い僕としてはありがたい内容だ。

「僕は協力するよ。秀吉はどう?。」

「異論はないぞい」

「ボクはちよっと優子に話さないとわからないかな? ムツツリー

二君は?。」

「……………協力する」

「よし、決まりだな」

そういう雄二の顔は心底安心したように見えた。

問十四（不服）

「さてと、目的も果たしたことだしそろそろ行くとするかな」

雄二が立ち上がり、僕と秀吉もそれに続く。

「うん、もうすぐ休み時間も終わるし、そろそろ戻った方がいいかもね」

もう鉄人も異端審問会の鎮静を終えているだろうし。

「戻る？ 何言ってるんだ明久」

「ほえ？」

なんだろ。まだ忘れてることってあったかな？

「……………次の時間、代表は学園長室で集会がある」「朝のホームルームで担任から言われたはずだが？」

朝のホームルーム？ えっと、その時間は

「鉄人が異端審問会の鎮静に追われて時間が経っちゃったんだよね」

「あはは。そこはずっと変わらないんだね、Fクラスって」

工藤さんが楽しそうに笑っている。正直異端審問会って笑って過ごしていい組織じゃないと思うけど。

「ちなみに対象は雄二じゃ」

「…………… Bクラスの設備に、数ヶ月で結婚可能」

「そりゃ誰でも恨んじやうんじやないかな？」

「俺の人生なんだからほつといてくれ！」

ほつといても霧島さんとの結婚は逃れられないと思うんだけど。

「ねえ雄二」

「…………… なんだ、明久」

「代表同士の会合なら、忖なしに霧島さんと同席だと思っただけど、対策はあるの？」

實力通りにAクラスに入れなかった挙げ句、休み時間中霧島さんから逃げ続けていたんだ。知られたら折檻は免れないだろう。

「大丈夫だ」

そう言っつて笑顔で端末を取り出す雄二。

「ボタン一つで救急車を呼べるように手配してある」「怪我する」とは確定事項なんじゃな」

「…………… 不可抗力なら致し方ない」

「男らしいよ雄二」

「日頃から理不尽な暴力にあっていると避けることより極力後処理を考えるみたいだね。面白いなあ」

当の本人は必死であると言っつことを工藤さんには知っつて欲しい。

「さあ、行くぞ明久、ムッツリー二」

「よしっ」

「…………… 頑張る」

「ワシらは教室へ戻っておるぞ」
「頑張つてね〜」

僕らはそれぞれの目的地へと向かった。

コンコン

「失礼しま 邪魔するぞババア」

「きちんと最後まで敬語で話せないのかいガキ共!？」 「ちよつと学園長! なんて僕らも含まれてるんですか!？」

「……………不服」

「安心しな。土屋は含んでないさね」

「やっぱり僕は含まれてるわけ!？ ムツツリーニと僕で扱いが違いすぎない!？」 「……………日頃の行い」

日頃の行いというなら、ムツツリーニは逮捕されても構わないレベルだと思うけど。

「うるさいわねまったく。多少は静かに出来ないの？」

脇のソファーに座っていた女子生徒が文句を言ってきた。えーつと、あれは

「げっ、中林さん？」

(おそらく) Eクラス代表の、『髪筋姉ちゃん(雄二命名)』と中林さんだ。

「『げっ』って何よ！ 失礼じゃない？」

「だってあんまりいいイメージを持ってないから」

「それを直接本人の目の前で言うの！？ だからアンタは気に入らないのよ！」

（おそらく、久保と明久が一緒になったのが気に入らないんだろうな）

（……………色々、憐れ）

問十五（集会）

「失礼します。Dクラス代表の平賀です」

僕が中林さんにやいやい言われていると、平賀君が学園長室へ入ってきた。

「これであとは翔子だけか。つたく、学年首席なんだから一番に来てもいいものだろうに」

雄二がやれやれと呆れた呈で言った。内心折檻されずに済んでホッとしているのだろう。

「坂本、アンタ何言ってるの？」

「中林、どうかしたか？」

雄二の言葉に伝えるように、中林さんが僕らの方へ指をさした。

「Aクラス代表なら、アンタの後ろに立ってるじゃない」

「……リアリィー？」

おっと、これは僕も気づかなかった。霧島さんは気配を消すのが上達したなあ。

「……雄二、あとでお仕置き」

「……俺、この試練に耐えきれたら、大きな白い犬を飼おうと思うんだ」

「…………死亡フラグ」

「ねえムツツリーニ、火葬場ってどうやって手配するんだっけ？」
「この人達、三年になっても相変わらずなんだね……」

あ、平賀君のツッコミって結構新鮮かも。

「まったく、バカは進級しても治らないのかねえ。全員揃ったんだからさっさと話し合いを始めるよ！」

とりあえず僕らは雄二の処刑を中断させて、学園長に対立するように横長のソファーに座った。学園長から見て左からA〜Fとなる並びだ。

「それで、今回の集会はどついう目的なんだ？」

「……アンタに進められるのは癪だけど、ちゃっちやと終わらせるかねえ。」

単刀直入に言うよ。今回の集会の目的は

学園長はそこで全員の顔を左から見回し、
最後に僕の顔を凝視して言った。

「 試召戦争の制限について、さね

へ？

「ち、ちょっと待って下さいよ学園長！ 試召戦争が出来なくなったら、設備交換が出来ないじゃないですか！」

それに、このシステムは生徒のモチベーションを上げるきっかけ

だつたはずだ。

「黙りな、観察処分者。これにはちゃんと理由があるんだよ」

学園長は『余計な口を挟むな』とでも言いたげに僕を睨み付けている。

「で、その理由って何なんだ？ まあ大方予想はつくがな」

「え？ 雄二は予想出来てるの？」

「っていつか何でアンタは出来ないのよ！ バカにも程があるわよ！」

中林さんって機嫌がいい時ってあるんだろうか。

「よく考える明久。俺たちには今年受験があるだろうが。試召戦争でゴタゴタを起こして入試に影響したら問題だろ」

「あ、なるほど」

「坂本の言つ通りさね。ある程度なら許可はするけど、流石に夏休みのあとは許可できないよ」

そういえば、学期が変わることに設備のリセットなんていう制度もあった。あれは受験に影響しないためにも作られたのだろう。

「まあ、三年になって色々細かいルールが出てくるから、今から説明してやるさね」

問十六（選択）

「……ルール？」「……」「ああ。アンタらも知つとるだろ？」
『選択科目制度』のことだよ」

……えーと、なんだっけ、それ？

「いまいちピンと来てないようだな。明久に限って」「………学
年上がる前に説明されたはず」

「……吉井ならしょうがない」

「待つて！ このメンバーで霧島さんまで敵に回つたら常識人は平
賀君だけじゃないか！」

皆代表なんだからちよつとは常識を知つてほしい。

55

「……近寄らないでくれるかな？ 船越先生のカレシ君」

「だからその噂はでっち上げだつて！」

「ていつかなんで初期段階でアタシは非常識扱いされてるのよ!？」

もう僕の味方は秀吉しかいないんじゃないだろうか。

「……話を進めるよ。『選択科目制度』って言うのは、物理・化学・
生物・地学・と地理・日本史・世界史が選択制になる三年から、試
召戦争でのルールを若干変えることだよ」

なんとなくわかったけど、いまいち理解しづらい。

「具体的に、どういうものなんですか？」

「例えば、理科系で言うと【物理 生物】【化学 地学】のように、それぞれ対応する科目に置き換えられる。吉井と土屋、ちょっとやってみな。召喚許可は出してあるさね」

むう。確かにやってみた方が分かりやすいだろう。

「オツケー、試獣召喚！」……………試獣召喚」

『Fクラス 吉井明久

物理 101点』

「おお、だいぶ上がったみたいだな明久」

「へへーん。伊達に勉強してないよっ」

苦手な科目でも三桁前後がとれるようになった。これは雄二たちとの勉強での成果だ。

さて、ムッツリーニは、

『Cクラス 土屋康太

生物 183点』

「……………え？」

く、工藤さんから聞いて大体予想はしてたけど……………ホントにBクラスレベルの点数を持ってたんだ。

「とまあ、こんな感じで生物と物理はリンクして戦闘可能さね。今は『物理・生物フィールド』を展開中だよ」

「これで理系と文系が同じ条件で戦える、ということだな」

「その通り、『化学・地学フィールド』も同様さね。ちなみに、化学教師でも地学のフィールドを作れるのと同じだから注意しなよ」

そう言うのと、学園長はフィールドを消した。僕とムッツリーニの召喚獣が同時に消える。

「あれ？ 学園長。そういうえば、僕とムッツリーニの召喚獣の装備が変わっていなかったような……？」

「……『選択科目制度』への変換に手間取って遅れたんだよ。あと二週間は待つて欲しいさね」

なんだ。ババア長お馴染みの調整不足か。けっこう慣れたからいじる気もしない。

「さあ、次は社会科系だよ。これも召喚した方が早いさね」
学園長が新しいフィールドを形成する。社会科なら僕の得意科目だからだいぶ影響するだろう。

「じゃあ、吉井vs土屋&中林でお願いするかね。分かりやすいように、召喚獣を攻撃してくれると助かるねえ」

それは僕の身体的ダメージは決定的付ける宣告だった。

「……………学園長はいい人」

「ムッツリーニ！ 君まで暴徒化してしまったら僕は痛みで死んじやうよー！」

「……………試獣召喚」

「いくわよ吉井っ！ 試獣召喚！」

「さ、試獣召喚……………」

こねって、僕はっかり損しそうな気がする……。

問十七(重要)

『Fクラス 吉井明久
世界史 180点

V S

Eクラス 中林宏美
日本史 90点

&

Cクラス 土屋康太
地理 169点

『

「社会科はこの三科目の中から二つ選ぶことになっているんだ。だから理科系と違って単純なリンクじゃないんだよ。今は『社会科フィールド』を展開中だね」「確か、戦闘では選んだ科目の点数が高い方が使われるんだよね」
「その通りだね」

つまり僕は今回の振り分け試験では、日本史より世界史の方が点が高かったと言うことだろう。

「じゃあちよつと実験さね。中林！」

「はい？」

中林さんが不思議そうな顔でババアを見た。

「吉井を殴りな」

「仰せの通りに」

「待って中林さん！ 学園長が言ったのは召喚獣のことで本体への暴力を促すものではないから！」

「じゃあ本体を殴った上で召喚獣も殴るから」

「鬼だ鬼がぶぎゃあっ！」

中林さんのパンチを避けたものの、召喚獣の方は一発喰らってしまった。

「このように、世界史と日本史はリンクしているってわけか。なるほどな」

「納得してないで止めてよ雄二！」

アイツも少しは僕の痛みを知った方がいい。

「そうだな。おいムツツリー二」

「……………」

「お前も『中林に』加勢しろ」

「ちよつと雄二、日本語が……………御意」おかしいよ二人ともぶぎゃあー！！」

中林さんは点数が低めだからまだそれほど痛くないけど、点数が近いムツツリー二の攻撃はかなりのダメージだ。

「ああ、世界史と地理もリンクしてるのか」

「ババアに聞けばすぐ分かる知識だろ！」

「いや、どうせ同じ知識ならお前をボコったほうが印象に残るからな」

「そんな斬新な記憶法で覚えなくていいよー！」

こんな暴拳を容認してる学園って、社会的に大丈夫なんだろうか。

「じゃあ最後さね。土屋、中林を攻撃しな」

「……………御意」

ムツツリー二の召喚獣が音もなく中林さんの召喚獣の後ろへ回り込んだ。まるで本当に忍者みたいだ。

中林さんの方は僕の召喚獣をマウントポジションをとりながら殴り続けていて気づかないらしい。

「……………切り捨て、御免」

ムツツリー二の小太刀が中林さんの首を捉えて 僕の召喚獣へ刺さった。

『Fクラス 吉井明久

世界史 0点』

「ぎゃあああああつ！！！！」

痛いっ！ 鋭利な刃物つて即効性があるからすごく痛いっ！ っ
てなんで僕に攻撃が当たるの！？

「……………成る程。見るまで分かりにくかった」

「ああ。これで『日本史と地理はリンクしていない』という説明の意味がわかった」

坂本夫婦のトークが今は無性に恨めしく感じる。

「分かって貰って何よりさね。日本史と地理は同じ社会科系とはい

え、勉強する範囲も難易度も別物だからね。リンクはしていないよ」
「実際の試召戦争では、同じ世界史・日本史・地理の『社会科フィールド』で戦闘するが、日本史と地理の召喚獣はお互いに触れ合えず、透けてしまうのか」

だから中林さんに仕掛けたムツツリー二の攻撃が僕に当たったのか。

あれ？ これって僕にとって物凄く重要な問題なんじゃないか？

「そうさね。分かりやすいだろう？」

「ああ。大変参考になった」

「僕の命を犠牲にした上での知識だけどね！」

問十八（惨事）

「さて、新しいルールについての説明は終わりさね。まだ質問があったらいつでも受け付けるよ」

学園長が機嫌良さそうにフィールドを消した。システムの変更が上手くいったのが相当嬉しいんだろう。

「おいババア。新ルールについての説明は俺たち代表だけにするのか？ クラスメイトへの説明は誰がやるんだ？」

それは僕にとって、結構重要な問題だったりする。AクラスやBクラスのような成績優秀な生徒が集まるクラスなら、誰が説明しても一回で理解出来るだろうけど、Fクラスの生徒に僕が説明するなんて大惨事は避けなければならない。

「大丈夫だよ。それは担任が説明することになっているし、それに」
学園長はパソコンをいじりながら言った。

「この映像もあるさね」

「ん？ なんの映像だ？」 「さっきの戦闘の一部始終だよ。CCDカメラで撮っておいたのさ」

あ、そうか。さっきの映像も見せれば話だけより分かりやすいもんね

「 っていつの間に録画してたの！？ それよりこの部屋、

いつの間にカメラを仕掛けられてたの!？」「つい最近だよ、秘密裏に、ね。去年は勝手に忍び込まれたり、都合よく使われたからね。今年はセキュリティをしつかりしたのさ」

「畜生それじゃ安全にお昼ご飯を食べられないじゃないかっ!」

「お前はこの部屋で飯を食うことに問題があると思わないのか?」

だつて屋上で美波とご飯食べてると清水さんとか清水さんとか清水さんに襲われるんだもん。

「質問は無いのかい? 用が無いならもう帰ってくれていいよ」

「へ? もう集会は終わりなんですか? アタシたち代表全員が集まる意味があつたのかしら?」

中林さんの言う通り、このくらいの用なら、いつもみたいに僕や雄二たちを呼べば済んだはずだ。

「ああ。振り分け試験ではちよつくら意外な結果も出たしねえ。軽く顔合わせでもしておいて損はないだろう?」

「それだけか?」

雄二が足を前に投げながら学園長を睨んだ。まるで強請をする不良みたいだ。

「アンタがそんなやわな理由で呼びつける訳もねえ。もうちょい理由があるんだろ?」

「……本当にお前はこういうときに頭が回るねえ。」

ああ、そつだよ。アタシがアンタらを呼んだのには他に理由があるんだ」

「……どんな理由、ですか」

「それはね」

「

学園長は眼鏡をくいつとあげて、口をゆつくりと動かした。

「ただ単に、吉井がボコられる姿を学園中に見せびらかしたかっただけさね」

「肖像権の侵害だ!!」

「(ポチッ)これで動画が全クラスに行き渡ったよ」

なんでこの学園は人権侵害が日常的に行われているんだろう。

「さあ、もうアタシはすることがないよ。今の内言っておきたいことは無いのかい?」

「では学園長、僕から一つよろしいでしょうか」

そうキリッとした振る舞いで名乗ったのは、

「なんだい、Dクラス代表」

平賀君だった。

「この場を借りて、宣言させて頂きます。我々DクラスはFクラスに試召戦争を申し込みます」

問十九（開戦）

「アキ！ 木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ってたわよ！」

「ええっ！？ くそっ、せめて新校舎まで突っ切れると思ったのに！」

僕が代表として指揮をとる、記念すべき初陣は苦戦を強いられていた。

「単純に戦力差の問題よ。いくら試召戦争に慣れているからって、Dクラス相手じゃギリギリ互角ってところね」

美波の言う通りだった。雄二ではなく僕が指揮をするために作戦は正面突破になりがちな上、ムツツリー二がいなかったために情報戦というわけにもいかない。

「で、結局作戦は当初のままなの？」

「うん。秀吉たちには踏ん張って貰って、清水さんと久保君が回復試験を終えるのを待つしかない」

「……去年もそんな作戦だったわね。あのときは瑞希だったけど」

少し戻って、学園長室。

「試召戦争は、本日の昼休みから行います」

「ちよつと待ってよ！ な、なんでDクラスがFクラスに攻めてくるのさ!？」

そもそも、僕らはDクラスとはそんなに敵対していないはずなのに。去年もあまり関わりがなかった気がする。

「理由は、例えば去年のお返しとか景気付けとかはあるけど、一番の理由は、」

平賀君が人指し指をピンと立てた。

「『イレギュラー要素を排除すること』だ」

それは、当然Fクラスのことを指しているのだろう。

「久保君、清水さんという新戦力。演劇部の木下秀吉。試召戦争における去年の実績。そして何より、『新指揮官・吉井明久』。

おそらく、全員が能力をフルに発揮したらFクラスはAクラスに匹敵します」「それを、結束が強まる前に消しちまおうって魂胆か。随分と試召戦争に積極的だな、平賀」

平賀君がフンツと鼻を鳴らして僕と雄二を一瞥した。

「積極的？ その逆だよ。今年は受験なんだ。変な奴らに振り回されないように、先に手を出しておくだけさ。元々仲の良かった君たちには出来ないだろ？」

変な奴ら？ それは多分僕みたいな常識人じゃなくて雄二みたいな奴なんだろうけど。

「じゃあ僕も、何か宣言しちゃおうかな？」

「……………明久？」

はつきりとした声を出すために、大きく口を開ける。

「我々Fクラスは」

「美波、戦況はどう!？」

「みんな頑張ってるけど、あと五分持たないわよ!」

戦闘に参加するため、振り分け試験で手を抜いてしまった久保君と清水さんには一科目か二科目の回復試験を受けるように言っている。戦争が始まってから大体50分だから、せめてあと10分は確保してあげたい。

回復試験が終わり次第、強引に攻める予定だ。

「アキ。こうなったら、今の内に一か八か突っ込んだ方がいいんじゃないの?」

色々考えていたら美波が進言してきた。

「いや、せめて久保君だけでもまともな状態にしたいんだ。それまで耐えた方が確実だと思うし」

「それならウチの数学でも同じことでしょ? これ以上戦死者を増やすとやりにくくなるわよ」

うつ……………美波の言うことも一理ある。

「だけど、美波にはやって欲しいことがあるんだ」
「？ 何か特別な役目？」

そう、それは付き合いの長い美波にしか頼めない事だ。

「うん。僕をずっと守って欲しいんだ」

力のある者が攻めるのもいいけど、近衛兵として本隊に携わる人間も必要だ。

「吉井君。生物と世界史の回復試験が終わったよ」

「あ、久保君！ よし、Fクラス本隊、Dクラスへ突撃だ！」

『おおーっ！』

「お姉さま、お気を確かになしてくださいませ！」

「……………ハッ！？」

「一斉突撃だそうですね。お姉さまもはやく行きましょう」

「うん……………わかったわ……………」

「どうなさったのですか？ 〴〵様子が変ですよ？」

「美春……………ウチさ……………」

「はい」

「もしかして、告白、されちゃったのかな……………？」

問二十（終戦）

「あ、あそこに秀吉たちがっ！ 久保君よろしく！」 「わかった。田中先生、久保利光が召喚します。試獣召喚！」

『Fクラス 久保利光

世界史 276点

vs

Dクラス 鈴木一郎

Dクラス 笹島圭吾

世界史 87点&92点』

「な、なんだって!？」

「なんでまたFクラスにこんな化け物が！」

久保君の回復が予想外に早かったのか、Dクラスの部隊には混乱している様が垣間見えた。

「明久！」

「秀吉、応援に来たよ」

前線で指揮を執ってもらっていた秀吉と合流。

これでFクラスの主力が揃ったっ！

「くっ！ ここは退くぞ！ 全員遅れるな！」

Dクラス部隊長の命令で、敵全員がDクラスへ引き返して行った。

「Fクラス、全員追え！」

一旦退いて体勢を整えてもいいが、久保君がいる以上は攻めてケリをつけた方がいい。

「明久よ、ちよつと無茶ではないかの？」

「無茶かも知れない。でも……僕はバカなんだから考えるより進んだ方がいい！」

躊躇う秀吉を振り切つて走っていると、Dクラスの教室についた。すぐにFクラス全員も到着した。

「覚悟はいいか皆！ 戦死覚悟で突っ込んで、平賀君までの道を開くんだ！」

「せ、戦死覚悟？」

「俺たち、特攻隊かよ……」

『戦死覚悟』というフレーズに恐れをなしたのか、Fクラスには動揺が走つた。僕だって戦死は嫌だ。だけど皆には犠牲になつてもらうしか他はない！

「ふざけるんじゃないやありません！ 美春たちをなんだと思ってるんですか！」

集団の後方から清水さんの声が聞こえてきた。横には美波がいる。

「あなたは、兵を動かすのが下手くそです。美春がお手本を見せませー！」

「お手本じゃと？」

「ええ。……いいですか皆さん。あの平賀という男は」

「

清水さんがゆっくりと溜めをつくる。僕はそれを静かに聞いていた。

「 Eクラスの三上美子と恋仲です」

『 Let's PARTY!!!!!!』

『 I see!!!!!!』

ガシュツガシュツガシュツ

「道を開くどころか焼け野原を作っておるぞ」

「ふふっ、上出来です」

清水さんがモーゼの生まれ変わりに見えるよ。

「くそっ！なんてことだっ！」

教室の中では平賀君が地団駄を踏んでいた。

「じゃあ久保君、よろしく」

「うん。では、田中先生。召喚許可を」

「……僕たちの…… Dクラスの、敗けだ」

Fクラスの隣の空き教室で、戦後対談が行われている。集まったのは、Fクラスの主要メンバーと平賀君だけ。

「どうするんだ、吉井。僕らの設備と交換するか?」「いや、その必要は無いよ」

「ど、どういふことじゃ、明久」

「いや、例の協定にDクラスも参加してもらおうと思ったからさ」

「……なるほど。名案じゃのう」

ここで、あの場にいなかった人に説明をした。

「僕は吉井君の言うことなら反対しないよ」

「……悔しいですけど、ブタ野郎にしてはまともな意見です」

皆も根本君のことは気にしていたみたいで、難なく賛成してくれるみたいだ。

「美波は? 賛成?」

「……」

「……美波?」

「……え? あ、うん。それでいいわよ」

なんだろう、戦争の途中から美波がしおらしい。

「受験に影響しない範囲なら同意するよ。Dクラスには説明しておく」

「ありがとう、平賀君」

よし、これでやっと試召戦争が終わった。後で雄二たちに協定のことを言っておこうとしよう。

「そうか……Fクラスの勝利、ね」

『……どんな感じ？』「まあまあ予想通り、ってところかね」

『……それはよかった』

「おいおい。この根本恭二と組んでるんだから、もう少しテンション上げるよ」『……上げられるわけがない』

「そうだな、お前は脅迫される立場だもんな

『ムツツリー

二』

問二十(終戦)(後書き)

次回から清涼祭編になります。

問二十一(企画)(前書き)

清涼祭編開始します

問二十一（企画）

「……雄二」

「なんだ？」

「……『如月ハイランド』って知ってる？」

「知ってるも何も、去年お前と行ったじゃないか」

「……じゃあ、そこで『一周年記念イベント』が開かれるのは知ってる？」

「うん？ それは知らなかったな。そうか、あれからもう一年経つのか」

「……それで、そのイベントが開かれたら、私と」

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そのイベントが開かれたら」

「……うん」

「姫路たちと行ってこいよ」

「……握力には自信がある」

「ぐあああつ！ アイアンクローはよせっ！」

「……じゃあ、巴投げ」

「お前にも多少のダメージがいくぞ、それ」

「……私と雄二、二人で一緒に行く」

「いや、込むから無理だぐぎゃあっ！」

「……それなら、プレミアムチケットがあつたら行ってくれる？」

「プ、プレミアムチケットだと？ あれは相当入手が困難らしいぞ？」

「……行ってくれる？」

「んー、そうだなー、手に入ったらなー」

「……本当？」

「あーあー。本当本当」

「……それなら、約束」

「ああ、約束な」

「……それと、雄二」

「うん？ まだ何かあるのか？」

「……うん、清涼祭の召喚大会に、私と出て」

「召喚大会？ 去年みたいに木下姉と出たらいいじゃないか」

「……優子は今年、出られないみたい。それに、雄二と出たい」

「へーへー、しゃあねえな」

「……もし手を抜いたら」「抜いたら？」

「……この婚姻届けを役所に提出する」

「全力で優勝を目指そう」

「さて、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけないんだが」

ホームルームの始め、Fクラスの担任である鉄人が僕らを見下ろしながらそんな宣言をしてきた。

「代表を中心に、出し物を決めてくれ」

え？ 僕任せ？

「わ、わかりました」

鉄人に代わって壇上に立つ。鉄人はというと、教室の隅の椅子に座って威圧していた。去年からこのクラスに関わっているだけあって、警戒には余念がない。鉄人が警備してくれるなら暴走は避けられる。僕は笑顔で皆に対応するでしょう。

「じゃ、美波。手伝って」「へっ？ ウ、ウチなの？」

珍しく美波が動揺している。試召戦争の時からなんだか様子が変わる。

「うん、去年みたく仕切ってくれると助かるな」

「じ、じゃあやってあげるわよ」

すたすたと壇上に上がる美波。僕は板書に移るとするかな。

「それじゃ、やりたいものがあつたら言ってくれる？」

『『『木下のコスプレが見たい』』』

「何故揃いも揃ってその意見なのじゃ！」

僕も見たくない訳じゃないけど、この立場としては皆の意見は面倒だ。

「そうじゃなくて、お店の種類を言っつてよ。意見があつたら手を挙げてくれる？」

すると何人かが挙手をした。

「はい、久保君」

久保君なら真面目だし、まともな意見が出てくるだろう。

「僕は皆の案をまとめてみたんだが……」

おお、流石久保君！ あの変態たちの意見をまともなものに変えてくれるというのか！

「僕は『男装喫茶』を推奨したい」

どうしよう。僕の常識がベルリンの壁の如く崩れつつあるよ。

「ドラマや漫画などでは、美人が男装して男子とともに生活する、という形式が多数存在する。特にコリアン系統ではその傾向が顕著らしい。男子がほとんどであるFクラスならではの面白さがあると思うのだが」

ま、まあ真面目な久保君らしく言ってたけど、それって美波と清水さんと秀吉が男子の制服を着るだけだよな？

「どうだろう吉井君」

「と、とりあえず書いておくね」

久保君が変なことを言い出さないうちに板書を済ませる。えーと確か、

『男装喫茶【コリアン】』

「他には？ えーと、須川」

「去年同様、中華喫茶を推奨したい」

そのあと『食の起源云々』と続いたけど、結局去年と同じような感じらしい。板書板書っと。

『中華喫茶【ヨーロッパ】』

「あとは？ ……え？ 美春？ 意外ね」

「はい、美春から提案があります」

毅然とした態度で挙手しているのは、意外にも清水さんだった。

「美春は、『ラ・ペデイス』のミニチュア版をやりたいです」
「なるほどのう」

そう言えば清水さんの実家は喫茶店を経営していたんだった。店長がバーサーカーであること以外はまともなお店だから、ノウハウとかは知り尽くしているだろう。

『ラ・ペデイス【バーサーカー】』

うん、これでオツケー。

「……吉井を代表にしたのは間違いだったかも知れんな」

クラス表（前書き）

クラス分けの詳細です！

誰がどのクラスか混乱しそうなときは見てください。

クラス表

クラス一覧（は代表）

三年生

【Aクラス】担任 高橋

霧島翔子 木下優子 工藤愛子 姫路瑞希 根本恭二

【Bクラス】担任 遠藤

坂本雄二 小山友香

【Cクラス】担任 大島

ムツウニ
土屋康太 新野すみれ

【Dクラス】担任 布施

平賀源二 玉野美紀

【Eクラス】担任 船越

中林宏美 三上美子

【Fクラス】担任 西村

吉井明久 木下秀吉 久保利光 島田美波 清水美春 須川亮（

その他FFF団）

二年生

【Aクラス】

常村越美 夏川冬美

吉井明久のコメント

「本当に（中林さんと船越先生のいる）Eクラスにならなくて良かった！！」

問二十二(決定)(前書き)

総合評価100突破!

これからも引き続きよろしくお願いいたします。

問二十二（決定）

「はい、じゃあこの三つの中から決めるわよ。それじゃ、男装喫茶に賛成の人！ はい、次は中華喫茶！ 最後、喫茶店『ラ・ペデイス』！」

少々騒がしい中、美波が挙げられた手の本数をカウントし始める。結果、

「Fクラスの出し物は喫茶店『ラ・ペデイス』にします！ 全員、協力するように！」

中華喫茶と競ったけど、僅差で清水さんの案が通った。やっぱり去年と同じ企画だと味気ないよね。

男装喫茶は久保君と、なぜか秀吉が推してたけど。

「それじゃ、厨房とホールに分かれてもらうけど……この中で料理できる人って、どのくらいいたかしら？」

そう言えば今年はムツリー二と雄二がいない。去年は須川君の飲茶とムツリー二の胡麻団子が主力だったから、誰かが代わりに料理しなけりゃならないよね。

「アキ。アンタ、クレープとか作れる？」

「うーん。やったことないけど教われればなんとか出来るかも」

前にあの店でバイトをしたことがあるから、ある程度手順は分かるつもりだ。あとは料理本片手にやれば食べられるものは作れるだ

るうじ。

「お姉様。出来ましたら、美春は接客に従事したいです」

「うん。じゃあ、厨房班はアキと須川のところ、ホール班は美春のところに集まって！」

いつの間にか須川君がお手伝いにされていた。

「それじゃ、ワシはホールにしようかの」

「僕は厨房に回ろう」

秀吉は料理が苦手だから接客の方が良いだろう。それに、バイトでも木下さんに折檻されるまではかなりいい仕事をしていたし。

久保君は料理得意なのかな？ だったら助かるな。

「久保君ってさ、料理上手なの？」

「いや、普段は全くしない」

久保君の行動原理がつかめない。

「じ、じゃあ何で厨房に？」

「うん、僕はあまり愛想がよくないと自覚していてね。接客をするくらいなら、厨房での下準備程度の手伝いをしたほうがいいと思ったのさ」

「な、なるほど」

確かに、接客が苦手なら厨房に回っても構わないけど……狭い厨房にはあまり人数を入れたくないと言うのが本音だ。

「でもさ、久保君みたいなカッコいい人なら、女生徒がたくさん来

てくれそうだからホールのほうがいいと思うな」

「島田さん、僕をホールに回してくれ」

久保君の行動原理がつかめない。

「ところで、美波はどっちに回る？」

「え、ウチ？ うん、どうしよう……。アキはどう思う？」

「そうだなあ……」

正直、美波はかわいいからホールに回って客寄せして欲しいんだけど、厨房の人数も少ない。

えっと、現在の人事は、

- ・鏡で身だしなみを整える久保君
- ・皆にメイド服姿を強要される秀吉
- ・「オネエサマトオナジホールデハタラキタイデス」とプレッシャーをかけてくる清水さん

うん、

「美波はホールで頼むね」

クラスの秩序が危険だから。

「う、うん。そうするわ」

心なしが顔が赤い美波。本当に最近の美波はどこか変だ。

「吉井、ちょっといいか」

声のした方を振り向くと、鉄人が仁王立ちしていた。

「仏像？」

「歯を食い縛れ」

今のビンタは理不尽な気がした。

「全く……吉井、学園長がお呼びだ」

「え？ 学園長が？」

「早く行ってこい。坂本も同席だそうだ」

「げ、雄二も？」

あのババア、またなにか余計なものを押し付ける気だな？

問二十三(腕輪)

「失礼しまーす」

「おや、吉井かい。入りなよ」

「待ちくたびれたぞ明久」「……………遅い」

「あれ？ ムツツリーニも呼ばれてたの？」

「……………(コクコク)」

そっか、僕がビリか。でも面倒くさがりやの雄二にまで負けるとは。

「雄二。早いんだね」

「ああ、うちのクラスは清涼祭の出し物で盛り上がったな。

かつたるいから小山に任せて出てきたんだ」

「ふーん」

まあ、小山さんって気が強いからリーダーシップについては問題ないだろうし。

「さてと、ババア、早く用件を聞かせてくれよ。どうせまた召喚大会のことなんだろう？」

「ふふ、察しがよくて助かるよ」

学園長はなにやら机の中をガサガサと漁っている。

「これを見な」

そう言って乱暴に取り出したのは、

「……………腕輪？」

僕らの持っている『白金の腕輪』とよく似た腕輪だった。色がやや褐色がかっている以外はそっくりだ。

「今年の召喚大会の優勝賞品だよ。前に何度かアンタたちに実験してもらっただろう？ その集大成さね」

あのホンを喋ったり、子供を作れるやつのことか。酷い目に遭ってばかりで、あまりいい印象はないけど。

「で、この腕輪にはどんな能力と欠陥があるんだ？」「アンタはもう少し言い方ってもんを勉強したらどうだい！？」

あからさまに欠陥と言われて激昂するババア。そりゃ誰でも自分の作品を貶されたら怒るよね。

「ふう…………、まあいいよ。この腕輪はね、『赤金の腕輪』と言って前にやってもらった子供を作る実験を応用したのさ。で、その内容はと言うとね…………やったほうが早いね。坂本、これを着けてみな」

雄二が言われた通り、左腕に着ける。ちなみに右腕には『白金の腕輪』が着けられていた。

すると学園長が召喚出来るように、部屋全体にフィールドを張った。

「召喚しな」

「よし、試獣召喚！」

例の幾何学的模様と共に雄二の召喚獣が現れた。

「まだ装備は変更されていないんですね」

「いちいち揚げ足を取るんじゃないよ。召喚大会と同時に変更する予定さね」

「……………待ち遠しい」

あれ？ ムツツリー二が装備に興味を持つなんて珍しいな。

「さあ、吉井も召喚しな」「あ、はい。試獣召喚！」

ポンツ、と音を立てて現れた僕の召喚獣。もうすぐこの木刀とも別れられるのかなあ？ いや、別れなきゃ困る。色々と。

「坂本は土屋の体に触ってコードを唱えるんだよ。コードは『交雑』スクランブル」

「了解つ。スクランブル『交雑』！！！」

雄二がムツツリー二の肩に触れて叫んだ。すると雄二の召喚獣が光って、すぐにその光が消えた。

「あれ、なんか雰囲気かわったね？」

そこには黒い髪をツンツンに立てて、学ラン、小太刀を装備している雄二の召喚獣の姿があった。

「ふーん。これが雄二とムツツリー二の子供か」

「……………気持ち悪いから止めてくれ」

いつも僕のことを同性愛者扱いしてるんだから、このくらいの反撃は見逃してくれるだろう。

「なるほど、融合か」

「あのね坂本。融合なんてあまつちよろい抽象的で単純なものじゃないよ！ 本人たちのDNAを瞬時に計算して、遺伝子レベルで細かい交雑をおこなうシミュレーションなんだからね！」

自分の研究結果を一言で済まされたのが気に入らないのか、執拗に雄二を問い詰める学園長。まったく歳の割には子供っぽいなあ。

「で、これに何の意味があるんだ？」

「ふん、点数を見てみな」

『Bクラス 坂本雄二

+Cクラス 土屋康太

古典 231点+173点』

「戦闘力は二人の点数を合計したもののなのか」

「それだけじゃないさね。まだこの腕輪の本領がお披露目されてないよ」

学園長が楽しそうに気持ち悪い笑みを浮かべている。……いやな予感。

「坂本、左手を広げて前に突きだしな」

「こっか？」

雄二が言われたように左腕を動かした。

「ああ。そのまま手を強く握ってみなよ」
「ふんっ！」

『……………加速っ！』

「……………ハ？」

問二十四（赤金）

『Fクラス 吉井明久

古典 0点』

なんでいつも僕はこんな損な役回りなのさっ!?

「これは……凄いな」

「……………俺の能力が」

君たち。ちょっとは僕の存在を気にかけてもいいんじゃないかね？

「わかってもらえたかい？ この腕輪は、交雑した相手の持つ腕輪の力を使用することが出来るんだよ。

ルールが細かいからこれを見な」

『赤金の腕輪発動条件

・交雑した召喚獣の合計点数が400点を越えていること

・使える能力は、交雑先の召喚獣の持っていたものに限る。腕輪側の召喚獣がもたら能力を持っていた場合、その能力は使えない。
・交雑先の召喚獣の能力が判明していなくても使用可能

・腕輪発動中は、交雑先の相手は召喚が出来ない

・能力は、左手を強く握ることで発動可能』

「なるほどな、こりゃ面白い。身を呈してまで実験に参加した意味があっただぜ」

実際酷い目に遭ったのは僕がメインだったことを忘れてるなコイツ。

「前に『ただの殴り合いじゃ戦争が地味すぎる』って誰かが言ってたからね。この腕輪を使えば、平均200点の科目で能力が使えるんだよ」

「そ、それって、僕の能力が使えるかもしれないってこと!？」
「……………そういつこと」

400点獲れなくても腕輪の能力が使えるのか……勉強嫌いの僕でさえ興奮しているのだから、勉強が得意な人は俄然やる気が出るだろう。

「今のところ、腕輪を使えるのは、土屋、工藤、姫路、それに霧島だけだろう？ せつかくの試験召喚システムなんだから、派手にしてもらった方がPRにも繋がるんだよ」

去年も建前がどうかよく言う人だったけど、最近はそれが顕著になった気がするな。まあ、経営に無関心で他人に任しちゃうよりいいけど。

「それで、欠陥はどうなんだ？ 俺たちを呼んだってことは、なにか問題があるんだろう？」

「……あんまり言いたかないんだけどねえ……実はこの腕輪、結構エネルギーの消費が激しくてね。一回使っただけでシステムに大きく負荷を掛けるのさ」

「調整はどうにかならないんですか？」

学園長が僕をジト目で見る。わかりきったことを言っな、と目が伝えてくる。

「やったよ。でもね、これだけの能力を腕輪サイズに仕舞い込むと、

どうしてもこれが限界なのさ」

「じゃあどうやって実用化まで持っていくつもりだ？」

雄二の質問に待ってましたとばかりに指をパチンと鳴らす学園長。乾いたいい音が部屋に響く。

「実はエネルギー消費を解決する方法を見つけたのさ」

「なんですか？」

「『白金の腕輪』のシステムを介すことで、エネルギーを格段に抑えられるんだよ」

「それで俺と明久が呼ばれたのか」

「……………俺は何故？」

「もうひとつ、エネルギーを抑える方法があつてね。どうしてもかは分かんないけども、単教科600点を獲れていれば、システムが円滑に機能するらしいんだよ」

このシステムって時々凄く適当だなあ……………。

「用件は分かった。だが、俺は明久とは組めないんだ」

「……………なんで？」

雄二は床にがつくりと膝をついた。

「……………翔子と組まなければ、俺の苗字が『霧島』になってしまうんだ」

世間はそれを婚姻と呼ぶ。

「事情はわかったよ。僕とムツツリー二で組むから」「……………」
（コクコク）

「それじゃ、回収お願いするよ。ああ、それとも一つ。坂本と吉井は『白金の腕輪』を渡しな」
「ど、どうしてですか!？」

あれが無かったら大会で勝てるかどうか怪しくなるよ？

「もともとその腕輪には、一定の点数を獲ったら暴走するっていう欠陥があったろう？今のアンタたちの点数で暴走していないのが奇跡さね。任務遂行のためにも、メンテナンスと改良をしておくべきだろう?。」

成る程。そういうことならこっちも協力しよう。

「ちゃんと清涼祭の前には返してくれよ？」

「確かに預かったよ。もう戻っても構わないさね」

学園長に言われ、僕ら三人が部屋を出た。

「それじゃ、雄二。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「ん？なんだ？」

「やだなあ雄二、もう忘れたの？」

あんなに大切な話を僕たちがスルーするはずがないじゃないかっ。

「……………誰の苗字が『霧島』に変わるって？」

「……………異端審問会は人の幸せを許さない」

その後、屋上で血まみれの雄二が見つかったという。

問二十五（開催）

「今年は美波と清水さんがいて助かったよ。あの二人の統率は貴重だね」

「全くじゃ。見事に雄二の代役を果たしておる」

清涼祭初日の朝。僕らの教室はいつもの小汚い畳と卓袱台をどかして、お洒落な喫茶店に姿を変えていた。

「このテーブルなんて、ラ・ペデイスから借りてきたんでしょ？ やっぱり立派だよな」

「あ、それは美春が持ってきてくれたのよ。お父さんも快く貸してくれたみたい」

そっか。あのバーサーカーも娘のために一肌脱いでくれたのか。何だかんだ言っても父親なんだなあ。

「室内の装飾なら、Aクラスと同じくらい豪華なんじゃない？」

これはもう学園祭のレベルではないだろう。本格的に営業してもいいんじゃないだろうか。

「お姉様っ、お紅茶も完璧ですっ」

「きゃっ」

いきなり後ろから飛び出してきた清水さん。気合いが入っているのか、既にメイド服風のエプロンドレスを身に付けている。

「あ、そうだ。清水さん、クレープを作ったんだけど、試食してくれる？」

そう言っ僕がクレープの乗ったお皿を差し出すと、なにかを警戒するように匂いを嗅ぎ始めた。別に悪いものは入ってないんだけど……。

「……薬品の類いは入っていなさそうですね」

「あはは、食べ物に薬品を入れる人なんているはずが」

ない、と言いそうになったけど、そう言う人物を僕は知っている。

「ま、まあ清水よ。安心して食べるのじゃ」

姫路さんの手料理の恐ろしさを知っている秀吉がクレープを勧める。やっぱりあれは思い出したくないよね。

「……（パクッ）」

清水さんは警戒しながらも、フォークを上手に使って食べてくれた。

「……（モグモグ、ゴックン）」

「どうかな？ ちゃんと再現出来たか自信ないんだけど」

「……」

「えっと、清水さん？」

「美春？ どうかしたの？」

あんまり美味しくなかったのかな？ それとも中の果物が悪くなつてたとか？

「……………（カチャ、スタスタ）」
「え？ 清水さん!？」

感想も言わずに行っちゃうなんて、僕のクレープはよっぽど不味かったのだろうか？

「合格、みたいじゃの」
「美春も素直じゃないわね」
「????？」

よくわからないけど、クレープは食べられないものではないらしい。これでオープンな問題は問題ないだろう。

「あれ？ ここに置いてあったクレープは？」

清水さんが置いて行ったクレープのお皿が見当たらない。おかしいな？

「吉井君、探しているのはこれかい？」

後ろから声がしたので振り返ってみると、そこにはギャルソンスタイルに前掛けのような黒のエプロンをつけた久保君が立っていた。その手にはさっきのクレープのお皿が。そうか、久保君も味見してくれたのか。

「あ、久保君。そのクレープどうだった？」
「凄く美味しいね。僕はあまり甘いものは食べないが、全然問題なく食べられたよ」

その言葉に偽りな無いようで、お皿の上のクレープは綺麗に姿を消していた。

「ありがとう。久保君も制服似合ってるよ」

久保君は雄二ほどじゃないけど背も高いし、なかなかハンサムだからギャルソンの格好はよく似合っている。

「ありがとうアッキー　吉井君」

何故か背中に悪寒が走った気がする。

「それじゃ、美波。これから召喚大会に行ってくるよ」

「あ、うん。行ってらっしゃい」

事前に交渉して、僕がいない間は美波と須川君が厨房を担当してくれることになっている。クレープは作り置きしているので、巻けば出せるように準備しておいた。

「頑張るのじゃぞ明久」

「うん！」

「頑張ってくれ吉井君」

「う、うん！」

誰かこの悪寒の正体をはっきりさせてほしい。

「あ、来た来た。おい、ムッツリーニ！」

特設ステージの下で待っていると、遠方から相方がやって来た。

「……………頑張ろう、明久」

「うん！ 絶対優勝しようね」

そういえば、ムツツリーニと正式にコンビを組んで戦ったことはない。試召戦争では役割が違うし、イベントでも二人でこなしたことは無かった気がする。

「ムツツリーニ、Ｃクラスの出し物って何？」

せっかくコンビを組むんだから、簡単なコミュニケーションくらいとつても構わないだろう。

「……………映画館」

「最前列を予約したい」

僕は財布から二千円を取り出してムツツリーニに突き出した。ムツツリーニの作る映画ならエロいものに違いない。

「……………すまない。脚本は別の奴が書いた」

僕の心拍数を返して欲しい。

「……………監督と編集は俺がやった。出来たら観て欲しい」

そう言ってチケットを二枚出すムツツリーニ。持つべきものは友人だ。

「うん、後で美波あたりと観に行くよ。僕らの喫茶店にも来てね」

「……………（コクコク）」

『それでは、Aブロック一回戦を始めます!! 選手は入場してください!!』

「それじゃ、行こうか」

「……………（コク）」

問二十六（緊急）

『はい、もしもし？』

「あっ、ババア長ですか？」

『その失礼な物言いは……吉井かい？ どうしたのさこんな時間に？』

「どうしたのじゃないですよ！ もうすぐ召喚大会が始まるっていうのに、白金の腕輪を受け取っていないんですけど！？」

『なんだい、それなら明日渡すよ。たった今調整が終わったところさね』

「終わってるなら今下さいよ！ どこにいるんですかっ？」

『ロンドン』

「なんだロンドン　　ってええっ！？」

『大きな声を出すんじゃないよ。最短時間で調整をするには、設備の良いロンドンの研究所でやるしかなかったんだ。明日の午前七時に渡すよ』

「そんな待てませんよ！　　ってことは、決勝に行くまでは腕輪なし

で勝ち上がれってこと！？ アンタどんだけ無理な要求してるんだ
！」

『物理的なもんなんだ、仕方ないだろう？ アタシはこれから仮眠
をとるから、頑張りなよ？』

「畜生っ！ それなら延々と騒音を鳴らして邪魔してやるっ」

『やってもいいけどね……これ、国際電話だよ？ 携帯からかけて
いるなら、電話代が馬鹿にならないと思うんだけどねえ』

「お休みなさい、学園長」

「えー。それでは、召喚大会一回戦を始めます」

現国担当の坂田先生が宣言する。当然勝負科目は現国となる。

「ああ……気が重いよ」

ババアが白金の腕輪の調整に遅れてしまい、腕輪なしで戦わなければいけないというのも原因だけど、本当の理由は、

「吉井！ 今日があんたの命日よ！ 覚悟してなさいっ！」

対戦相手が中林さんだということだ。

「代表、ちよつと落ち着きなさいよ？」

「なに言ってるのよ三上！ 吉井を目の前にして殺意が湧かないわけがないでしょ！？」

せめて敵意が湧いてくれる程度なら助かるんだけど。

「では、召喚してください」

「「試獣召喚っ！」」

幾何学模様が広がって、相手の召喚獣が呼び出される。

『Eクラス 中林宏美

&Eクラス 三上美子

現代国語 134点&129点』

「あれ？ 中林さん。装備が変わってくない？」

中林さんの召喚獣は、去年と同じくバット、キャッチャーミット、プロテクターという野球装備だった。特に何も変化がない。

「よく見なさい」

「？」

どこか変化しているのだろうか？

「ミットが古田モデルになったわ」

「雑魚だ！」

ハッ。しまった！ つい本音がっ！

「吉井クロス」

「代表！？ 目から赤い涙が流れてるよ！？」

ああもう、怒らせちゃった。

「じゃあムツツリーニ、僕たちも」

「……………（コク）」

「試獣召喚！」

「……………試獣召喚っ！」

『Fクラス 吉井明久

& Cクラス 土屋康太

現代国語 119点&143点』

まばゆい光を放ち、魔方陣から現れたのは

「なんでまた学ランに木刀なのさっ!？」

一貫して不良装備の僕の召喚獣だった。

「あーっはっは! 傑作! 傑作だわ!」

「もうっ笑わないでよ!」

あのババアめ。裏で手を回したな?

「……………猿飛佐助、と言ったところ」

対してムツツリーニは順当に向上したようだ。アニメなんかでよく見る忍者の格好をしている。

「なんでムツツリー二ばかりいい思いを……」

「……………明久、自分の召喚獣をよく見る」

「へ？」

学ランと木刀以外に変化しているのだろうか？

「……………木刀の柄の所に『洞爺湖』と彫ってある」「些細な変化だ！！」

しかもよりによって某少年マンガのオマーヂュ！？

「えー、そろそろ試合を開始して下さい」

坂田先生の催促もあり、僕は勝負を始めることにした。

「覚悟なさい吉井！」

中林さんの召喚獣がダツシユで僕の召喚獣へと向かってきた。手に持った金属バットが振り下ろされる。

「よつと」

「っ！ ちょこまかっつ」

だけど、去年混戦を切り抜けてきた僕たちにとっては、この程度なら相手にもならない。

「せいっ」

「きゃっ！？」

足払いを掛けると、中林さんの召喚獣は面白いようにスツ転んで

くれた。

あとは、

「いよいよおおっ！」

何度か木刀を振り下ろすだけだ。

『Eクラス 中林宏美

現代国語 0点』

「きゃっ！」

「……………勝負あり」

どうやら向こうも終わったようだ。

「えー。勝者、吉井・土屋ペア」

先生の気だるそうな声が会場に響いた。

「明久。試合で疲れてるところ申し訳ないが、急いで教室へ来てくれんかの？」

特設ステージから降りると、息を弾ませたようすの秀吉がやって来た。

「あれ？ 喫茶店で何かあったの？」

「うむ。少々面倒な客がおつての。すまぬが、話は歩きながらで頼む」

「あ、うん。了解」

先を急ぐ秀吉に続いた。ムツツリーニもついてきてくれるみたいだ。

「……………何かあった？」「うむ。営業妨害じゃ」

「今年も？ 誰が？」

秀吉が軽く唇を噛んだ。言いくいことなのかな？

「……………あの常夏コンビが、一般客として来ておるのじゃ」「ええっ!?!」

なんで大学生になってまで邪魔をしてくるのさっ？

「今、島田と久保が対処しておるのじゃが、厄介なことにもう……増えとるのじゃ」

「はいっ？」

「……………何が？」

秀吉の精悍な顔が、まるで姉さんの荷物を無理矢理持たされた僕のような顔になっていた。

「『常夏カルテット』じゃ」

問二十七（常夏）

「おい、責任者呼べ！」

「俺のクレープのバナナが黒くなりかけだ！」

「ワタシのクレープ、クリームが少ないです」

「アイスマイルクはまだツスカ!? 頼んでから八秒たってるツス！」

「あの連中じゃ」

「な、なるほど」

「……………確かにカルテット」

教室の外から様子を見てるんだけど……………中では常夏コンビと少女二人が理不尽な要求を繰り返していた。その横で美波と久保君がひたすら頭を下げている。清水さんは他のクラスメートを仕切ってたなんとか店を維持してくれていた。

「明久、一先ずお主が対応してくれ」

秀吉に背中を押されて教室に入る。

「おっ、吉井じゃねえか」「久しぶりに会う先輩に何か一言ないのか？」

常夏コンビがニヤニヤとこっちを見ている。

「アキ……………」

「大丈夫だよ、美波」

「ここは責任者として、大人の対応を見せるべきだ。確か、坊主の先輩っていったら、」

「頭にブラジャーを着けていた夏川先輩でしたよね」「ホントに失礼だぞ!？」

これがクレームか。

「あ、頭にブラジャーって……マジツスか？」

「流石に同調できないです」

仲間の女の子たちも懸念を示す。

「い、いや! 嘘に決まってるだろ?」

「全部このバカの出任せだつての!」

しどろもどろになって否定する常夏コンビ。やれやれ、否定すると逆に怪しくなるんですよ?

「ところで、お連れの女の子はどちら様ですか?」

「見てわかるだろ?」

僕は女の子たちに目を向けた。二人とも美少女と言えるくらい顔が整っていて、お揃いのメイド服を着てる。

さつきクリームについて文句を言っていた方は、身長がおそらく清水さんくらい。髪は黒く、セミロングという極めて一般的な髪型をしていた。

アイスミルクについて何か言っていた方は、身長は清水さんよりも少し低い位だろうか。茶髪の巻き毛で、外ハネの髪が印象的だ。

ふむ、この情報から察するに

「彼女だとしたら先輩方はブサイクだから釣り合わないし」

「「んだとコラアツ!?!」」

あ、やばっ。また怒らせちゃったよ。

「あのな……コイツらは、俺たちの妹だ」

「ああ、妹さんね」

って

「「「えええっ!?!?!?!」」」

教室中で僕と共感してくれる人が結構いるみたい。

「ちなみに、髪が黒い方が常村の妹で、茶髪が俺の妹だ」

「嘘だっ。ブサイクな常夏先輩たちの妹がこんな可愛いわけがない

っ

「「表出る」」

「……………そこまで」

「ムツツリーニ?」

振り返ると、一枚の写真とボイスレコーダーを持った親友が立っていた。

「ああ? 引っ込んでろ」「取り込み中だ。帰れ」

彼をあしらう常夏コンビ。でも、その判断は間違っている。何故

なら、

(ピラッ)

「……………これをネットにアップされなくなかったら帰れ」

「うわあああっ！」

「おい、夏川！？ どこに行くんだ！」

彼は坊主先輩がゴスロリ服を着ていた写真を保持しているからだ。

「てめえ、相棒になんてことしやがる！？」

「……………アンタはこれを聞け」

(カチッ)

『常村という先輩はきらいじゃ！ 話もしとうない！』

「き、木下！？ すまねえ！ 悪さしねえから話を聞いてくれ！」

ボイスレコーダーに録音された秀吉の声を聞いたモヒカン先輩は、
凄い勢いで教室から出ていった。

「さてと、残るは」

「ひっ！」「ひっ！」「ひっ！」

取り残された女の子たちは教室の隅で小さくなっていた。

「とりあえず君たち、話しようか？」

「ひっ！」

茶髪の女の子が怯えたようにこっちを見た。とても話を聞ける状態じゃない。

「明久よ。場所を変えてはどうかの？　ここじゃその子らが怯えて話にならんし、お客様の迷惑にもなる」「吉井君、木下君の言う通りにしたほうがいい」

秀吉と久保君に言われたということは、それが正しいことなのだろう。

「うちたちでお店はなんとかするから行ってらっしゃい、アキ」「ありがと、美波」

これじゃあ誰が代表かわかんないや。

「じゃ、二人とも付いてきて」
彼女らは怯えながらも、ゆっくりと立ち上がって歩き出した。

「となりのEクラスは、『スポーツ・カフェ』？」

中を覗くと、チアガール姿の店員と、色んなユニフォームを着た生徒が接客をしていた。

「へえ、面白いな。ちょっと入ってみようか」

『代表、大丈夫？』

『フフフ……吉井なんか……吉井なんか消えちゃえばいいのに……（ブツブツ）』

駄目だ、生死に関わる。

「ほ、他にしよう」

「えっと、Dクラスは『こすぶれ きつさ』？」
男子からしたら凄く魅力的だけど……。

『玉野さん……そのお姫様みたいなドレスは何？』

『あ、平賀君！ これはアキちゃんが来てくれたら是非着せたいと思つて！』

『本人の意思は関係ないんだね……』

駄目だ、社会的に死ぬ。

「ほ、他に行こうね」

Cクラスは、

『シンジ。この前は鈍器で襲いかかってゴメン。俺の愛を受け入れてもらえないと思つたら、ついカツとなつて……』

どうもまともじゃないし。

『さあ、坂本雄二くんは十六連勝中！ 彼にアームレスリングで勝てる猛者はいるんでしょうか！？』

「いるんでしょうか、じゃねえよ小山！ 俺がいないうちに勝手な

企画作りやがって！ 後で覚えてろ！？」

今なら砂漠の中でオアシスを探す人の気持ちがわかる気がする。

「結局Aクラスにお邪魔するしかないみたいだね。二人とも構わない？」

「は、はい」

Aクラスならまともな経営をしているだろう。
綺麗に修飾されたドアを開けて中に入った。

「いらっ……明久君？」

問二十八（再会）

「あ、姫路さ……ん？」

店に入った僕たちを出迎えてくれたのは、驚くことに去年クラスメイトだった姫路さんだった。彼女は綺麗なフリルのついたドレスを着ていて、そうなんかこう、一段と……とても、輝いて見えた。

「お、お久しぶりです明久君　　じゃなくて、いらっしやいませご主人様、お嬢様」

久々の再会に素に戻ったみたいだけど、立場を思い出して接客に移る姫路さん。やや天然なところはAクラスに入っても変わらないようだ。

「ところで、そちらの可愛いらしい女の子たちはどなたですか？メイド服がとても似合ってますけど」

どうしよう。姫路さんの背後からどす黒いオーラが見える。

「こ、この二人は常夏先輩たちの妹さんだよ」

「へえ、あの先輩方にこんな可愛い妹さんがいらっしやっただんですね」

一瞬でオーラが消えた。僕にとっては驚愕の事実だけど、姫路さんにとってはちょっと意外なことの一つらしい。

「では、お席の方へご案内します」

姫路さんに連れられて、窓際のテーブルに着席する。

「ご注文が決まりましたら、スタッフをお呼びください」

「ありがとうございます。お仕事頑張ってくださいね」

「はい、ゆつくりしていたださいね、明久君」

姫路さんはペコリとお辞儀をしてトコトコと業務に戻っていった。うん、なんだかとっても安心したよ。

「じゃあ、何か頼もうか。えっと」

目の前の女の子たちに話しかけて気づく。そういやこの子たちの名前すら聞いてなかったよ。

僕の言いたいことが伝わったのか、セミロングの女の子 モヒカン先輩の妹さんがおずおずと手を上げた。

「ワ、ワタシ、二年Aクラスの常村越美と言います。に、兄さん
じゃなくて、兄と一緒に大変失礼なことをしてかしまして、すみ
ませんでした」

「ア、アタシも同じく二年Aクラスの夏川冬美ツス！ 兄貴の分も
謝りますから、吉井先輩、ここはどうかご勘弁くださいツス！」

モヒカン先輩の妹さんに続いて、坊主先輩の妹さんも立ち上がって謝罪してきた。ひとまずこの子たちのことは『越冬コンビ』とくくっておこう。まあ、二人の気持ちはよく伝わって来たんだけども、周りのお客さんから見られてすっかり注目の的だ。

「気持ちはわかったから頭を下げてくださいませんか？ これじゃお店に迷惑がかかっちゃうよ」

「す、すみません」
「失礼しまッス」

二人はまるで面接を受けているかのように緊張している。なにをそこまで怖がっているのだろうか。

「すみませーん。注文いいですか？」

「はい、なにがいいですか明久君」

呼んでから間もないのにすぐに飛んできた姫路さん。まるで僕が注文をとるのを待ち構えていたみたいだ。

「シフォンケーキを二つ、アールグレイを二つ、塩水を一つくれるかな？」

「厨房の方はメニューを聞いただけで明久君が来たって解っちゃいますよ？」

「そっか、じゃあ砂糖水に変更出来るかな？」

「そういう問題じゃないと思いますけど……」

なんだかよく分からないけど、注文をとった姫路さんが厨房へいったところを見ると問題ないようだ。

「よ、吉井先輩。勘弁してください」

「ケーキ代も払うツスから……」

「ねえ二人とも。そんなに怖がらなくてもいいよ？　ただ、なんで僕たちのお店の邪魔をしたのか聞きたかっただけだから」

「へっ？」

二人はかなり面喰らっている様子であった。何か僕に危害を加えられるとも思ったのだろうか。

「ワ、ワタシたちの服に興味があつたんじゃないんですか？」

「てつきりそのために連れてこられたと思つたんですけど……杞憂でしたか」

「服？ そのメイド服がどうかしたの？」

「……ワタシたち、兄さんたちから聞いたんですけど……」

「吉井先輩は『他人のメイド服を無理矢理脱がせて着るのが趣味だ』って」

「って僕はそんな変態じみた趣味は持ち合わせてなんかいな「本当ですか明久君！？」いに決まつてるでしょ 姫路さんまで！！」

頼んだ品を運んできたものを落とさんばかりに驚いている元クラスメイト。

それより初対面の後輩にまでそんなふうに使われてるなんて……僕の社会的な立場ってどうなってるんだらう？

「（スチャ）んー、多分それはあの先輩たちが情報を捏造したんだろうね。吉井君は変態だけど、流石にそこまでエッチじゃないよ」「工藤さん、いきなりの登場でフォローはともありがたいけど僕の前提条件は変態なの！？」

相も変わらず神出鬼没な人だ。油断もスキもありやしなないよ。

「でも、去年の清涼祭ではメイド服を着て兄貴たちを学校中追い回したとも聞きましたよ？」

どうしよう。それに関しては事実しか含まれていない。

「なんで否定しないんですか明久君！　そこまで汚れてたんですか！？」

「待つて姫路さん！ 工藤さんみたくフォローしてくれとは言わないから、せめてこれ以上悪い風評を広げる真似だけはやめてくださいマジで！！」

女装した変態って肩書きでさえ嫌なのに、男の先輩を追いかけ回したなんて噂が駆け巡ったら僕の社会的な命は無いも同然だ。

「（プルルルル、ガチャ）あ、美波ちゃんですか？ ちょっと、明久君のことで話したいことがあるんですけど……」

「待つんだ姫路さん！ 再会からまだ10分も経ってないのに僕との溝を深める行為に走らないで！」

「……賑やかッスね……」

案外これが大人しい方だったりする。

問二十九（不穩）

ひとまず姫路さんと工藤さんには席を離れてもらった。

「そ、それで、君たちが邪魔をしてきたのはなんで？」

本題に入ると、坊主先輩の妹は、首をひねって考える仕草をした。

「うーん……アタシらはただ兄貴たちに『吉井と坂本に痛い目を見せてやりたいからついてこい』って言われただけツスよ。店に入ったらとにかくクレームつけてればいいって」

「あとこれは偶然ですけど、召喚大会にも出るように言われました。もともとエントリーはしていたんですけど」

「召喚大会に？」

直接やりあえないから妹に頼むなんて、あの二人は何を考えてるんだろう。

「はい、優勝賞品の『プレミアムチケット』が欲しくて。無料で如月ハイランドに行けるなんてチャンスは滅多にないですからね」

「言っときますけど、吉井先輩に負ける気はさらさらないツスよ？ うまく行けば準決勝で当たるそうツスから」

大方、後輩の女子に負ける姿を晒したいだけだろう。なんで大学生になってもやることに変わりがいいのかね。

「僕も負ける気はないよ。お互い頑張ろうねっ」

後輩とはいえ、Aクラスのコンビだ。負ける可能性がある以上、手加減して負けるほど僕は甘くない。

「……………」

「二人とも、どうかした？」

「いえ、なんだか兄さんたちに聞いたような人とは全然違うなって」「去年もバカで変態の問題児だって、後輩の中で有名だったツスよ」「いや、だいたいその通りだと思うよ？ 去年からあんまり変わってないから」

事実、僕はそう言われてもおかしくないだけの問題を起こしている。決して噂だけが独り歩きしている訳じゃないだろう。

「ふふっ、なんだか安心しました」

「それじゃ、アタシらBクラスの坂本さんって人にも会ってきます」

本当にあの意地汚い先輩たちの妹なのかと疑いたくないくらい、純粋な笑みを浮かべて二人は席をたった。

これからあの二人は、アームレスリングのせいで汗だくのゴリラと会うのだろうかと思うと不安になる。そんなことを考えていると、いつの間にか二人の姿は見えなくなっていた。

「じゃ、僕は召喚大会にいこうかな」

「あはは、吉井君。忘れ物忘れ物」

気がつくくと工藤さん、姫路さん、それに霧島さんの三人に囲まれていた。

「……………あの二人が食べたシフォンケーキのお金、貰ってない」

「っ、常村さん！ 夏川さん！ 僕奢るなんて一言も言っていないよ」

「!？」

もともと奢るつもりではあったけど……何か一言くらいあってもいいんじゃないかなあ……？

「はい、二千円確かに頂戴しました」

「姫路さん……知り合いのよしみだからツケにしてくれても良かったんじゃない？」

「明久君はおバカさんですから、お金のことを忘れてどこかへ行っちゃうってことくらいは予想つきますよ」

うん、あながち外れてはいない。

「あの、明久君。ちょっといいですか？」

姫路さんが改まった様子でこちらを向いた。

「クラスが離れちゃいましたよね？ わ、私と別のクラスになって寂しくないですか？」

クラスが離れて姫路さんと会う機会も減ってしまった。それは事実だけど、

「寂しくない、って言ったら嘘になるけど、姫路さんがふさわしいクラスに入ってくれたからそれで満足だよ」

僕の本来の願いが達成されたんだ。それ以上のことは望んだらバチがあたるよ。

(そこは素直に寂しいって言ってあげたほうが良かったのにね)
(……吉井は鈍感)

なんだろう。影で工藤さんと霧島さんがぼそぼそ言っている気がする。

「そ、それじゃあ召喚大会頑張ってくださいね。私応援してますから！」

「うん、ありがとう姫路さん」

やっぱり姫路さんの笑顔って癒されるなあ。元気が湧いてくるってこういうことなんだろう。

「吉井君、ちょっといいカナ？」

向こうで工藤さんが手招きをしていた。

「何？ 工藤さん」

「あの、根本君のことなんだけど」

根本君？ そっいえば姿が見えない。

「どっという風の吹き回しか知らないけど、優子と組んで召喚大会に出てるんだよ」

「はいつ？」

確か、工藤さんはあの二人は合わなそうって言ったのに。

「ムッツリーニ君と坂本君にはもう教えたけど……気を付けてね。」

絶対なにかウラがあるから」

「わかった。情報ありがとう」

根本君が木下さんと組んでる。これは嫌な予感しかしない。難しいことは雄二に任せるとして、僕は目の前の召喚大会に集中しよう。

「アキちゃん！ この勝負に私が勝ったら、このドレスを着てね！
絶対可愛いから！」

「絶対負けられない！ 全力で協力してねムツツリー二！」

「……………写真撮影は任せろ」

「違うよムツツリー二！ 僕が頼んだのは玉野さん側への援助じゃないよ！？」

「ドレスだけじゃダメならウィッグもつけてあげるから！」

「違うんだ玉野さん！ 僕は女装のオプションが不満なんじゃなくて女装そのものが不満なんだ！」

「そんなことはどうでもいい！ 三上さんをボコにして恥をかかせた奴らは許さない！」

「待つて平賀君！ ボコにしたのはこのムツツリスケベであって僕は手を下してないよ！」

「……………エロになんか興味はない」

「そんなみえすいた嘘つかないでよー！」

「では、試合を始めてください」

竹中先生の宣告が酷く理不尽に思えた。

問三十(百合)

「ただいまっ、美波。二回戦勝ったよ！」

「あ、お帰りなさいア……キ……？」

「お店の調子はどう？ あれから邪魔とかはないのかな？」

「ええ……美春たちも頑張ってくれてるから、特に問題は起きてないわよ……？」

「それなら良かった。三回戦まであんまり時間ないけど出来る限り手伝うよ」

「うん、助かるんだけど……アキ」

「あはは……何？」

「……どうしてそんなに綺麗なドレスを着てるのかしら？」

「……玉野さんに『せめて三回戦が始まるまで着て！ さもないと今まで撮り貯めたアキちゃん秘蔵コレクションをネットを通じて皆に見せるから！』って言われて……」

「天命だと思つて受け入れなさい」

「貴女はこの期に及んで女装を受け入れると！？ 女神のお告げにしては冷酷すぎるんじゃない！？」

「帰つてそうそうなにを騒いでおるのじゃ明ひ……さ……？」

このあと同じような会話が四回くらい繰り返された。久保君だけは「普段の格好のほうが似合っているよ」って言うてくれたけど……普通の服より女装が似合う男子って考えものなんじゃないかな。

「そつだ。アキ、今年も葉月が手伝いに来てくれるそうよ」

「あ、それは助かるね」

葉月ちゃんは可愛くて愛想もいいし、なにより美波の負担を減らせるのは大きい。昼時の忙しい時間だけでも手伝ってくれるなら大助かりだ。

『バカなお兄ちゃん。どこにいるですかあ？』

女装姿でウエイトレス(?)の手伝いをしていたら、早速葉月ちゃんの声が聞こえてきた。

「明久、仕事を忘れるでないぞ？」

「わかってるよ。葉月ちゃん。こっちこっち」

業務をこなしつつ、教室の中から声で誘導する。

「お客様がいらっしゃるのというのに大声出すんじゃないありません。全くこれだからブタ野郎は……」

「あ、いたです！ 女装したバカなお兄ちゃん」

(シュパッ)

「「んんんんっ!?!」」

え!?! 今なにか光が見えなかった!? 光の速さで縦ロールの女の子が葉月ちゃんを浚っていかなかった!?

『は、離してくださいですっ』

『ハッ!? 美春としたことが、可愛い可愛い天使に不埒な真似をしてしまうなんてっ! 今お姉様のところまでご案内しますねっ』

『その前にほっぺをすりすりするのを止めてほしいです……』

「前途多難、じゃな……」

「こんにちはは、葉月ちゃん。久しぶりだね？」

「は、はい。お久しぶりです」

振り分け試験のために多忙だったせいで、葉月ちゃんとも久々の再会ということになる。もちろん、現段階で清水さんは葉月ちゃんから遠ざけてある。葉月ちゃんもちょっとしたトラウマになったのか、清水さんの声が聞こえる度に小刻みに震えている。

「そういえば葉月ちゃんは六年生になったんだよね？ もう大人みたいなものだね」

「大人みたい、じゃなくて大人なんですっ。葉月、もう子供じゃありませんっ！」

そう言って胸を反らす小学生。お年頃なのか、去年からの見栄をはる癖は治っていないようだ。どれ、ちょっとだけ乗ってあげようかな？

「へえ、じゃあ葉月ちゃんはどこが大人になったのかな？」

「決まってるです！」

両手を上に上げて万歳のポーズをする葉月ちゃん。あはは、ムキになって可愛いなあ。

「葉月、六年生になって、おっぱいがおっきくなってきたです！」

なぜだろう。美波の背中から強い哀愁を感じる。

「……………詳しく聞かせてくれ」

「ムツツリーニ！？　なんで君がここにいるのさ！　クラスもメン
バーも違うのにつ」

「……………おれの嗅覚をなめるな」

去年同様なぜかカツコ悪い。

でも、僕にはそれなんかより、もっと大事なものが。

「…………アキ？　妹に欲情されたなんてたまらないから……………ね？　大
人しく、ばつきり終わらせるわよ？」

そこは「ばつきり」「じゃなくて「ゆつくり」のほうだダメージが
なくて助かるんだけど、胸に関連した美波の破壊力は背中越しにも
ヤバイと感じ、苦笑いするしかなかった。

問三十一（前哨）

「明久よ。そろそろ三回戦の時間ではないか？」

「うん？ あ、もうそんな時間なんだね」

「早く行きなさいよアキ。もうすぐお昼だから混んじゃうわよ」

「ありがとう、じゃあ行つてきます」

さて、行く前にトイレで制服に着替えるとするかな。

「あれ、久保君。どうしたの？」

「いや、僕もトイレに行こうと思ってね。失礼ながら同行させてもらうよ」

「う、うん」

なんだか久保君の言葉の裏に強い意思を感じる。でも真面目な久保君に限って変な下心とかはあるはず無いし、気にする必要も無い
か。

「待つのが明久。ワシもついていくのじゃ」

「ひ、秀吉は来ちゃダメだよ！ 秀吉が男子トイレに来た日には警察が乗り込んできちゃうから！」

しかも捕まっちゃうのは僕のほうかもしれない。

「なぜじゃ！ ワシは友の貞操を守ろうとしておるだけじゃろつが
！」

「ぼ、僕の貞操！？ 止めてよ秀吉！ 物事には順序ってものがあるじゃないか！ 僕たちまだ一緒にお風呂にも入ってないよ！？」
「待つんじゃないか！ お主話が色々飛躍しておるぞ！？」
「とにかく、秀吉はちゃんと秀吉用トイレに行かなきゃダメだよ！」
「そうよ木下、アキと一緒にトイレに行くななんて真似は許さないんだから」
「その台詞通りならなぜ僕に対して関節技を繰り出してくるのさ骨が軋むうつつ！！」

最近では滅多に暴力を振らないと安心してたらこれだ。まったく美波に隙を見せたらろくな目に会わない。

「痛たた……あれ、久保君。先にトイレに行っても良かったのに」
美波の関節技から解放されて落ち着いてみたら、トイレに行きたくはないの久保君が待っていてくれた。

「いや、大切なクラスメイトを残して行けはしないよ」
久保君が眼鏡を押し上げながら、そんなカッコいい台詞を言った。その目的の場所がトイレじゃなかったら本当にカッコいいのだろうけど。

「ありがとう久保君。久保君ってやっぱり優しいんだね」
「礼には及ばないよ」

久保君は遠慮するけど、雄二なら待つどころかさつさとトイレに行ってしまうだろう。最悪の場合、僕が虐げられている様子をムツツリーニあたりに撮らせて見せびらかすことも予想される。

「むづ……何か釈然とせんのじゃが」

なぜかその後の秀吉は終始不機嫌だった。

結局、トイレは混んでいたので隣の空き教室で着替える事にした。着替えを久保君が手伝おうとして秀吉がそれを全力で止めてくれたけど……秀吉はどうしてそんなに久保君の邪魔をするんだろう？

着替えを終えて大会会場に着くと、ステージ下で待っているはずのムッツリーニが居なかった。前の二回ともいたのに、なにかあったのかな？

「……………お待たせ」

「おわっ！」

背後から声がしたのでびっくりしたけど、案の定そこには悪友のスケベが一名。

「ムッツリーニどうしたのさ？ いつもこのステージ下で女の子の脚を撮影してたじゃないか？」

「……………女の脚なんかに興味はない」

今更ながら、彼の言葉に説得力はない。

「……………クラスの出し物を手伝ってた」

「あの変な映画、見に来る人いるんだ……」

たしか、タイトルは『伝説の桜の木の下で貴様を待つっ！』だった。

「……………いる。Dクラスの玉野とか、秀吉のお姉さんとか」

はてな？ その二人に共通するものなんてあったっけ？

「……………行くぞ明久。三回戦からは公開試合」

ムツツリーニそう言ってステージへの階段を登る。

「……………あれ？ Cクラスって映画なんだから映像を上映する以外に手伝うことなんかあったっけ……………？」

色々引っ掛かるけど、そんなことを考えている暇はない。だって、

「……………明久。相手にとって不足なし」

「ああ。本気で行くよ。アイツには」

僕らの次の対戦相手は

「いよう。明久、ムツツリーニ。やっと会えたな」

「……………雄二、全力でいこう」

あの『バカ』なんだから。

問三十二（奇襲）

『さあ！ お待たせいたしました。ただいまから、試験召喚大会の公開試合を行います！！』

司会役である放送部員の女子生徒が観客を煽っている。毎度の事ながらこの試験召喚システムへの関心は強いらしく、お昼時だというのに沢山のお客で一杯だった。

「明久。こんな大勢の観客の前で恥を晒すなんて真似をさせてしまっただろうが、悪く思うなよ？ これも勝負なんだ」

「言ってくれるね、雄二。一瞬で片付けてはやくアームレスリングに専念出来るようにしてあげるよ」

まさか三回戦の相手がコイツだなんて思いもしなかったよ。早く決着がつけられるからこれはこれで好都合だけど。

「それにしても、ババアは変なことをするもんだね。腕輪を回収しなきゃいけない僕ら同士を戦わせるなんて」

「なんでも『いきなり昨年の優勝者同士の対決が観戦できる』なんて触れ込みで宣伝しまくったらしい。その方が来客数が増えるだろうからな」

「ふーん。ババアも風評に気を遣ってるね」

とはいえ、いきなりこんなに多くの観客の前で試合をするとは思わなかった。無意識に手が震えてしまう。

『では、試合を開始します。選手は召喚してください』

「さて、本気で行くぞ明久、ムツツリー二！ 試獣召喚っ！」

「……手加減はしない。試獣召喚」

「それは僕らだって同じだよっ！ 試獣召喚！」

「……………試獣召喚」

会場のフィールドに幾何学模様が広がり、四人の召喚獣が呼び出された。

そこには僕らの試獣召喚の他に、日本刀を携えて凜と構える霧島さんの召喚獣の姿と、

「……………雄二も変わり無いんだね」

相変わらず白ラン不良装備から変更のない雄二の召喚獣が立っていた。

「バカが、よく見る。武器が変わっているだろう？」

「武器？」

雄二の召喚獣の武器はメリケンサック、木の棒ときて

「鉄パイプになった」

「ぞ、雑魚だ！ 雑魚がいる！」

でも金属製になっただけ木刀よりマシなのかもしれない。強いかどうかはともかくとして。

『両者出揃いました。立会人の先生は大島先生ですので対戦科目は保健体育。点数を表示します』

『Fクラス 吉井明久
& Cクラス 土屋康太
保健体育 92点&642点』
Bクラス 坂本雄二
& Aクラス 霧島翔子
保健体育 211点&404点』

先生のコールとともに僕らの点数が巨大ディスプレイに表示される。幸いにも保健体育だからムツツリー二の点数は霧島さんを上回っている。

だけど、そこは流石霧島さん。受験科目でない保健体育だからって手を抜いていない。

「翔子、わかってるよな？」

「……うん、例の作戦でいく」

雄二と霧島さんが打ち合わせを始めた。雄二のことだ、僕らを倒す策を何通りも考えているんだろう。でもそのくらいなら予想済みだ。

「僕は雄二をやる。ムツツリー二は霧島さんをお願い」

「……まかせろ」

「では、試合、開始！」

先生の宣言と同時にゴングがけたたましく鳴った。

「行くよ雄二！ 先手必しよ」

って目の前にいきなり回転して襲ってくる鉄パイプが！？
くそっ、避けきれない！？木刀で弾くしかっ！

「い、いきなり危なっ」

「……吉井。余所見は禁物」

鉄パイプを弾いて体勢を整え直すと、目の前に霧島さんの召喚獣の姿があった。

『なんとという奇襲でしょうか！ 坂本君が武器である鉄パイプを吉井君に投げつけ、注意を反らす間に霧島さんが接近していました！』

「……まずは、一人目」

「う、嘘っ！？」

畜生油断し

「…………加速」

た………？

「ム、ムツツリーニ！」

防御体勢をとっていた僕の召喚獣の前には、小太刀で日本刀を防ぐ相方の召喚獣の姿があった。

「ありがとう、霧島さんは任せたよ！」

結果的にムツツリーニは霧島さんと相対できた。これで僕が雄二と対戦すれば問題ないっ。

「掛かったな明久っ!!」

「はっ!?!」

フィールドを見回して見ると、僕の召喚獣の背後には雄二の召喚獣がいた。

「これが俺の作戦だ」

手には拾った鉄パイプを持っていた。

問三十三（相棒）

『なんとということでしょうっ！ 坂本君の召喚獣は投げた鉄パイプを既に拾っていました！ しかも霧島さんと共に吉井君と土屋君を挟む体勢！ 吉井・土屋コンビは俄然不利な状況でありますっ！』

「覚悟はいいか明久！！」

雄二の召喚獣が突進するために力を蓄えた。一撃で勝負を決めるためだろう。でも、それは単調な動きだ。僕の操作技術があれば受け流すことも十二分に可能なんだけど、

「……………明久、今は霧島で手一杯」

「くっ、だよな」

僕の召喚獣の後ろには戦闘に集中しているムツツリー二と霧島さんの召喚獣がいた。避けたらいくらムツツリー二の召喚獣でもかなりのダメージを負ってしまうだろう。

「ふはははは！ 行くぞ明久あっ！」

色々と作戦を考えているうちに、準備を終えた雄二の召喚獣が突進してきた。

「くそっ Aクラス級の突進なんて、僕の召喚獣でどうすれば

」

『あ、何か今匿名の情報が

つてええっ！？』

突然アナウンスの女子生徒が取り乱したように叫んだ。

『さ、坂本君と霧島さんは、この大会が終わり次第市役所に向かって婚姻届を提出するそうですっ!』

「……は?」

緊迫した戦闘中にはまったく相応しくないアナウンスに一瞬意識がそれてしまった。

「……雄二……嬉しい」

「待て翔子! 今は試合に集中しろっ!」

アナウンスに惚けて意識が飛んでいる霧島さんとは対称的に、雄二は試合に意識を戻した。ものすごい勢いで僕の召喚獣へと突っ込んでくる。

「くたばれえっ!」

目と鼻の先の距離まで雄二の召喚獣が近寄ってきた。

「今だ! ムツツリーニ、腕輪を!」

「………捕まってる、加速っ!」

本来、召喚獣の腕輪は攻撃のために使用する。だけど、今使った腕輪の能力は攻撃なんかじゃなく、

「畜生っ、避けるっ翔子おっ!」

僕の召喚獣ごと避けて、勢いのつきすぎた雄二の攻撃を霧島さんに当てるためだ。

『Aクラス 霧島翔子

保健体育 0点』

「畜生……挟み撃ちをかわすとは思わなかったぜ」

向こうでは雄二が頂垂れていた。策士策に溺れる、という表現がピッタリくる。

「こうなったら、サシで勝負してみるか」

それはやけくそなのか、はたまた秘策の一石なのか、僕にはわからないけど、

「来いっ雄二！」

「おらあぁっ！ー！」

正面から受け止めて、きっちり返り討ちにしておくくらいはしておいっ。

『Bクラス 坂本雄二

保健体育 0点』

「さすがに……操作技術じゃ勝てねえか」

『勝者、吉井・土屋ペア！』

ひとまず……一個くらい山は越えたかな？

「え？ 僕らの四回戦は中止なの？」

雄二との試合が終わった直後、アナウンスを勤めていた女子生徒
新野さんから聞いた話だ。

「そうよ。Aブロック最後の試合なのに、選手が食中毒になっちゃ
ったらしいの」

その食中毒の原因が姫路さんの手料理じゃないことを祈りたい。

「そつだ。あの匿名の情報、だれが持ってきたのさ？」

「それこそ匿名よ。気づいたら手元に例の情報が書かれた紙があっ
たの」

なんだか強く違和感の残る出来事だった。出てきたタイミングと
いい、あれは僕たちを助けようとしたとしか思えない。

「あ、土屋君つ。例の写真、頼んだからね」

「……………（じくり）」
「????？」

「それじゃ、私次の試合も実況しなきゃ。土屋君たち頑張ってるね」
「ああうん、頑張るよ」

手を軽く振りながら新野さんは走って放送席へ行った。はて、「
土屋君たち」って……基本的に前に出たのは僕だった気がしたんだ

けど？

「ムツツリー二、新野さんと知り合い？」

「……………ただのクラスメート」

「じゃあ、例の写真っていうのは？」

「……………ただの潜在写真。ディスプレイに映すらしい」

「潜在写真？ それならわざわざムツツリー二に頼む仕事でもないんじゃない？」

「……………そんなことはない（パラッ）」

「あれ、ムツツリー二。なにか落ちたよ？」

優しく拾ってみると、それは写真だった。写っていたのは　さ　
　　ときのドレス姿の僕。

「……………明久、早く返してくれ」

「返すわけないよこんなもの！　っていうか新野さんはこれをどう使う気だったのさ!？」

「……………応援用の団扇とか？」

「それって世界中から来てるお客さんから変態だと思われちゃうんじゃないか!？」

「……………メジャーデビュー」

「いやそれ意味が違うからっ!！」

問三十四（暗雲）

「四回戦はなしか……どうしよう？　時間が余っちゃったよ」

本来なら公開試合が始まったら連戦連戦って感じでトイレに行く程度の時間しかないんだけど、四回戦が無くなるとなったら話は別だ。店を手伝えるほど時間も余ってないし、トイレかどこかで時間を潰すには少々長い。

「おい、暇してるのか？　Fクラスの代表のくせに、島田に全部任せっきりじゃないか」

うん、こういうタイミングで悪態をつく人間は一人しかいないよね。

「雄二こそ、まんまと小山さんに踊らされてたじゃないか。ホントに異性を相手にするとダメダメだね」

「ちっ、痛いところ突いてきやがる」

そう言つと雄二はポリポリと頬をかいた。

「ところで明久。俺が負けちまったわけだからお前が優勝するしかババアとの約束を果たす方法が無くなつたわけだが、勝つ自信はあるのか？」

「うーん、正直相手次第だね」

「そうなるよ、次に当たるのは……順当なら越冬コンビだな」

「そうか、あの二人順調に勝ち上がったんだ」

それにしても、雄二もあの二人に『越冬コンビ』って呼んでたなんて驚きだ。

「うん？ ああそうか。お前もあの二人と面識があるのか」

「うん。最初は常夏コンビと一緒に嫌がらせしていたけど、兄に似ないで性格のいい子たちだったよ」

「まっただくだな。顔立ちも整ってたし、ホントにあの先輩たちの妹かと疑ったぜ」

「それにしても、ホントにあの先輩たちの妹かな？ 聞き分けもいいし、同じ兄妹だとは思えないんだけど」

「奇遇だな。俺もまっただく同じことを考えてたぜ。Bクラスに入ってくるなり丁寧に挨拶して、出し物のアームレスリングにもちゃんと参加してくれたんだ。気持ちのいい後輩だった」

「本当にあの常夏コンビと血がつながっているのかな？」

「いや、義理の妹かもしれない」

「あの先輩たちってシスコンなんだろうね」

「ああ、あの子たちが不憫だ」

「お前らうるせえんだよ！！」

あ、噂をしたら来ちゃった。

「お久しぶりですな常夏変態」

「もういろんなものを通り越して失礼だろ！」

どこも間違っではないと思うんだけど。

「ふん、お前が妹たちにぼこぼこにされるのを観に来たのさ」

「せいぜい祭りを楽しめよっ！」

それだけ言って常夏コンビはどこかへ去っていった。

「雄二……」

「なんだ……？」

「あの二人、負け犬つぷりに磨きがかかってるね……」

「……それは言うなよ。流石にそれは虚しすぎる」

あの二人は嫌いだけど、あんな兄をもつ妹が可哀想だ。

「そういえば雄二。越冬コンビがBクラスに来たんだよね？」

「ああ、そうだが？」

「で、あの二人は雄二とアームレスリングで対決したと？」

「？ 何が言いたいんだ？」

ここまで言っていてわからないってことは、こいつはまだ学習が足りないようだ。

「つまり、雄二は後輩の女の子二人と手を繋いだってことだよな」

「……吉井、教えてくれてありがとう」

『さあ、四回戦も残すところあと一試合です！ 準決勝で吉井・土屋ペアと戦うのはどのペアなのか！』

「あ、そろそろ試合だね。僕は会場にむかうよ」

「待て明久。学園祭で死人がでてもいいのか？」

「……大丈夫。何十本か骨が折れるだけだから」

「待て翔子。折る骨の桁が違ボキッ……う（ボキッ）……ぞ（バキボキッ）

「……」

いくら僕が慣れていてもグロイ光景はなるべく見たくない。さっさと退散しよう。

「あ、無理。これ死んだわ」

坂本雄二の遺言は極めて冷静だった。

「……………」

「美春？ そんなとこでなにをしてるの？」

「おっ、お姉様……………」

「まったく、アンタのせいで葉月がビクついちゃってるじゃない」

「す、すみませんっ。あまりにも可愛らしくてまるで天使のようでしたのでっ」

「言い訳無用。で、仕事サボってなにしてるわけ？」

「盗聴です」

「……………恥ずかしげもなく言えるアンタの精神を疑うわよ」

「お姉様、聞いてください。美春は大変なものを聞いてしまったのですっ」

「まったくなによ？ このイヤホンをつければいいわけ？」

【「そうか……………Fクラスの勝利、ね」

『……………どんな感じ？』「まあまあ予想通り、ってところかね」】

「？ この声は誰？ どこかで聞いたような……………」

【『……………それはよかった』

「おいおい。この根本恭二と組んでるんだから、もう少しテンション上げるよ」】

「ね、根本！？ 道理で聞いた声だと思った！」

「お姉様、重要なのはこのあとですっ」

【『』……………上げられるわけがない』

「そっだな、お前は脅迫される立場だもんな

『ムツツリー

二『』】

「……………っ、土屋？」

問三十五（干渉）

「ど、どういふことなのよ美春。土屋と根本が手を組んでるって…
…本当？」

「落ち着いてくださいお姉様っ。『脅迫』という単語が出たので、
おそらく土屋康太は根本に脅かれているのかと」

「脅されている？ そういえば確かに元気が無かったわね……」

「なにをしておるのじゃ島田、清水。もう昼も過ぎて大会も大詰め
じゃから一旦店を閉めるぞ？」

「ちようどいいわ、木下。店を閉めたら久保もここに呼んで！ 大
事な話があるのよ！」

「……………」

「ムツツリーニ？ どうしたの？」

「…………… 何でもない。盗聴機にノイズが入っただけ」

「日常会話に盗聴って単語が出てくるのっておかしくないかな！？」

「…………… なんでもいい。早く行くぞ」

『お待たせしましたっ。ただいまから、準決勝第一試合を始めます
っ！』

「ええ。ワタシたち、ホントに待ちましたよ？」

「これでやっと吉井先輩と戦えるッスね」

待つてましたとばかりに不敵な笑みを浮かべる越冬コンビ。うーん……夏川さんのこの嫌らしい笑い方は坊主先輩そっくりだなあ……。

「君たち、いくら後輩だからって僕は手加減はしないからね?」

「……………(じくり)」

「それはこちらのセリフですよ」

「さっきのことと勝負は関係ないツスからね?」

お互いににらみあう僕ら。ひよっとしたらこの戦いは今まで以上に厳しいものかもしれない。

『対戦科目は物理・生物! 両者召喚してください!』

「……………試獣召喚!」

『Fクラス 吉井明久

& Cクラス 土屋康太

物理 105点

生物 197点』

「ムツツリーニ、また点数が上がったね?」

「……………一般教養」

さて。越冬コンビの得点は、

『Aクラス 常村越美

& Aクラス 夏川冬美

物理 425点&411点』

「やっぱりね。先輩たちと同じ理系か」

「ふふつ、大丈夫ですか？ これだけ点差があれば、吉井先輩なんか一発ですよ」

「アタシら前言撤回する気なんてさらさらないツスからね？」

二人のいうとおり、正直、この点差は操作技術で乗りきるにはギリギリ厳しい。ムツツリー二の点数なら、上手く言って相討ちだろう。

『（……………！）』

「ん？ 今なにか聞こえたような？」

『あ、あれっ？ おかしいな？』

突然スピーカーからそんな声が聞こえてきた。この声は
新野さん？

『た、大変申し訳ないのですが……………システムになんらかの異常があった模様で、【物理・生物フィールド】が展開しにくくなっております。緊急措置として、【化学・地学フィールド】で試合を続行いたします』

「「な、なんですって!?!」」

越冬コンビがしこたま驚いている。そりゃそうだ。確実に勝てる科目が使えなくなったんだから。

『Fクラス 吉井明久

& Cクラス 土屋康太

化学 92点
地学 138点

Aクラス 常村越美
& Aクラス 夏川冬美
化学 132点&161点『

うん。これなら戦える。

「畜生つ、何が起こったんスカ!？」

「せつかく勝てると思ったのにー！ーッ!！」

「うん？ なぜフィールドが出ないんだ？ 吉井君が有利ならいいんだけど」

「それでバカなお兄ちゃん、勝てるですかね？」

「勝てますよつ。葉月お嬢様が美春の膝の上でくつろいでくださるならっ」

「こら美春。へんなこと教えないの。それにしても、本当になんで出ないの？ またシステムの故障かしら？」

「いや……出ないのではない。『出せない』のじゃ」

「木下？ なにか知ってるの？」

「うむつ……。あの感じは、まず間違いなく 『干渉』じゃ」

問三十六（独壇）

「やあっ！！」

常村さんの召喚獣は自棄になって突撃してくるけど、操作に慣れていない二年生の攻撃なら避けるのは造作もないことだ。

「ああもっ！　なんで当たらないのよっ！？」

『点数では負けていても経験の差では勝つ！　これが三年生の、去年王者の実力なのかつ！』

「おい実況っ、うるさいッス！　さっきの異常さえなきや楽勝なのにっ！」

「……………余所見禁物」

「えっ？　き、きやつ」

夏川さんは実況に気をとられている際にムツツリー二に接近を許してしまった。あのどこかそっかしいところも坊主先輩そっくりだな……………やれやれ。

「ストップだムツツリー二っ！！」

「……………！？（ビタッ）」

僕の声を聞いて攻撃の手を止めたムツツリー二は、召喚獣を一旦手元に退かせた。

『土屋君の召喚獣が夏川さんの召喚獣を攻撃せずに下がってしまった！？ 一体吉井君は何を考えているんでしょうかっ！？』

「本当に……何を考えているんですか？ 吉井先輩、手加減はしないって言いましたよね？」

「アタシらが物理で戦えないからってわざと攻撃しないっていうなら……軽蔑するツスよ？」

向こうも攻撃の手を止めてこっちに注目している。

「常村さん、夏川さん。僕は手加減なんかする気はさらさらないよ」「ならどうしてさっき止めを刺させなかつたんスか？」

「君たちは本来の対戦科目の物理で戦えないでしょ？ 多分、さっきのままですら簡単に負けちゃったと思う」「だから、手を抜いて戦ってやるってことですか？ ……軽蔑しました」

「違う！！」

『……吉井君は何をするつもりなのでしょう？』

「このまま勝っても、僕は納得出来ない！ だから今から君たちを全力で倒す！ 『僕一人』で」

「「えっ？」」

『吉井君、それは、一体……？』

「二人まとめて相手してやるっ！ 全力でかかってこい！！」「……………明久らしい」

ムツツリー二の召喚獣がフィールドの隅に寄った。これは戦闘に参加しないという意味表示のようだ。

「ありがとうムツツリー二。我が儘に付き合わせちゃってゴメンね
っ」

「……………勝てば文句はない」

『よ、吉井選手はなんと！ 一人でAクラス二人を相手に勝利宣言
ですっ』

『『『うおおっ！！』『』』

な、なんか思いの外盛り上がった………そういう風に受け取られるとやりにくいなあ……。

「吉井先輩。アンタさうとうバカッスね」

「でも、そんなバカな人は嫌いじゃないです」

『試合再開っ！』

「「「やあっ！」「」」

二人は左右に別れてのコンビネーション攻撃。一体を相手にするのは有効な攻撃だ。でも、

「経験を舐めるなっ！」

「えっ？ わっ！？」

「越美っ！ 避けて！」

二体が同時攻撃するために接近したときのコンビネーションは、お互いを傷つけないように戦わなくてはならないため、二年生には

難しい。軽く足払いをかければコンビネーションはグダグダだ。

『Aクラス 常村越美
& Aクラス 夏川冬美
化学 101点&104点』

「越美！ 時間差で攻めるッスよ！」
「わかったわ！」

そう、同時がダメなら時間差で攻める。それは上等な手段だけど、
「かかったね！」

その実体は一体ずつの攻撃。それなら僕の操作技術で処理すれば
なんの問題もない。

「せいっ！」
「ぐっ」

『Aクラス 夏川冬美
化学 75点』

さて、こうなると相手の出方も読めてくる。コンビネーション同
時攻撃、時間差攻撃ときたら次は大体、

「冬美！ もうとにかく両側から行くわよっ！」
「り、了解っ！」

挟み撃ちだ。

「いくら先輩でも、両側から攻められたら対処出来ませんよね」
「フィードバックで気絶しないで下さいッスよ　いけっ!!」

フィールドの両端に別れた二人の召喚獣が、全速力で僕の召喚獣に突撃してくる　けど、

「やっ!」

「きゃっっ!!?」

点数の高い常村さんがわずかに先に接近する。すかさずそれに一撃叩き込む。

『Aクラス　常村越美』

化学　0点『』

「もらったあっ!　吉井先輩っ、かく」

「よっ」

「!」……?」

振り返り様に夏川さんの召喚獣にも一発お見舞いする。

『Aクラス　夏川冬美』

化学　0点『』

『勝者、吉井明久君!』

うーん……ホントに勝っちゃった。

「高橋先生。ここにいらしたんですか」

「ああ、西村先生」

「意外ですね。高橋先生はこういった催しには興味がないのかと思つていましたが……」

「教師として、生徒の成長を観る義務がありますから」

「なるほど、高橋先生らしいですね」

「当然のことです」

「……高橋先生、少し聞いてもいいですか？」

「なんででしょう？」

「さっきの吉井の戦いぶり、どうお考えですか？」

「……もし私が吉井君と同じ点数で勝負した場合、勝つのはどちらか、とお聞きしたいのですか？」

「察しがよくて助かります」

「……自信を持って『勝てる』とは言えません」

「……これは、教師として生徒の成長を喜んでいいのでしょうか？」
「それもわかりません」

161

「あ、美波たち！ 観に来てくれたんだ？」

「アキ、おめでとつを言う前にしなきゃいけないことがあるの。悪いけど待ってて」

「????」

「お願い、事情を話して。」

「土屋」

問三十七（虚像）

「事情を話して……ってムツツリーニ？ 一体何があつたのさ？」

美波や秀吉の空気がいつもと違う。久保君たちもいるということ
は、店を閉めて来たんだろうか。

「そうか、アキは何も知らないもんね。アキ、落ち着いて聞いて？
土屋はね、根本と手を組んでいるの。しかもそれは脅しに近いも
のらしいのよ」

「はいっ？」

「……………っ！」

ムツツリーニが、根本君と？ しかも脅されているって……………？

「おお、明久。よく勝つたな っ、何事だ？」

「あ、雄二！ いや、なんかよく分からないんだけど……………」

「ワシも信じられんのじゃが……………」

「美春が盗聴機で偶然聞いたのですっ。根本恭二とアナタとのDク
ラス戦後の会話を！」

「土屋君。何で脅されているかは知らないが、根本君の言いなりに
はならないほうがいい」

「……………俺は脅されてなんかいない（フルフル）」

「おい、ちよつと待てよ！ 話が全然わからねえぞ!？」

「島田よ、雄二の言う通りじゃ。一旦二人には説明をせねばならん
「そっね…………。じゃあ、簡単に説明するわよ」

「　　ということなの」

「成る程な。それでムツツリーニが根本の野郎に脅されていると」

「ええ」

「……………っ！（ブンブンッ）」

美波は自信タップリに頷いた。清水さんと久保君も同様だ。……

でも、残念だけどその読みは、

「残念だが、その読みは外れだろうな」

「「「えっ？」」」

ありや、雄二に先を越されちゃったよ。

「やっぱりお主らもそう思うか」

「ああ。ムツツリーニに脅迫されるようなネタなんてあるはずはないし、あったとしても根本ごときに脅されているとは思えねえ」

僕だつたら女装写真とかいろいろネタはあるけど、ムツツリーニはそんなもの存在すらさせない。

「じ、じゃああの会話はなんだつたのよ！？　しっかり根本と会話してたわよ！」

「島田、冷静になって考える。なんでDクラス戦後の会話が今日聴けるんだ？」

「あっ……………」

っていうことは、その盗聴した会話は、

「『誰か』が意図的に録音して盗聴されるように流したんだろうな。

根本に脅されていることをムツツリーニや清水を通じて外部に知らせたくて」

と、なると脅されている人はまだ存在するということだ。

「そして根本はその相手を『ムツツリーニ』と呼んだ。これは第三者に会話を傍受されたとき、脅迫相手の正体を知らせないためと、『ムツツリーニ』という単語を使うことでこっち側に不穏な空気を漂わせるためだ。事実、ここに約三人かかっているしな」

美波たちが気まずそうに顔を背けた。

「雄二よ。その『誰か』とは、誰じゃ？」

「大体絞れてくるだろ？ 根本と何らかの形で繋がっていて、なおかつ脅されるネタがありそうなプライドが高い人間と言ったら

」

『準決勝第二試合勝者！

根本・木下ペアツ！』

「 木下優子だ」

「さて、ここらへんで……」

「「待ちやがれっ！！」」

「！？」

雄二と一緒に観客席に向かって叫ぶと、案の定見知った顔がちっちやく埋まっていた。

「ここに居たんですか、学園長」
「ロンドンに嘘だったんですね」
「……いつから気づいていたんだい？」
「明久の準決勝です。物理・生物フィールドが展開されなかったのは、アンタが改良した白金の腕輪のせいだろうか？ 他の教師はともかく、明久を勝たせて得するものなんかない」
「……全部お見とおしい。わかった。全部を話すよ」

「ただいま、姉さん」

「おかえりなさい、アキ君。お祭りは楽しかったですか？」

「うん。お店も順調だったし、召喚大会は明日決勝で戦うことになったんだよ！」

「そうですか。それならお祝いをしましょうか」

「へえ？ 姉さんがお祝いだなんて珍しいね？ 一体どんなお祝い

？ ケーキでも買って食べちゃおう？」

「今夜は一緒に寝てあげます」

「ごめん姉さん。頭ごなしに否定はしないけど『今夜は』って表現は止めてくれないかな？ それだと姉さんはたまにしか僕と一緒に寝ようとしなくてことになるよね？」

「あら、アキ君は毎日姉さんと寝たいのですか？ いやらしいですね」

「違うからね！？ いやらしいのは姉さんだよ！」

「実の弟にいやらしいなんて……」

「う、ごめんなさい」

「……ムラムラしますね」

「変態だっ！」

「おふざけはそこまでですよアキ君。早くご飯を食べて休ませよ」

「う」

「……姉さんには日本語のリハビリが必要だと理解したよ……」

問三十八（次日）

「アキ、おはよ〜」

「おはようなのじゃ、明久」

「あ、二人とも。おはよう」

学園祭二日目の朝。美波と秀吉が揃って登校してきた。

「それで秀吉。根本君に脅されているのは木下さんで間違いないかっ
た？」

「うむ。それとなく根本のことを話題に出したら、表に出さぬよう
に動揺しておった。何かを隠しておるのは明白じゃ」

「こういうとき、秀吉が演劇の達人で良かったと思う。本人は軽く
言ってるけど、その洞察力は並大抵のものではないだろう。」

「して明久よ。召喚大会のほうはどうなのじゃ？」

「うん。対戦科目は社会科らしいから、得意科目で勝負できるみた
いだよ」

「うん、それなら安心ね。せいぜい頑張ってお店の宣伝に貢献して
よっ。」

美波が悪戯つぽい笑みを浮かべた。こういう美波の顔は……嫌い
じゃなかったりする。どれ、皮肉には皮肉で返すとするかな。

「あははっ。頑張って席が足らなくなるくらいお客さんを連れてく

るから、せいぜい頑張つて切り盛りしてくれたまえぐぼっしやあつっ!？」

何!？ 今背中から会心の一撃が飛んで来なかった!？ いや、敵だから痛恨の一撃のほうか正しいのかな!？

「何を勝手なことを言ってるんですかつ。責任者が居ない中で切り盛りしてるのは紛れもなくお姉様なのですつ。ブタ野郎も少しはお姉様に感謝しなさいっ!」

「し、清水さん! そこは本音と建前という日本の文化を踏まえて下さい!」

朝からバイオレンスな光景が飛び交う学校つてなかなか無いんじゃないだろうか。

「清水さん、止めるんだ。吉井君はお店のことを考えて行動してくれているんだよ」

「く、久保君」

「お店のため? このブタ野郎が何をしたつていのですかつ?」

「いいかい、吉井君は今朝早くから来て今日の分のクレープを三百食分作つていたんだ。きつちり厨房チーフの役割を果たしているんだ。責める要素はない」

うわっ……久保君。フォローは有り難いんだけど、それは恥ずかしいから出来たら皆の前では言わないで欲しかったよ……。

「……アキ」

「は、はい!」

ヤバいっ。こういう時の美波は大体怒つて、

「無理しないでね？」

「大変申し訳あります」

え？ あ……うん」

そこには心配そうにしながらも、頼りがいのある美波の顔があった。

「とにかく、アキは召喚大会に集中して？ お店のことは気にしないでいいからっ」

「は、はい……」

えっと……なんていうか拍子抜けだ。いつもなら「勝手に行動するな」って攻撃してくるのに。……でもさっきの美波の顔、いつもと違った雰囲気がかわいか

「あー、うむ。ところで明久よ。学園長のところにはいかんで良いのか？」

「え？ あ、そうだ。腕輪を貰いに行かなきゃいけないだった」

時計を観るとすでに約束の時間が訪れようとしていた。早くババアに会いに行かなきゃっ。

「それじゃ、お店のほうは頼んだよっ」

返事も待たずに扉を開けて廊下を突っ走った。幸い時間が早いためか、あまり人が居ないのでぶつかることはなかった。

「そういえば、なんで久保君は僕が朝早くから来ていたことを知ってたんだろっ？ っていうか久保君はいつから学校にいたんだろ？」

久保君っているいろいろ不思議な人だなあ。

「失礼しまーす」

「だから返事を待てと言ってるだろうクソジャリ！」

「あはは、すいませーん」

いい加減このやり取りも飽きてきた。

「全く、坂本にはもう渡したよ。ほれ、同時召喚型の腕輪だよ。受けとりな」

「はーい」

早速渡された腕輪を着けてみた。前のヤツとの違いはあんまり感じられない。

「それにしても、なんでまたロンドンなんて嘘をついたんですか？ ホントは学園の研究所に居たのに」

「昨日も説明しただろう？ 去年の竹原みたく、アタシの揚げ足を取って学園を転覆させようとする輩に狙われないようにするためさね」

「なら僕らまで騙す必要はなかったのに……」

「敵を騙すにはまず味方から、というだろう？」

このババア。さては全然反省してないな？

「あれ？ 竹原先生が辞めた後の教頭って誰がやってるんですか？」

「なんだ、そんなことも知らなかったのかい？ 今の教頭は、」

コンコンッ。

ん？ 誰がお客さんかな？

『学園長。来賓の方が挨拶にお見えです』

ドア越しに初老の男性の声が聞こえた。迂闊に入ってこない辺り、礼儀正しさが伺える。

「ああ、今いくよ」

『失礼しました』

そう言うや否や、足音は遠くへと去って行った。

「今の声の先生だよ。お前さんも知ってただろう？」

あ、なるほど。今の人か。もちろん、

「知りません」

「アンタは去年の担任すら覚えていられないのかい！？」

いや、僕の記憶に間違いが無ければ担任はずっと鉄人だったと思う。

『君の記憶が間違っています』

問三十八(次日)(後書き)

『私が誰がわかったら感想を下さい』

問三十九(映画)(前書き)

『正解は福原慎でした』

問三十九（映画）

「さて、腕輪も貰ったしお店の手伝いでもするかな。まだ決勝まで時間あるし」

決勝はお昼の一時に行われる。ムツツリー二と落ち合う時間も考えると、まだ四時間弱くらい時間が余ってしまった。

「おーい、みんな。ただいまっ」

「お帰りなのじゃ明久。ずいぶんと早かったのう？」

「うん、なんのトラブルもなかったからね」

「普通は学園長室でトラブルが起こることが珍しいのじゃが……」

トラブルが起きるときは大体雄二が絡むときだったりする。僕は至って巻き込まれる側の人間だからね。

「それはそうと、まだお客さん少ないね。朝早いからかな？」

さすがにどんな甘いもの好きでも、朝から出店でクレープを食べる人間は少ないだろう。現に今いるお客さんは一人だけだけど、コーヒーで済ましている。

「うむ。せっかく明久が作ってくれたクレープもまだ出せぬのじゃ」

「ひ、秀吉。ちょっと恥ずかしいからそのことは触れないでほしいんだけど？」

「む？ 明久、なにゆえワシから目を逸らすのじゃ？」

秀吉が僕の前に回り込んで覗き込んでくると、身長差のせいで自然と上目遣いになってしまふ。こっ、これはかわいいっ。小悪魔的だっ！

「木下君。お客様の前で無礼なことにはしてはいけないよ。君はもう少し吉井君と距離を取るべきだと思っ」

「そっだ吉井！ もっと木下から離れやがれっ！」

久保君の言うことは最もかもしれないけど、朝からモヒカン先輩に絡まれるのはちょっととした拷問だ。

「といっかなぜこの先輩しか客がおらんのじゃ……？」

ちよつと、いやかなり秀吉が不憫だ。

「あ、そっだ秀吉。ムツツリーニからCクラスでやってる映画のチケットを二人分もらっただけど、暇なうちに一緒に」

「それを寄越しなさい吉井明久っ！ お疲れのお姉様を癒しの空間へお連れするのは美春の役目なのですっ」

「といっか清水よ。お主今どこから出てきたのじゃ？」

清水さんの足下は擦り焦げた靴のラバーの匂いで充満していた。高速で移動した証拠だろう。

「そんなことは問題ではありませんっ。今論ずべき問題は、映画館の暗闇の中でお姉様にどのような性的接触を謀るかですっ」

なんだろう。今議論に必要なステップが何段もスルーされた気がする。

「待つんだ清水さん。映画館なら隣の席の人に気づかれてしまうよ。接触するならもっと適した場所を選んだ方がいい」

「久保君！ 突っ込むところはそこなの！？」

久保君も最近Fクラスに毒されている気がする。

「ふふっ、甘いですね久保利光」

「甘い？ 何が甘いと言うのじゃ？」

自信たっぷりと言わんばかりに清水さんが持論を展開する。

「気づかれてしまうかもしれないというスリルが興奮を引き立てるのですっ」

とても朝の九時の会話とは思えない。

「おい吉井！ そのチケット寄越しやがれ！ 俺が木下を誘うんだ」

「い、いやじゃー！」

おお。高校の学園祭で大学生が泣くというシニールな光景が目の前に広がった。

「寄越しなさい吉井明久っ。美春がお姉様を誘いますっ」

「吉井君逃げるんだ！ あとで僕と観に行こう！」

「いや、最初に誘われたのはワシじゃからワシが行くのじゃー！」

「ねえなんの騒ぎ　　ってなに！？ 朝から店を汚すんじゃないわよっ！」

なんだか落ち着いて手伝える雰囲気じゃないなあ……。これ以上巻き込まれるのは嫌だから一人で観に行こう……。

3・Cにて。

「何名サマでスカ？」

「えっと、三人で」

「サミしいデスネ」

「ん？ あの片言の外国人……どっかで見たような……？」

受付から入ると場内は既に暗く、隣の人の顔が見えなくなっていた。ここまで暗くする必要はあったのかな？

『それでは、これより映画を上映いたします』

まあいいや。ゆっくり映画を観て時間を潰そうと。

『……やっぱりか。確認させてもらっぞ。(プロッ)(これは

痺れ薬か』

……やっぱりつまらない。

「シンジ……」

隣の人はかなり熱心に観ているようだ。その人はこの学校の制服を着ていて女子のようだけど。

暗闇にある程度慣れたのか、ぼんやりと顔が認識出来た。茶髪で
ショートカットで顔が秀吉に似てるなあ

「……って、木下さん？」
「え？ ……よ、吉井君！？」

問四十（決勝）

「あ、ムツツリーニ！ 秀吉も来てくれたの？」

「うむ、明久たちの試合をビデオに収めてくるよう言われたのじゃ」

「……………明久、遅い」

「ごめんね。ちょっと面白いこと聞いちゃってさ」

「……………？」

「それより、秀吉が来てるならちようどよかった。二人に頼みたいことがあるんだけど」

「「????？」」

「流石は決勝戦だね」

「……………豪華」

会場は昨日までの舞台を一新して豪華なものに変わっていた。やっぱりこういうところにお金をかけるべきだね。

「吉井君と土屋君。入場が始まりますので急いでください」

僕らの姿を見つけた係員の先生が手招きをしている。こうして係員を配置してるってことは、やっぱり扱いが違みたいだ。

『さて皆様。長らくお待ちせ致しました！ これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

聞こえてくるアナウンスはこれまで通り新野さんのものだった。

「あれ？ 去年はプロの人を雇ってなかった？」

「…………… 去年の人は服役中らしい」

服役中？ なにか事件でも起こしちゃったのかな？

「…………… 俺たちが女装した『ミス浴衣コンテスト』の司会者」

とてつもない罪悪感で押し潰されそうだ。

『出場選手の入場です！』

「どうしたんですか吉井君。さ、入場してください」

先生にボンと背中を叩かれる。ちょっとテンションは下がったけど、いまは試合に集中するべきだ。

「じゃ、ムッツリーニ」

「…………… (グッ！)」

『三年Cクラス代表・土屋康太君と、同じくFクラス代表、そして去年の優勝者、吉井明久君です！ 皆様拍手でお迎え下さい！』

割れんばかりの拍手が僕らをつつんだ。拍手の量でいったら去年の比ではない。

『そして対する選手は、三年Aクラス・木下優子さんと、同じくAクラス・根本恭二君です！』

二人がコールを受けて姿を表した。

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した』

アナウンスで説明が入るけど僕らは聞くまでもなく理解していることだ。

「根本君」

「ん？ なんだ吉井」

「君は、木下さんを脅しているね？」

根本君の眉がピクツと動いた。

「……誰から聞いた？」

「さつき、本人から」

「なるほど……」

根本君が隣の人物を見ながら顎に手を当ててなにやら考え事をしている。

「この学園のPVが去年作成されたことは知ってるよな？ そのPVに木下が起用されているんだが、実は校歌斉唱のシーンは木下秀吉と替え玉したらしい。俺はそれをネタに脅迫してるんだよ」

「それも聞いた」

「それならなんだ？ お前らには関係ないだろ？」

「関係あるさ」

凜とした態度ではっきりと反論する。

「関係ある、木下さんが困ってるんだから」
「……お前の考えることはよくわかんねえな」

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』

「……試獣召喚」

呼び出すと同時に、ディスプレイに僕らの点数が表示される。

『Aクラス 木下優子
& Aクラス 根本恭二
日本史 360点
& 世界史 211点』

VS

Cクラス 土屋康太
& Fクラス 吉井明久
地理 182点
世界史 180点』

『試合開始っ！』

「行くよっ、ムツツリーニ！」
「……………任せろ」

僕は根本君に向かって召喚獣を突っ込ませた。点数がそれほど離れていないなら、戦闘慣れしている僕に分がある。だけど、

「どうした？ なぜまともに攻めてこない!?」

僕は攻撃は極力抑えていた。根本君の攻撃を操作技術で流れるように避けていく。端から見れば拮抗しているように感じるだろう。

「吉井、さてはなにか企んでるな？」

「さあ？ そつちが何も言わない限り、僕は何も教えないよっ」

あえて急所を外し、少しずつダメージを与えていく。これで大体同じ点数になった。

「じ、じゃあ教えてやる。そのPVがこのあと表彰式で流されるんだが、俺がハッキングして滅茶苦茶な映像にすり替えた。大人しく負ければ、もとのPVを流してやるうじやないか」

次々と自分から種明かしをしていく。これが小悪党と言われる由縁なのだろう。

「返事は？」

「決まってる。ノーだよ」

「……お前、どんだけバカなんだよ？」

僕の返答を聞いて根本君が呆れたのと同時に、

「……………明久、出来た」

「その言葉を待ってたんだよっ！」

完全に勝つための準備が整った。

「じゃあ僕も教えてあげるね。試召戦争のルールをよく考えてみな

よ、Aクラスの根本君？」

問四十一（表彰）

「ふんっ、何をほざいてやがるんだ？ 試召戦争のルールならさんざん頭に叩き込んでるっての！」

そう。一年間試召戦争に振り回されてきた僕ら三年生は完璧にルールを把握している。でも、

「新ルールについての理解はまだまだだね」
「何っ!?!」

根本君があわててディスプレイや周りの状況を確認し始めた。ディスプレイの画面は点数以外に変わっているところはなく、ムツツリー二たちは根本君の背後でつばぜり合いを繰り広げていた。

「ふふっ、ハツタリか。そろそろ真っ向から向かってきてはどうか？」

「言われなくても 二重召喚っ！」

呼び声に応じて現れた分身に指示を出す。

「かかったな吉井！ 二体の召喚獣なら点数が半分になる。こっちも二体で仕留めりゃいい！ おい木下っ、早く加勢に」

そこで根本君がハツとした。そりゃだつて、

「……どうして木下は土屋と決着をつけきれてないんだ？」

あれだけの点差があつたのに、まだ向こうは拮抗している。いくらムツツリー二が戦闘慣れしているとはいえ、召喚獣を扱ったことがある人間なら誰しも思うだろう。

「ま、まさかつ？」

再びあわててディスプレイを見つめる根本君。心なしか小刻みに震えているってことは、もう僕の罠に気づいたって事だ。その回避が出来ないことにも。

「そのまさかだよ！ ムツツリー二出番だ！」

「……………御意」

呼ばれた本人は、召喚獣を構えながら根本君の召喚獣へと飛び出るように突進した。木下さんの召喚獣の背中から飛び出て。

『Aクラス 根本恭二

世界史 0点』

『い、いったい何が起こつたのでしょうか？ 土屋君の召喚獣が木下さんの召喚獣をすり抜けましたっ！』

「くっ………… 『日本史と地理はリンクしていない』か」

「そうだよ。だから、ムツツリー二は木下さんの召喚獣をすり抜けられたんだ」

「さてよ。それなら土屋と木下は 「拮抗してるふりをしながら時間を稼いでいただけさっ」

初めて戦闘を見た人ならば、このルールは細かすぎて伝わらない。一回このルールを身を持って知った僕だからこそ出来ることだ。

八百長かもしれないけど、木下さんを助けるにはこれしかなかったしね。

「吉井君。これでもう大丈夫なのよね？」

「うん、これであれば木下さんが負けてくれれば」

『ね、根本君が倒されてしまいました！ 残る木下さんは一人で三体を相手にどうするのかっ!？』

「……………」

「えっと、吉井君」

「な、なにかな？」

なんか、すごく嫌な予感…………。

「このままアタシがやられたら不自然すぎるから……………ちょっと真面目になるわよ？ 悪いけど」

「あはは。そんなとこまでやる気を出さなくても大丈夫じゃげぼしやあつ!？」

三年間で一番フィードバックが理不尽に思えた。

「ふう……………なんとか勝ったよ」

「……………一苦勞」

木下さんを挟み撃ちでなんとか倒して、僕らの優勝は決まった。

『ただいまから、表彰式に移ります』

「あ、ムツツリーニ。確認するけどあれは大丈夫なんだよね？」

「……………抜かりはない」

「おいクソジャリ。くつちゃべってないではやく腕輪を受けとりなよ」

「あ、はい」

意識をババアに向け直して、赤金の腕輪を受けとる。後は簡単なデモンストレーションを行うだけだ。

「あ、学園長。このあとのP.V、おかしいけど気にしないでください
いね」

「ああ。木下から全て聞いてるよ」

ババアの言葉を尻目に、壇上から降りる僕たち。

『それでは、学園紹介のプロモーションビデオをご覧ください』

巨大なディスプレイにプロモーションビデオが流れ始めた。沿革がなんやら難しくてわかんないけど。

「吉井、よくもやってくれたな」

「ん？ ああ、根本君」

「さっきの試合の時間稼ぎ。あれは木下が学園長に話をつけに行くためのものだったのか」

「うん。『P.Vが狙われるから、管理をちゃんとしてくれ』って」

「お陰でセキュリティが厳しくして入れなかった」

「あはは。それなら僕の勝ちだね」

ちよっと勝ち誇ったように胸を反らせてみる。

「いや、まだ方法はある。木下優子には痛い目を見てもらわにゃすまない」

そう言っつて根本君が取り出したのは
マイク？

『皆さんよく聞いてください！』

根本君はマイクを使ってそんなことを言った。突然の声に観客は驚いていた。PVはちょうど入れ替わった秀吉が校歌を歌っているシーンだ。

『そのPVに出ているのは、木下優子ではなく
木下秀吉なのです！』

そんな衝撃の事実を聞いた観客の反応は、

『『うん。そうみたいだね』』

冷たかった。

「ど、どうしてだよ？ 入れ替わりだぞ？
問題視しろよ！」
「根本君。違うんだ。よく見てよ」

僕がディスプレイを指差すと、その先にあったのは、

『出演・木下優子・木下秀吉』

そんなクレジット。

「は………?」

「簡単だよ。出演のクレジットをムツツリーニが書き換えただけさ。始めから双子でPVに出てたってすれば外見は同じだしね」

「くそっ………!」

捨て台詞を残して根本君は去っていった。

「む? このままじゃとワシは女子の制服を着てPVに出たことになるような気がするのじゃが………?」

問四十二（呼出）

デモンストレーションを終えて表彰式が閉会したあと、僕とムツツリーニはそれぞれのクラスに急いで戻った。

「僕の優勝のお陰でお客が増えるといいんだけどな」

あつ、お店が見えてきた。誰かが迎えてくれるといいんだけど。

「ただいまっ。優勝し」

「アキっ、受け取りなさいっ！」

まさかお盆が迎えてくれるとは思わなかった。

「お祝いしてあげたいけどそれどころじゃないのよ！」

「バカなお兄ちゃんもお手伝いしてくださいですっ」

「貴方のせいでお店も美春もてんでこ舞いですっ」

「お主もはやく厨房に回ってくれ！ 落ち着いたらウェイターも頼むっ」

「吉井君。終わったら盛大にお祝いしてあげるよ」

ちよつと涙が出た。

「ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各

生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

怒濤の勢いでやってくるお客さんをさばいて案内しては料理して案内してさばいて料理して。ここまでの業務を仕切った美波に敬意を払いたい。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

「覗くんじゃありませんよブタ野郎」

そんな無慈悲な宣告。

「えっ！？　せめて美波のウエイトレス姿は写真に収めたいのにな！」

「駄目ですっ。お姉様の由々しきお姿は美春だけのものですっ。美春はこのあとお姉様と更衣室でいやらしいことをするんですから！」

「待つて美春。あなたと二人で更衣室ほど危険なものはないわ」

「じゃあ葉月お嬢様もご一緒すれば問題ありませんっ」

「バカなお兄ちゃんたちさよならですっ」

おお。葉月ちゃんも美波と同じくらい足が早い。やっぱり姉妹って似てるなあ。

「ああお嬢様っ！？　こうなったらお姉様と二人きりで保健室にいくしかないませんっ」

「どうしてその考えが出てくるのよっ！？　こうなったら木下！　アンタも一緒に着替えに来なさいっ！」

「だからワシは男じゃと言っておるっに！」

何て言うかこう……一兎をおつたのに一兎も獲られなかったよ。

「しょうがないな。じゃ、久保君。僕らも着替える？」

「ああ。早く更衣室に行こう」

心なしか久保君の鼻息が荒い。

P i P i P i P i P i P i

ん？ メールだ。誰からだろう。

【送信者 島田美波

「たすてけ」】

懐かしさと悲しさで涙が止まらなかった。

P i P i P i P i P i P i

ん？ もう一通？

【送信者 姫路瑞希

「今から屋上に来てくれませんか？ 話したいことがあります」】

「話したいこと？ なんだろう」

美波を清水さんから守らなきゃいけないけど、秀吉がいるから一応は安全だろう。

「吉井君。どうかしたのかい？」

「うん。急用ができたみたい。久保君は先に着替えちゃってて返事を待たずに校舎の屋上へと向かう。」

(吉井君と更衣室なんて、千載一遇のチャンスだったのに……)

なぜか絶体絶命のピンチを脱した気がしてならない。

「ふう……やっと着いたけど……」

筋肉痛になりかけている身体を必死に動かして階段を昇ると、外の風が気持ちよかった。

「あれ？ 姫路さんはどこにいるんだろう？」

『あー……ーひーさー……ーんっ！』

「ん？ 誰か呼んだ？」

回りを見渡してみるけど、辺りに人の気配はない。空耳だろうか？

『……っちです……ーっ！』

いや、空耳じゃない。これは

P i P i P i P i P i P i

「あ、着信だ」

急いで携帯を取り出して電話に出た。

『もしもし明久君ですか？』

「その声は 姫路さん？ 君はいまどこにいるのさ？」

『ふふっ。屋上ですよ』

「屋上？ それなら今僕もいるけど……」

『違います。私がいるのは新校舎の屋上です。明久君は旧校舎の屋上にいるでしょ？』

「え？」

あわてて新校舎の屋上を見るとそこでは姫路さんが大きく手を振っていた。

「い、ごめんなさいっ！ てっきりこっちかと思って……」

『仕方ないですよ。クラスが変わって、それぞれの校舎の屋上が変わったんですから』

「それでも確認しなかった僕が悪いよ！」

『あはは。明久君は変わりませんね』

「それって喜んでいいのかなっ!？」

『あははははっ』

姫路さんは本当に楽しそうに笑ってくれた。

『……ねえ、明久君。もう一回聞いてもいいですか？』

「？」

『私と離れて、どっか思ってますっ？』

問四十三(告白)

「えっ……………?」

『……………恥ずかしいから二回は言いませんよ』

その質問には昨日答えたはずだ。それでもまた質問してきたのなら、姫路さんはあの返事では納得出来なかったことになる。

「そ、それは寂しいけど、この学園の制度なんだから仕方ないし。っていうか去年一緒のクラスになれたことが特殊だから……………」

『はあ……………やっぱり明久君はお馬鹿さんですね』

彼女の意図がわからない。なにを求めているんだろう。

『私が聞きたいのはそんなことじゃないんです。私と離れて、純粹にどう思ったか聞きたいんです』

姫路さんの声は真剣そのものだった。それは、今まで聞いたことがないくらいに。

『今だってこんなにも離れてるじゃないですか。気づかない間に、私たちはこんなにも離れてるじゃないですか。私は　　寂しいです』

姫路さんの本心。僕も姫路さんの気持ちと一緒に。だから、

「僕も姫路さんと離れたくなかった。離れて寂しかった」

『明久君……』

「でもね、近づく方法ならあるんだよ」

『えっ……？』

「去年は姫路さんが来てくれた。だから今度は、僕が姫路さんのところに行くよ」

そう。なにも姫路さんが無理に近づいてくる必要はない。

「いつか試召戦争で、Aクラスに勝つ。そして、僕力で姫路さんを越えて見せる。さすがに学力では勝てないけど、実力で姫路さんに近づきたいな」

『……………ふふふっ』

なにかを悟ったような姫路さんの微笑。もしかして初めてかもしれない。

『変わった宣戦布告ですね。さすがはFクラスの代表さんです』

「それは誉めてるのかな！？ 僕だってちゃんと成長してるんだよっ！？」

『はいはい。わかりましたよ。それじゃ』

そこで電話が切られた。向こうの校舎を見ると、ちょうど屋上の

入り口のドアが閉まるのが見えた。

「姫路さん……」

「何？ 瑞希がどうかしたの？」

そんな背中から聞こえてくる声。

「みつ、美波！？ いつからそこに!？」

「な、何よ。アキがボーツとしてるから声をかけただけよ！」

よかった。どうやらさっきの電話は聞かれてなかったみたいだ。聞かれていたら恥ずかしさと姫路さんに対する申し訳なさで潰れていたかもしれない。

「それより、早く行きましょ！ 後夜祭もう始まっちゃってるわよ？」

疲れを微塵も感じさせない美波の笑顔。その魅力的な雰囲気思わずじつと見つめてしまう。

「も、もう！ さっきから何よ!？ 人の顔じろじろ見て！」

「ご、ごめんなさいっ。美波がタフだから頼りがいがあるなって思ったらついまじまじと……」

ってなにを言ってるんだ僕は！ 女の子に対して頼りがいがあるなんて失礼極まりないだろ！

「た、頼りがいね……」

あれ？ 思いの外好反応なの？

「そ、そう言えばさ、アキ。Dクラスとの試召戦争のとき、『ずっと守っていてほしい』って言ってくれたじゃない？」

「う、うん」

「あれって」

と、美波が何か言おうとしたところで。

『お姉様をたぶらかす気配……』
「ロシマス」

邪気の発生を確認。

「み、美波！ 今こそ守って！ この僕の頸動脈をシャーペンの猛威から守ってよ！」

「美春！？ アンタまた私の邪魔をつ！」

「お姉様は美春が守りますっ。ブタ野郎はこの世から消え去りなさいっ」

夜の屋上は怒号とシャーペンの飛び交うカーニバルだった。

「む？ 明久に島田。それに清水か。悪いが先に始めておいたぞ」
「これ以上Fクラスの皆を待たせるわけにもいかなかったものでね」
「ああ、ゴメンね秀吉に久保君。ちよっと手間取っちゃって」

手間取ったのが清水さんとの格闘だなんて言えない。

「で、打ち上げは去年と同じ近所の公園ね。悪くないんじゃない？」

既に須川君たちFクラスメンバーも揃っていて、残るは僕たちだけだった。僕と美波は近くにあったベンチに座った。

「美春はお姉様と一緒にならどこでもかまわないですっ」

「まあよい。お主らも乾杯するのじゃ」

お盆に乗せたジュースを僕らに渡してくれる秀吉。やっぱり女子ってこういう気遣いがすごいよね。

「美春はお姉様の為にお菓子を買ってきますっ」

「清水さん。僕も同行するよ」

そう言っつて久保君たちは近くのコンビニへと向かって行った。

「……心配じゃ。様子を見てくるかのう」

秀吉もそれに続く。なにを心配しているんだろう、久保君がいるから変なものは買わないと思っただけだ。

「ふう……疲れたわね」

「うん……美波には迷惑かけちゃったしね。後でお礼をしなきゃ」

コテンッ。

「……っつて美波？」

横を見ると、そこには僕の肩に頭を乗せて眠る美波の顔があった。やっぱり表に出さないだけで、相当疲れていたんだろう。強がりな美波らしい。

でもこのままじゃマズい。何がマズいって、僕の心拍数とか理性とかが。

「アキい……むにゃむにゃ……」

こ、こんな美波は見たことないっ。なんだこの可愛らしさ!?!
ヤバい。こんなの、僕の知ってる美波じゃな

「いたーっス!!」

「へ?」

公園の入り口で絶叫しているのは 夏川さん? 横には常村さんもいる。ってなんで夏川さんはダッシュでこっちに向かってくるの!?!

「吉井先輩!! アタシの話を聞いて下さいっス!!」

夏川さんは僕の目の前でピタッと止まって言った。美波が寝ていることは気にならないらしい。少し遅れて、常村さんもやって来た。晴れ晴れとした夏川さんに比べてなんだか苦い顔をしてるけど。

「吉井先輩 いや、師匠! アタシを師匠の弟子にしてくださいっス!!」

【閑話】 僕と師弟と越冬コンビ

清涼祭も無事に終わり、Fクラスメンバーとの打ち上げを終えた数日後。お祭りの雰囲気はすっかりどこかへいってしまい、学園は元通りの生活に戻っていた。

「うーん。今日もいい朝だなあ」

「おはようございます師匠」

弟子が出来たことを除いて。

「おはよう、夏川さん。でもなんで僕の家の前で待ち構えているのかな？」

今日はたまたま姉さんが出張でいないからよかった。いたらまた女の子を連れてきたって折檻に合うのは目に見えているしね。

「師匠と一緒に登校するためッスよ」

返ってきたのはそんな答え。はたして答えになっているのかなあ……。

「じゃあ行くところか？」

「はいっ！」

しばらく歩くけど、特に話すこともなく校門の前に着いてしまった。

「そうだ。師匠、越美も連れてFクラスに遊びに行っても良いツスカ？」

「うーん……別に構わないけど」

「やったツス！ それじゃまた後で！」

とびきりの笑顔で校舎へと駆けていく夏川さん。あんなにはつらつとした美少女が、本当に坊主先輩の妹なのか疑問が残る。

「じゃ、僕も早く行くとするかな」

『諸君。ここは何処だ！？』

『『『異端者を罰する法廷の場だ！！』』』

本当に早く逝きそう。

「悪かった！ 朝から女の子と登校なんて真似をした僕が悪かった！」

くそつ。迂闊だった！ 登校程度の罪だったら美波や秀吉だところまで騒ぎにならないのにつ。

「おはよう 　　ってアキ？ 朝からなにやってるの？」

「助けて美波！ 早くしないと紐無しバンジーの刑に処されるっ」

「まったく……須川、分かるように説明してくれる？」

『朝、後輩の美少女と一緒に登校してきたんだ』

「久々に腕が鳴るわ」

ヤバイ。マジヤバイ。

「アキ？ アンタついに後輩の女の子にまで手を出したの？」

美波の顔が直視出来ないっ。いや、口説き文句とかじゃなくてさ！

「ち、違つよ！ あの子は弟子！ 弟子だつて！」

『『『弟子？』『』』』

連中の殺意が消え、一旦はこちらの話を書く体制になる。これは
もしや 助かる可能性がある。

「うん、よくわかんないけど弟子にしてくれつて来ただけで、やらしい想像とか悪巧みとかはしてないんだって！」

『ふむ……それなら問題無さそうだな』

須川君が鎌を下ろしながら呟いた。よしっ、会長の戦意がないなら自然と団員の士気も下がるはずだ！

ガラララッ

「もう、冬美。私はいいつて言ったのにつ」

「いいからいいから。失礼しまッス！ 吉井師匠、今日は色々教えてくださいッス！ なんならこの子をムチで打つなり縄で縛るなり好きにしてください！！」

『……色々？』

『……ムチ？』

『……縄？』

「待って！ 刑を受けるからその誤解を解かせて！」

「まったく……朝から人騒がせなんだから」「ごめんなさい……」

刑は（血を見慣れていない）後輩の目の前ということ、団員全員によるビンタで済んだ。それでも美波の一発の衝撃は致死ものだったけど。

「それで、夏川さんと常村さんだっけ？ アキの弟子になった子たちってのは」

「はいっ、二年Aクラス！ 夏川冬美と言っス！ 以後よろしくです！」

「ワタシは同じく、常村越美です」

落ち着いた表情の常村さんとは対象的に、朝と変わらないはつらつとした笑顔で受け答えをする夏川さん。あの状態の美波を見ても平気なんて、なかなか根性が座っている子だ。

「私は島田美波。清涼祭で会ったわよね？」

「はい……あのときはすいませんでした」

「申し訳ないッス……」

ばつの悪そうな顔をそのままペコリと頭を下げる。

「いいのよ、気にしないで。それよりも聞きたいことがあるのよ」

「はい、なんなりと」

「うん、ウチが聞きたいのはね」

「

ん？　なんで美波はそこで僕を見るの？

「越美ちゃんと冬美ちゃんはどうしてアキの弟子になったの？」

「え、アタシらツスか？　えーっと……」

頭を上げて言葉を探す夏川さん。美波は親しみを込めて下の名前で呼んでいた。気遣いってすごいなあ。

「感服したから、ツスカね」

「感服？　何に？」

思わず美波と声が被ってしまふ。

「二年生では変な噂ばかりで、はっきり言って近づきたくない人だったかも」

「でも、アタシたちを笑って許してくれる人間性とか……戦闘で二人がかりでも平気であしらっちゃう強さとか……説明できない素直さとか……努力しても手に入らないものを沢山もっているんツスよ、吉井師匠って」

「ワタシたち、こんなに純粋な先輩に会ったこと無かったんです。この人から学びたいって、心から思いました」

後輩の口から語られる僕の人となり。それは紛れもなく、二人が僕に抱いている印象なんだろう。

「……………」

「えっと、島田先輩？」

「どうかしましたか？」

「『美波先輩』でいいわ。二人とも」

「は、はい」

「アキ」

「うん？」

「いい子達じゃない。面倒みてあげなさいよ？」

「そりゃ、まあ。うん」

なにかを懐かしむような笑顔の美波。この子たちに対して思うところでもあったんだらうか。

「おはようじや」

「おはようございますお姉様っ」

「おはよう」

気づいたらもう授業が始まる時間だった。秀吉たちがのそのそと教室に入ってくる。

「あ、木下たち。ちょっと紹介するわね。アキのお弟子さんの

」

二人を連れて秀吉たちへ駆け寄る美波。こうしてみると、あの二人は美波の妹に見えなくもない。

『結論。吉井明久は、ハーレムの罪によってジャーマンスープレックスの刑に処す』

『異議無し』

ま、こうなるよね。

【閑話】僕と師弟と越冬コンビ（後書き）

以上、初めての閑話でした。次回から合宿編に入ります。

問四十四(合宿)

越冬コンビが僕の弟子として付き回るようになって数週間。僕は雄二たちを誘って屋上でお昼を食べていた。

「なあ、明久。あの越冬コンビが弟子になったそうじゃねえか」

「まったく、どこから聞いたのさ？」

「……………俺を舐めてもらっちゃ困る」

「納得出来てしまつところがまた恐ろしいのう……………」

秀吉、そこを突っ込んだらムツツリーニという存在を根本から否定することになつちやうよ。

「ずいぶんとまた面白そうじゃねえか。周りとはもう馴染んでるのか？」

「うん。Aクラスの皆にも紹介して、特に美波とは仲がいいみたいだよ」

僕が留守のときは大体美波と話をしているらしい。話の内容の大半が僕というのも考えものだけど。

「しかし……………ワシはどうも慣れんのう」

「どうしてさ？ いい子達じゃない」

「いやそれは重々承知しておるのじゃがいかんせん……………」

あれ、気のせいかな？ 秀吉の肩が小刻みに揺れているように見える。

「……モヒカン先輩の妹、というのがネックじゃ」

気のせいじゃなかった。

「だ、大丈夫だよ秀吉。常村さんは常村さん、モヒカン先輩はモヒカン先輩だよ」

「それはわかっておるのじゃが……体は拒絶しておるのう」

うーん……これは思わぬ障害が出来てしまった。確かに、あの先輩たちとの縁が切れずに復活してしまったというのは考えものかもしれない。

「それで、越冬コンビは今なにをしている？ てっきり一緒に飯を食べたがるかと思っただが」

「いや、最初の頃はそうだったんだけど最近は

「越美！ 冬美！ おとなしくそこを退きなさい！ ウチはこれからアキとお昼食べるんだから！」

「いーえ！ いくら美波先輩でもお通し出来ねえツスよ！」

「その人を連れてる限りは通すな、と吉井師匠に言われてるものから」

「先輩に向かってその人とはなんですか。一体美春が何をしたと言っんですかっ！？」

「吉井師匠に手を挙げましたよね？」

「当然ですつ。あのブタ野郎がお姉様とランチなんて真似は見過ごせませんっ」

「じゃあ通せません」

「美春！ お願いだからウチから離れて！」

「お姉様は冷たいですっ」

「というわけで入り口の見張りを頼んでる」

「……………懸命な判断」

「思いの外、越冬コンビは戦闘力が高くての」

「ま、落ち着いて飯が食えるならいいか」

「さて、お昼も食べ終わつたしそろそろ戻る？」

「そうだな……………いや、ちよつと待て」

「む？ どうしたのじゃ雄二よ」

いきなり真剣な顔で僕を見つめる雄二。あれ、何かマズいことでもあつた？

「明久。お前、今年は脅されてないだろうな？」

「脅されている？ 何の話？」

「明日からの強化合宿に決まつてるだろ」

「あつ……………」

じわじわと去年の苦い記憶が呼び戻される。去年は清水さんに脅迫写真を送りつけられてさんざんな目に会つたんだつた。

「今年は受験なんだ。俺だつて五日間の平和が欲しい。不安要素は今のうち排除しておきたい」

そうか、清涼祭でも脅迫騒ぎがあつたんだから警戒に越したことはないよね。

「……………あれ？ なにか忘れてるような……………」

なんだったつけ？ 思い出せない。

「じゃが、今年は特に表だった事件は無いぞ。ワシらが動かなければとつてい騒ぎなぞ起こらんで」

「そっか、なら安心なんだが……」

雄二が真剣な表情で考え出す。今からそんなに考え無くてもいいと思うんだけど、これがコイツの性分だから仕方ない。それよりちよつと変わった質問でもして緊張をほどくとするかな。

「ねえ雄二。今年も一緒に電車で行く？」

三年生になってたまにしか行動しなくなったんだから、移動の時間くらいは一緒に行っても罰にはならないだろう。

「何を言ってるんだ明久」

「ん？」

「……俺たちには学園からバスが出る」

「な、なにいつ!？」

そう言えばそうだった！ 畜生こいつら

「……Cクラスはマイクロバスが出る」

「Bクラスはリムジンバスだったかな？ ちと座席は狭いが」

ふん。さすがは試験校。お金の使いどころは使ってくる。

「僕たちは、」

「現地集合じゃ」

「ちょっとは回してくれ。やっぱり設備の向上は目指さないとなあ……。」

問四十五（心理）

合宿場所の卯月高原に向かう電車の中。僕らFクラスの五人は席に座って電車で揺られていた。

「ねえ、まだ着かないのかな？」

「合宿場所の卯月高原は遠いからね。あと二時間はかかるよ」

「むづ。何をしてもなく、中途半端な時間じゃのう」

久保君の対面、つまり僕の斜め前に座っている秀吉が退屈そうにあくびをした。僕もつられて眠くなってしまいそうだ。

「ねえ美波。なにか面白いものは無い？」

「そうね……窓の外を見てみたら？ なにかあるかもしれないわよ」
「窓の外？」

言われた通り目を外に向けてみた。するとそこは緑の多い自然の風景。から真つ暗なトンネルへと突っ込んでいく最中だった。おのずと窓には僕の顔が映る。

「……美波。君は、僕に一体何を言いたかったんだい？」

「わ、わざとじゃないわよ。確かにアキの顔は面白いけど」

「確かにそれは否定できんの」

「傷ついた！ 今の二人のやり取りで僕は毎晩枕を濡らすほどに傷ついた！」

異性から顔が面白いと評される僕って……。一応代表なんだから敬意を払って欲しい。

「お姉様っ。こんなものが売ってましたっ」

さつきトイレに向かった清水さんが戻ってきた。その手にはなにやらあやしげな本が一冊。

「美春、何を買ってきたのよ？」

「心理テストの本ですっ。これでお姉様と美春の相性を確かめましようっ」

「また清水は難儀なものを……」

「面白そうじゃないか木下君。清水さん、全員でやってみてもいいんじゃないかい？」

あれ？ 久保君がこういうものをやりたがるなんて意外だな。

「では美春が読みますっ。『あなたは今、独りで森の中で道に迷っています。明かりもなく暗い森の中を進むと、あなたは湖のほとりに小さな小屋を見つけました。これ幸いと中に入るあなた。すると、そこには椅子とベッドと肖像画が。さて、その肖像画に描かれている人物の特徴は？ 頭に浮かんだものを三つ挙げてください』だそうです。答えは適当に紙に書いて美春に渡してくださいっ」

三つ？ えーっと、その状況なら僕だったら、

『1、明るい雰囲気

2、綺麗な髪

3、友好的な表情』

僕は一番早くに書き終え、裏に自分の名前を書いて清水さんに手渡した。

「はい、清水さん出来たよ」

「ワシもじゃ」

「ウチも」

「僕も書けたよ」

清水さんはそれらを受け取って一通り見直す。すると、

「あら……………」

紙を見た清水さんは顔にクエスチヨンマークを浮かべた。

「どうかしたの？」

「いえ………… ちょっと意外な結果が出たのでびっくりしただけです」

意外な結果？ 僕何か変なこと書いたっけ。

「これは『あなたの好きな特徴』が分かる心理テストなんですけど…」

清水さんが一枚ずつ膝の上に置いていく。

『1、明るい雰囲気

2、綺麗な髪

3、友好的な表情』

「あ、これは僕のだ」

「明久は優しいおなごが好きなのじゃな」

「へ、へえ……………」

美波がしきりに自分の髪の毛を触りだした。そういえば美波の髪はさらさらで綺麗だったなあ……。

「問題は次です」

- 『1、楽しいげな表情
- 2、優しい瞳
- 3、明るい雰囲気』

どうやらこれを書いた人は穏和で明るくて楽しい人が好きみたいだ。……けどどこにも問題は無いような気がするんだけど。

「うむ、これは」

秀吉が身を乗り出して紙をチェックする。あ、そうか、これは秀吉が書いたのか。

「ワシじゃな」

「ウチね」

「僕のだね」

痛烈な違和感。

「えっ……？ 清水さん、これって……？」

「ええ……。三人が三人とも同じ特徴の人が好きなようです」

「「えええっ！？」」「」

ちよつとなに！？ なんで合宿に向かう車内で修羅場が起きようとしてるの！？

「ま、待ってよ美春。あくまで特徴が同じだけでしょう？ 対象が一緒とは限らないわっ」

「その可能性もありますが……美春は同一人物の可能性を疑います」「同一人物、のう……」

「気まずい……。これは思わぬ災難だ。」

「まさか三人が三人とも同じ人を好きになっていたなんて」

再び痛烈な違和感。

「ア、アキ！ アンタもなにか言い返しなさいっ」

美波が僕の腕を引っ張って助けを求めてきた。でもその前に、確認しなくちゃならないことがある。

「美波」

「な、何よ？」

「それと秀吉」

「む？ どうしたのじゃ？」

二人に尋ねたいこと。それは、

「二人が好きな人ってもしかして……」

「！？」

さっきの心理テスト。あの結果が本当なら、僕は大変なことを知ってしまった。それは、今まで二年間、一緒に過ごしてきた二人の好きな人。今までずっと居ただけ、気づかなかった。そうか、二人の好きな人って

「……女の子だったの？」

「「違ああうっ！……！！」」

久保君と同じ女の子が好きなのか……。なんとなくか、色々な意味でショックだ……。

問四十六（到着）

「おお、明久に秀吉。お前らやっと着いたのか」
「……………遅い」

バスを乗り継いでやっとの思いで合宿所に到着すると、学園発のバスで先に着いていた二人が迎えてくれていた。心身ともに疲れた身としてはありがたい。

「ん？ どうしたんだお前ら。なにやら全員元気がないみたいなんだが」
「あはは……………来る途中にちょっとね」

「ウチは男の子が好きな普通の女子なのに……………」
「ワシは男じゃからおなごを好いておかしいことはないのじゃが……………腑に落ちん」
「お姉様の思い人はだれなのでしょう……………？ あの結果は何を意味するのですか……………？」
「……………吉井君は僕が女の子を好きだと思っているのか……………」

「……………おい、変な宗教のセミナーにでも行ってきたのかコイツら」
「……………上の空」

僕もあの四人と同じだけ強いショックを受けた。だってあんな結

果を見せられたら誰でもそうなるだろう。早く部屋に行つて横になりたい気分だ。

「雄二、僕の部屋の場所教えてくれる？ ゆっくり休みたいから」
「お、おお。秀吉と一緒にいてこい。お前らは同じ部屋だからな」

雄二が美波たちにも聞こえるくらい大きな声で言った。その顔には僕をハメようとする悪意がこれでもかとにじみ出ている。

「……あ、そう……」「……」

「……にゃ　っ!？」

「? どうしたのさ雄二。地球の言語を話せていないよ?」

「い、いや、秀吉と同じ部屋なんだぞ!？　いつものお前らならもつと取り乱すだろうが！　一体来る途中に何があつた!？」

「……恋の悩み?」

『『『『『グサツ』』』』』

「ああ……じゃあ教えてあげるよ雄二、ムツツリー二。秀吉はね……」

虚ろになりつつある目を雄二に向け、ポツリと呟く。

「……女の子が好きなんだ」

「いや、秀吉は男だから普通のことじゃないか」

その後の雄二の言葉は僕の耳には届かなかつた。

『まったく……。秀吉、説明してくれないか?』

『実はのう……』

「ふう……やっど部屋に着いたよ」

僕らFクラスの部屋は和室で、建物の三階にある。五時間近く公共機関を乗り継いできた体には少々堪えた。

「なんだ、吉井じゃないか。遅かったな」

「ん？ ああ、須川君。君もこの部屋なの？」

出迎えてくれたのは、異端審問会会長の須川亮君。見回してみると、福村君ほか四名の生徒が部屋のあちこちで退屈そうにしていた。

「ああ。お前と久保と木下で最後だ。今日は飯を食って風呂に入っ
て終わりらしい」

「ふーん。まあ去年と同じだね」

すると退屈そうにしていた連中がぞろぞろと集まりだした。

「それよりもよお……木下と同じ部屋かあ」

「過ちが起きちゃったりしないかなあ？」

「起きるとしたら俺だろな……ぐふふ」

「うひひひひっ」

正直に言おう。コイツらと一緒に過ごすのは気持ち悪い。

「みんなちょっと待って」

『『『？』』』』

「実は、秀吉は好きな女の子がいるみたいなんだ」
「……………何いいいつつ!?」「……………」

施設中に聞こえるんじゃないかと心配になるくらい巨大な声で絶叫するバカ×五人。あ、いま福村君が我を失った。横溝君は発狂しながら壁に頭を打ち付けている。

「よ、吉井! それは確かか!？」

かろうじて踏みとどまった須川君が凄じ勢いで迫ってきた。この質問への答えは決まっている。

「うん。来る途中に心理テストをやったんだけど、そういう結果が出たんだ」

「そうか……………。おい、お前ら起きろ!」

「……………はっ!?」「……………」

トリップしたメンバーを喝で蘇らせる須川君。異端審問会会長の地位は伊達じゃない。

「いいか、この合宿では木下に手を出すんじゃない。そして手を出そうとした連中は潰して構わん。これは会長命令だ。団員全員に伝えろ」

「す、須川君!？」

な、なんかキャラ変わってない? もの凄くカッコいい指揮官にしか見えないよっ!

「木下秀吉は我らの心の癒しだ。なら、その恋路を応援しようじゃないか。相手が男なら引き裂き殺してやるが、女が対象なら我々は

立ち入る隙はない。素直に諦めて警護に回ろっじゃないかっ！」
「「「「「か、会長っ！！」「」「」」

須川会長の熱い演説が終わると、後方でふすまがゆっくりと開いて誰かが入ってきた。

「ふう……疲れたぞい。遅れてすまんの」
「待たせてしまったね、みんな」

秀吉と久保が申し訳なさそうに言う。それにしても少し遅かった。何か用事でもあったんだろうか。

「福村、横溝。外敵が来ないように入り口で見張るんだ」
「「はっ、須川会長」」

秀吉警護モードに移行するFFF団員。今更だけど、この組織って味方になればかなり安心できる。

「またなにか起きそうじゃのう……」
「木下君、このクラスの場合は何も起きないほっがおかしいと思うよ」

久保君の言うことはもっともだ。

「二人とも、とりあえず荷物をおろせば？ 預かるよ」
「うん、ありがとう吉井君」

二人の荷物を受け取って適当に壁際に置く。久保君の荷物はやけに大きいけど、なにか入っているのだろうか。

ダダダダッ！

「てっ、敵襲だあっ！」

福村君がふすまを凄じ勢いで開けて部屋へ飛び込んできた。まさかこんなにも早く邪魔者がっ！？

「何っ！？ 相手は！？」

「それが　ぐぎゃっ」

「全員手を頭の後ろに組んで伏せる！」

福村君を畳みに放り投げ、僕らに高圧的に命令するのは

「てっ、鉄人！？」

問四十七（発覚）

「な、なにごとじゃ!？」

「木下も動くな! それと窓から逃げ出そうとしても無駄だぞ吉井!」

くっ、流石鉄人。まず止めるべき人間を先に制すとは……!

「じゃから、なぜ突然の行動で窓へ向かえるのじゃ……?」

その答えは簡単、『防衛本能』だ。

「真つ昼間からなんの用ですか? 僕はまだ着いたばかりなんですけど」

窓を閉めながら鉄人に向かう。部屋で散り散りになっていたメンバーも渋々とそちらを向いた。

「実はな……、今年も大浴場の脱衣所にこれが設置されていたんだ」

そう言っつて鉄人が差し出したのは

「……カメラと集音マイク?」

「え!?! それって盗撮じゃないですか! 一体誰がそんなことを!」
「さあ。それはわからんが、ともかく一大事なんだ。勉強の合宿で二年連続騒ぎなんて真似になったら、この行事そのものが廃止されるやもしれん」

鉄人は腕組みをしながら僕らを見回す。ちなみに出入口を完全に封鎖しているので隙を突こうにも出来ずにいる。これが大人の経験値か……。

「む？ ワシらを犯人と疑っておるわけではないのかの？」

「当たり前だ。たったこれだけで犯人を決めつけてしまうほど俺はバカじゃない」

「では、西村先生はなぜ僕らの部屋に？」

「吉井が疑わしいのは事実だからだ」

うつつ……否定出来ない辺りが悔しい。ま、日頃の行いのせいなんだから仕方がない。

「それで、被害にあった人はいたんですか？」

まだ時間も早いし、お風呂に入りたがる女子なんていないだろうけど。

「いや、いない。幸い俺が巡回していた最中に見つけたんだ」

「それならばまだ騒ぎには発展しないの」

秀吉がホツと息を吐く。僕だつて、出来ることなら騒ぎなんか起きて欲しくない。ここは早期対処をしてくれた鉄人に感謝すべきだろう。

「そうだね秀吉。女子風呂にカメラがあったら安心してお風呂に入れないもんね」

「もう一度言つが、ワシは男じゃからな!？」

秀吉の切実な叫びが部屋に響き渡る。でもそんな嘘にはもう騙さ

れないよ？

「おい吉井。貴様、なにか勘違いしていないか？」

そんな鉄人のクエスチョン。

「へ？ 勘違いって何を？」

しまった、と言いたげに顔をしかめながら、言いにくそうに口を開いた。

「いや、カメラが仕掛けられたのは、」

重い口を開いて出てきた鉄人の言葉は、そんな

「……男子の脱衣所だ」

そんな、常識外の犯行現場。

『『』はあああああっ！？』』』』』

あとで聞いた話だけど、この時の叫び声は一階で勉強していた姫路さんたちAクラスにまで聞こえていたらしい。

「すまん。説明するのを忘れていた」

「いや『脱衣所で覗き』って話題でその場所をすぐに連想できる高校生はいませんかよっ！？ っていうか僕は男子を覗くような人間だと認識されたわけ！？」

もう今日はショックな出来事のオンパレードで頭がおかしくなり

そつだよ……。

「に、西村教諭。いくら明久でもそこまでのバカはやらぬぞ」

「木下君の言う通りです。それに吉井君は浴場を通らずにまっすぐこの部屋へ来たはずですから」

いまだシヨックが冷めぬ中で、秀吉と久保君の立証は心に響いた。

「わかった、それは信じよう。だが、くれぐれも騒ぎを起こしたり巻き込まれたりしないでくれよ」

そつ言い残して、鉄人は別の部屋へと去っていった。

「ふう……やっと思ったね」

「じゃが、それにしても驚きじゃったのう。まさか男子の覗きをしようとする輩がおるとは思わなかったのじゃ」

「そつだね。そんなことをする人はよっぽどエロい人か同性愛者かだからね」

それにしても……なんでこの学園はこういう騒動が起きやすいんだろう。入学試験で人格もチェックしたらよかったのに。

「吉井君。悠長なことは言ってられないよ」

突然、それまで黙っていた久保君が口を開けた。

「どうしたのさ久保君。そんな真剣な顔して」

「いいかい、吉井君。このまま行ったら最悪の場合、君の裸を女子に見られてしまう」

『君の裸』というフレーズにちよつとだけ違和感を覚えた。

「でも久保君。何人かに見られるだけなら事故みたいなものだし、特に気にしなくても」

「そして ネット上にアップされる」

「全力で阻止しよう」

例えば姫路さんみたいな綺麗な子が覗いてくれるならむしろ喜ばしいかもしれないけど、不特定多数の人に見られると問題が生じる。もしもモノホンサイトなんかに送られた日には、社会的に破滅するだろう。

「とにかく、このままじゃ犯人の目的さえもわからない。坂本君や土屋君とも協力して解決策を寝るべきだ」

「そうじゃのう。ちよつと良いことに、これから夕食じゃ。雄二に言ってみるとしよう」

秀吉がきつかけとなるように部屋から出ていった。部屋にいたメンバーはぞろぞろとそれに続く。だけど、いくら雄二でも覗き対策なんてシチュエーションは経験してないから頼りになるんだろうか……？

問四十八（容疑）

「ん？ どうしたんだ揃いも揃って。まさか、また何か騒ぎを起すつもりじゃないだろうな？」

「……………仰々しい」

食堂につくと、既に夕食を食べていた雄二とムツリー二と出くわした。今日は焼き鮭定食か……………見ただけでヨダレが垂れる。

「いや、その逆じゃ。騒ぎを起こさぬ為に協力してほしくて来たのじゃ」

「そ、そうだよ。このままじゃ雄二とムツリー二も被害を受けることになるんだからね」

「……………俺たちも？」

「そいつは厄介だな……………。話を聞こうじゃないか」

「なるほどな。誰かが男子風呂にカメラを置いたって訳か」

「……………少なくとも俺はそんな趣味は無い」

ムツリー二、君も少しは疑われているって自覚があるんだね……………。

「どっじゃろうか。これはお主らにも少なからず関わりがある話じゃと思っのじゃが」

「ねえ雄二。犯人を探すのを手伝ってよ」

雄二だって覗かれるのはいい気がしないだろうし。

「それは構わないが……何せ容疑者が多すぎるからな」

「え？ どうしてさ？ 男の裸を見たがる人なんてそうそういないと思うんだけど」

「……本気でそう思っているのか？」

「……………幸せ者」

へ？ 何？ すぐ近くに同性愛者でもいるの？

「坂本君。君が思う容疑者とは、一体どれくらいいるんだい？」

久保君がずっと前に出てきて雄二と応対した。なんだか様になっている。

「あ、ああ……。俺が思うに、容疑者はこの学園にいるやつ全員だ」

「全員じゃと？」

「……………俺も？」

「ああ。全員だ。なんなら教師を含めても構わん」

な、何！？ なんでこの学園の人たちはそんなに男子の裸が見たいのさ！？

「理由は簡単だ。去年も覗き騒動が起きたが、真犯人は女子生徒の清水だった。もはやこの学園に性別の壁は無いに等しいと言っていだろう」

「なるほどのう」

恐ろしいことに、自身も性別の壁の崩壊に加担していることに秀吉は気づいていない。

「それに、脅迫ネタを掴もうとしている男子の可能性もある。それかただ単に騒動を起こして暴れたいだけのバカかだな」

前者なら僕も共感できる。どちらかといえはその可能性が一番高いだろう。

「そして一番最悪なパターンなんだが、」

そこで雄二は一段と声を潜めて辺りを確認した。誰かに聞かれると不味いことでもあるんだろうか。

「他校の息がかかった教師の仕業、ということだ。これが真実だったら覗き騒ぎどころじゃねえ、学園の一大事だ」

「確かに、その可能性は常に持っていた方が良いね。清涼祭で何も被害がなかった分、こちらを狙われる可能性は十分にあるよ」

二人とも頭いいなあ……。久保君つて以外と雄二みたいな指揮官タイプなのかも。

「ま、ここに一番疑わしい奴が三人いるんだがな」

「え！？ 雄二、それ誰なのさ！？」

まさかこの中に犯人が云々っていうミステリー！？ にしちゃあ解決が早すぎやしない！？

「お前だよ、明久」

なぜだろう。目から鼻水が流れてくる。

「雄二、さつきも説明したじゃろう？ 明久は脱衣所には寄っておらんと」

「カメラが見つかった時間的にも、吉井君が一番犯人から遠い人物だよ。僕が保証する」

「わかつてる。半分冗談だ」

「どこをどうしたら今の半分が嘘になるのさ！」

いくら僕がトラブルメーカーだからって、男子の覗きをするほど根性は曲がってない。全く雄二は信用が無いなあ……。

「あと容疑者はムッツリーニだな」

「……………っ！（ブンブン）」

残像が見えるくらいのスピードで首を横に振っている。さすがは現代に生まれた忍者、出来るっ……………！

「この学園で一番カメラの扱いに長けているのは事実だろ？」

「……………おだてても無駄だ」

「いや、今のは誉めとらんぞ」

まさかあの会話の流れで誉められていると思ったんだろうか？

だとしたら、Cクラスの代表というにはまだ色んなものが欠けているんじゃないだろうか。

「で、最後の一人は誰なのさ？」

残る主要メンバーといったら秀吉か久保君くらいしかいないけど、秀吉はそんな陰険なことはしないだろうし、久保君は真面目な人だから覗きなんて真似はしないだろう。

「……い、いや！ 俺の数え間違えた！ すまないな明久っ！」
「……誰にでも間違いはある……っ！（コクコク）」
「そう？ それならいいんだけど」

そうか、とうとう雄二は数を数えられなくなったか。

「雄二、衰えて怖いんだね」

「いや、俺はお前の方が怖いんだが……」

「まったくじゃ……」

「……同じく」

その後簡単に合宿の流れを確認し、適当に夕食を食べてそれぞれの部屋に戻るようになった。

問四十九（勃発）

部屋に戻って久保君たちと軽く勉強をしていると、時刻は21時になろうとしていた。

「あれ？ そう言えば秀吉はどこに行ったの？」

一時間くらい前に外へ出ていってから姿を見ていない。勉強に集中してたから気づかなかつたけど。

「ふう……いい湯じゃった」

「えっ？」

突然の声に驚いて振り向くと、そこには体操服姿で体から湯気を出している秀吉の姿があつた。

「あれ？ 秀吉？ 確か今はABCクラスがお風呂に入る時間じゃなかつた？」

「吉井君、しおりを読んでいないのかい？」

「しおり？」

久保君に言われたように、念のため鞆の中からしおりを取り出して確認する。えっと確か三ページ目に、

「合宿所での入浴について」

- ・男子ABCクラス：20時～21時 大浴場（男）
- ・男子DEFクラス：21時～22時 大浴場（男）
- ・女子ABCクラス：20時～21時 大浴場（女）
- ・女子DEFクラス：21時～22時 大浴場（女）
- ・Fクラス木下秀吉：20時～21時 個室風呂4

「ああ。なるほど」

「……納得できんが仕方ないのう」

だって性別が違うから一緒に入ったら捕まっちゃうからしょうがないよ。女の子に恋をしている秀吉が女湯に入っても問題あるだろうし。

「さて、お主らもそろそろ風呂の時間じゃろ？ 覗き魔に会わぬよう気を付けるのじゃぞ」

「ありがとう、秀吉」

僕は勉強を中断して荷物から入浴用の道具を取り出し、適当に大浴場へと歩いていった。

「イエーイっ。風呂だ風呂だーっ！」

「どけ須川、俺が一番乗りだっ！」

「ぬかせ福村！ 俺が一番だ！」

「んだと！？」

「やるか！？」

男子はいつでも元気です。

「あれ、ところで久保君」

「何かな、吉井君」

「どうして香水なんか持つてるのさ？ お風呂には必要くない？」
久保君の手には見慣れない小型のボトルが握られていた。色がピンクだから女物じゃないかな？

「ああ、これかい？ 僕は入浴の前にこれを嗅ぐのが日課なんだ。この香りには動揺を落ち着かせる効果があるらしいからね」
「へえ、面白いね」

「けど、お風呂に入って動揺することなんて何かあったかな？
男同士だから恥ずかしがることもないと思うんだけど。」

(吉井君とお風呂……吉井君とお風呂)

ん？ 今何か全身にゾワツとしたものが……。

「ん？ またお前らか。風呂ならもう空いたぞ」
「……………いい湯だった」

一階まで降りると、ちょうど風呂から出て部屋へ戻る途中の雄二たちに出会った。どうやら騒動は起きなかったらしい。

「ムツツリーニ、カメラはもう仕掛けられて無いんだよね？」
「……………(こくり)」

よかった……これで安心して入れるよ。

「……………あのカメラしか無いらしい。犯人は機械に強くはない人間」

「だ、そうだ。ビクビクしねえでどっしり構えてるよ」

「ふんっ、言われなくても」

雄二の横を通りすぎて浴場へと向かう。覗かれる心配が無くなつたせいなのか、足取りは軽かった。

『なあムツツリーニ。明久と久保は同じ風呂に入るんだよな……？』
『……………教育に悪い』

「吉井君、早く行こうか」

「う、うん」

だけど背中 of 悪寒は止まらなかった。

「あれ、先生たち。こんなところでなにをしてるんですか？」

男子の大浴場へと続く廊下には、布施先生と見慣れた筋骨教師が門番の如く仁王立ちしていた。ここまで仁王立ちの似合う生物つても珍しい気がしないでもない。

「貴様らか。いや、安心して風呂に入ってくれ。覗き魔が現れんよ
う見張つとるだけだ」

「あ、なるほど。お疲れさまです」

鉄人なら大抵の人間は足止め出来る。万が一覗き魔が出てきても一捻りだろう。

そんなことを考えていると、いつの間にか脱衣所へ着いていた。既にほとんどの人間が入浴中らしく、須川君たちは素っ裸で風呂へ飛び込んで行った。

「イエーイ！ デカイ風呂だ！」

「おい横溝、体を流してから入れよ！」

意外と須川君はマナーに細かい。行動とか常識には欠けるんだけど。

「吉井君。早く入ろう」

なぜだか久保君の催促がエグく感じる。

「う、うん。………あ、あれっ？」

「？ どうかしたかい？」

「ごめん久保君。着替え忘れてきちゃったみたいだから、先に入ってきてくれる？」

「そうか、それなら仕方ないね」

渋渋といった感じで大浴場へと向かう久保君。……人生最大のピンチを脱した気がするのはいのせいだろうか。

『むっ、な、なんだ貴様らはっ！？ ここは男湯だぞ！！』

「あれ？ 今の声って鉄人？ 何かあったのかな？」

『やめなさいっ、試獣召喚！』

『布施先生退いてください！ 久保君とあのバカが裸同士なんて許せない！ Eクラス代表中林宏美、ここは通させて貰いますっ！』

『先生お願いですっ。アキちゃんは……アキちゃんは坂本君の前じやなきや裸になっちゃいけないんです！ それで私はアキちゃんの前じやなきや裸になっちゃいけないんです！ それで私はアキちゃんの前じやなきや裸になっちゃいけないんです！ それで私はアキちゃんの前じやなきや裸になっちゃいけないんです！』

裸を写真に納めなきゃいけないんです！」

「ウチはちゃんと男に興味があるって証明しなきゃいけないんです！ アキに勘違いされたままじゃやりきれません！」

「『『試獣召喚！』』』」

訂正。もう何か起きてる。

問五十（混浴）

鉄人のいた場所へ戻ってくると、そこには三人の女子が召喚獣で先生たちと応戦していた。

「くっ、中林！ 金属バットを使うのは卑怯だぞ！？」
「仕方ないんです！ 私の目的を果たすにはこれくらいは必要なんです！」

武器を持って戦う中林さんの相手をしていた。召喚獣を使わないのは多分点数がないからだろう。一応確認するけど、金属バットで教師を殴るのは卑怯というレベルじゃないよね。

「ちょっと美波たち！？ こんなところでなにやってるのさ！？」
「ア、アキ？ ちょうどよかったわ、今すぐ裸を見せなさいっ！」
「落ちていて美波！ 今ものすごく日本語が間違っていたから！」
「アキちゃん！ 待ってて、貴女は男湯なんかに入っちゃ駄目なの！」

「玉野さん！ 僕はれっきとした男だからね！？ あとなんて書いて『アナタ』って読んだの！？」

「吉井！ 取り敢えずここで死になさいっ！」
「中林さん！ もうその発言は人として間違ってるからね！？」

なんで僕はっかりこんなにトラブルに巻き込まれるんだろう……。

「おい吉井！ ボーツと見てとらんで加勢せんかつ！ このままだと貴様もろくな目に会わんぞ！？」

「は、はい、試獣召喚っ！」

呼び声に合わせて召喚獣が現れる。この宿泊施設に設置されている試験召喚システムのお陰だ。

「吉井！ 貴様はバットを抑えろ！ 俺はその瞬間に中林を捕える！」

「ちようどいいわ。吉井！ アンタを直接いたぶれるなんて！」

目標を鉄人から僕に変えた中林さんが武器を構え直す。……っというか金属バットと互角に渡り合える鉄人って何者なんだろう。

「はっ！」

「う、うわっ!？」

召喚獣に向かって疾風の如く繰り出される打撃を上手くかわす。僕の召喚獣はフィードバックがあるから、召喚獣が攻撃を受けたら僕にもダメージがくる。だから避けなきゃいけないんだけど、

「本体がガラ空きよ！」

「ええええ!？ ねえもうそれ暴力って次元じゃなくない!？」

召喚獣と僕の距離が離れたら僕本体が狙われる。だからといって僕が後方に下がれば、そのぶん操作はしくくなりフィードバックによるダメージを受けやすくなる。そうなると、召喚獣は必然的に僕の近くで戦わせなくてはならない。

「あ、危なっ！」

「ちいつ、ちよこまかと！」

一番厄介なことに、中林さんは手加減を知らない。今みたいに避

けられたからいいけど、生身の人間を相手にしてもなんの躊躇いもなく武器を振り下ろした。

「吉井！ 大丈夫か！？」

「これが大丈夫に見えるなら僕は眼科に行くことをおすすめしますよ！？」

「あ、あれっ？ 抜けないっ！？」

声のしたほうを見ると、バットが床を突き破って青ざめている中林さんの姿があった。

「今だ、吉井！ 取り押さえるぞ！」

「は、離してよーっ！」

いや、金属バットを振り回す女子高生に離してと言われて離すよ
うなバカはいないよ？

「あなたたちもこれまでですね。大人しく連行されなさい」

「い、いやあーっ！！」

「先生っ、せめてアキちゃんの裸をカメラに収めさせて！」

あつちでは布施先生との勝負に負けて泣きわめく美波と玉野さんの姿が見えた。騒ぎを聞き付けた他の先生たちに連れていかれて行く。

「吉井。あとで風呂に入れるよう手配してやるから連行を手伝って
くれないか？」

「うーん。それならいいですよ」

「いつ、いやあーっ！……」

正直なところ、鉄人の申し出は有りがたかった。三人のうち例の覗き魔の正体を知っている人がいるかもしれないからね。

「ああいい湯だったな　　　　　っておい!?　　この床穴空いてんじやねえか!」

「しかも金属バットが転がってるぞ!　　ちよつと布施先生!　　なにがあつたんですか!??」

「いえ、実はさつき中林さんたちが　　　　　」

……この騒ぎが大きくならなきゃいいんだけど。

美波たちへの尋問が終わった後、部屋に戻って秀吉たちに報告をした。

「で、結局島田たちはカメラに関しては何も知らんというわけじゃな?」

「うん。あのカメラに触発されたのは事実らしいんだけど、設置については無関係らしいんだ」

個人的には玉野さんが一番怪しいと思っていたけど外れだった。

「そういえば、久保君の姿が見えないね。トイレ?」

「いや、明久を待っていたら風呂に浸かりすぎてのぼせてしまったらしくての。今は救護の先生の部屋で療養中じゃ」

そうか、僕が来るのを待っていてくれたんだ。流石にそこまで気を使わなくてもいいのに。

「それじゃ、雄二たちにこのことを伝えといて。僕はこれから風呂に入ってくるから」

「うむ。しかと引き受けたのじゃ」

「やれやれ、これでゆっくりお風呂に入れるよ。一人で入るのは寂しいけどね。」

「この施設は23時には風呂がしまってしまうからな。貴様は俺たち教師と一緒に入浴だ」

「詐欺だーっ!!」

くそっ、まんまと鉄人にハメられた！ のオッサンたちと混浴なんて息苦しくてしょうがないっ！

「ほれ、背中を流してやるから座れ」

「は、離して下さい　　って痛あっ!?　　な、なにをしたんですかっ!」

「これで背中をこすっただけだが？」

「『これ』ってタワシじゃないですか！　いつの時代のお風呂だこは!」

「何を言うか。俺はいつもこのタワシで洗つとるんだぞ」

「生物兵器のアンタと僕を同じ基準で考えないで下さいよ!」

「……………」
「あっ！　痛っ！　先せつ……!　入浴中に張り手は……っ!」

背中がヒリヒリしたせいで、その夜はあまり眠れなかった。

問五十一（珍事）（前書き）

プレビュー1000000突破！

御愛読ありがとうございます。

問五十一（珍事）

「……雄二。一緒に勉強出来なくて寂しかった」

「待て翔子、だからと言って無理矢理俺を連れてくるな。俺はBクラスだから隣の部屋で勉強しなきゃいけないんだ」

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスとの合同自習だった。

雄二曰く「メンタル面の強化を目的としたモチベーションの向上らしいからこういう形になっているらしい。」

「鉄人、翔子をどうにかしてくれ。このままじゃ勉強どころじゃなくなる」

「仕方ないな。霧島。諦めて坂本を解放しろ」

「……雄二、酷い」

とは言っても、ここは僕も雄二に同情せざるを得ない。いくら霧島さんが雄二を好きだからと言ってもルールは守らなきゃ秩序が保てないからね。

「やれやれ、これで落ち着いて勉強できる。明久、秀吉。邪魔してすまん」

「ああ、気にしないで」

「いつものことじゃ」

雄二はゆっくりと部屋から出ていった。でもこのままじゃ霧島さんが可哀想だ。雄二が振り分け試験でもう少し点数をとっていたら、

今頃は机を並べて勉強しているだろうから。

「霧島さん、ちょっと」

「……………」

「明日の朝、ムツツリー二に頼んで雄二の寝顔写真をあげるから、ここは我慢してあげてくれないかな？」

これで誰も傷付かずに済むだろう。我ながら名案を思い付いてしまった。

「……………その程度なら沢山持ってる」

世の中に問う。常識とはなんぞや？

「じ、じゃあお風呂上がりのブロマイドは？」

「……………まだ五、六枚しかない」

普通は一枚たりとも持っていないと思う。

「そ、それで手を引いてくれないかな？」

「……………ありがとう、吉井はいい人」

小さくコクン、と頷くと僕の斜め向かいの机に戻っていった。

「雄二の私生活はどうなっておるのじゃ……………」

それを知ってまともな人格を保っていられるかどうか不安になる。

「あ、代表ここにいたんだ。それなら僕もここにしようかな？」

「明久君。私もお邪魔させて貰いますね」

そこに聞きなれた声が聞こえてきた。いそいそと僕らの正面の席に勉強道具を広げている彼女たちは、

「姫路さんに工藤さん、久しぶり」

「うん、確か清涼祭以来だよな？ 久しぶり」

「木下君もお久しぶりです」

「うむ。一緒に勉強できて嬉しいのう」

爽やかに歯を見せて笑う工藤さんと、一段と大人っぽくなった姫路さん。

「ところで明久君。昨日は覗き騒動で大変だったみたいですね？」

「あ、知ってたの？」

「ええ。バットを持った中林さん相手に大立ち回りだったって聞きましたよ」

そうか、もう色んな人の耳に入ってるのか。

「お陰で僕は色々酷い目にあっただよ」

「あははっ。流石吉井君だね。端から見てて面白いよ」

それはあくまでも端からだからだろう。本人は必死なのだから。

「それで、美波ちゃんたちは何してるんですか？」

「うむ、それなんじゃが……」

『今日も覗きに行つてやるわ！ 待ってなさいアキ！』

『久保君の貞操は私が守るのよ！』

『アキちゃんっ、待っててね！ 今夜はピンクのワンピースを着せ

「てあげるからっ！」

「昨日消費した点数を取り返すためにテストを受けておるのじゃ」「あははっ、大変だね」

「工藤さん、それ絶対大変だと思っただけでしょ。」

（私も明久君の裸を覗けるなら覗きたいですけど……）

「……瑞希、何か言った？」

「い、いえっ。なんでもありません」

なぜかよく分からないけど、さっきから姫路さんの僕に対する視線が怪しい。

「あれ？」

「む？ どうしたのじゃ工藤よ」

何か足りないものを探すように辺りをキョロキョロと見回す工藤さん。

「そういうえばムツリーニ君は？」

「……へっ？」「……」

「『へっ？』って……いつもFクラスにはムツリーニ君が……あっ……」

自分で気づいたのか、工藤さんは発言の途中で押し黙った。

「何を言っておるのじゃ工藤よ。ムツリーニはCクラスじゃぞ？ お主が勉強を教えたのではないか」

「そ、そうだよ。ゴメンゴメン。あ、あははっ」

笑い飛ばそうとしてるけど、みるみる顔が赤くなっていく。間違えたのが相当恥ずかしいらしい。

「……愛子。ちよつといい？」

「私も愛子ちゃんに聞きたいことがあります」

「代表に瑞希ちゃん？ な、何さ？」

詰め寄る霧島さんと姫路さんに対して、笑って受け流そうとする工藤さん。なるほど、確かに端から見ると楽しいね。

「……私は雄二と一緒に勉強出来なくて寂しい」

「へ、へえ。そうなんだ」

「……じゃあ……」

霧島さんが言いよどむように一呼吸おく。

「……愛子は寂しくない？」

「ふえっ!？」

「そうですねよ愛子ちゃん。私も気になりますっ」

「あ、僕も」

「ワシもじゃ」

ビバ、悪ノリ。

「な、何を言ってるのさ四人ともっ。ボクがムツツリー二君と離れて寂しいなんて、そんなことあるわけないじゃないっ」

工藤さんは見るからに狼狽えている。でも、

「工藤よ、ワシらは『ムツツリー』と離れて』とは一言も言っておらんぞ?」

「あっ……」

工藤さんの顔がさつきとは比べ物にならないくらい赤くなった。そうか、工藤さんはムツツリーと離れて寂しいのか。

「ち、違っつてば! さつきの会話の流れだったらムツツリー二君のことだっと思っじゃない!」

「いつもの愛子ちゃんらしくないですね」

「そうだね。いつもなら笑って受け流すもんね」

「だからムツツリー二君なんか全然関係ないんだっつてばーっ!」

結局、世にも珍しい工藤さんイジメは鉄人が怒鳴り込んでくるまで続いた。

問五十二（動機）

そんなこんなで地獄のような勉強時間や天国のような夕食タイムも終わって、いよいよ入浴の時間。僕は秀吉たちとは別に、鉄人のいる教師の部屋へ来ていた。ちなみになぜか雄二も一緒だ。

「で、何の用ですか？　今回は特に問題を起こしてないと思うんですけど」

「なにもしとらんが事は起きてるだろう。吉井、今からお前を警備隊の隊長に任命する」

「警備隊の隊長？」

普通はそういう業務って教師がやるものじゃないのかな？

「ああ。お前は操作技術だけなら高橋先生にも劣らん。教師同士の干渉を起こさずに、召喚獣で自由に警備できるのは貴様だけだからな」

「そりゃあ、そうかも知れないですけど……」

「それと、坂本には警備隊の指揮をしてもらいたい。有志の募集もお前がしてくれ」

「それは構わないんですけど……俺は関係ないか？　覗きの主犯の三人は、主に21時から入浴する明久たちをターゲットにしているんだろ？」

基本的に雄二は、自分に関係無かったり利益が無いと判断したときはあまり乗り気じゃない。そこは鉄人も良く分かっていると思うん

だけど。

「断つたら霧島と個室で勉強させてやる」

「陰険な嫌がらせだ！」

流石鉄人。良く分かつてる。

「ちっ、仕方ねえ。俺も女子に覗かれて喜ぶ趣味は持ち合わせてねえからな。協力してやるよ」

「うむ、頼んだぞ。分かつてると思うが、警備隊の募集は女子に気付かれんようにな」

「当たり前だ」

その後、教師陣の配置などを簡単に説明されて解放された。部屋を出て時計を確認すると、既に19時を過ぎていた。

「やれやれ、雄二も災難だね」

「お前に巻き込まれたんだバカ」

大きくため息をつく雄二。本当にため息をしたいのは僕の方だつてのに。

「しかしまあ、警備隊の指揮を任されたのは光栄だな。この学年の男子の指揮権が俺にあるってこつた。久々に腕が鳴るぜ」
「なるほど。そういうことだったんだね」

雄二の指揮の下なら女子ごときは相手にならないだろう。……ん？
またなにか忘れてるような？

「よし、早速手伝ってくれそうなやつを探すとするか。確か、相手

は中林と島田と玉野だったな？」

「うん、特に中林さんは危ないよ。金属バットを持ってたから」

「それなら今日は武器を使ってこないだろうな。バットは鉄人が取り上げただろうし」

それについてはさつき鉄人の部屋の隅に置かれてるのを確認しておいた。雄二の言う通り、凶器の心配は無いだろう。

「さて、着いたぞ」

「あれ？　ここ、僕の部屋じゃないか」

いつの間にか自分の部屋へと来てしまった。ただ目的もなくふらふらとしていた訳じゃないらしい。

「明久、お帰りなのじゃ。……む？　雄二ではないか。どうしたのじゃ？」

「おお、秀吉。いや、ちょっとこの部屋の皆に頼みたいことがあるてな」

「うん？　俺たちのことか？」

雄二の声を聞いて須川君たちもこっちに注目する。部屋の隅で勉強していた久保君も一応意識だけは向けてくれてるみたいだ。

「ああ、実は皆に提案がある」

「提案？　いつたいなんだい？」

『今度はなんだよ。正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く風呂に入ってダラダラしてえな』

久保君を除く全員がダルそうにしている。今日一日勉強漬けで疲れているのだから無理もない。逆に久保君は凄いと思う。

「皆知つての通り、女子による覗き騒ぎがあつた。そこで、それを防ぐために警備をするメンバーを募集したい」

『はあ？ なんだそれ』

『逆に覗いてくれるなら興奮するけどな』

しまつた。中にはそういう性癖のやつもいたのか。これはメンバー募集は厳しいかもしれない。

「騒ぎに紛れて、女子と接触するかもしれんがやってくれないか？」

『『『詳しく聞かせろ』』』

僕はこのクラスを愛しています。

「業務は簡単だ。覗きに来るバカ女三匹を排除する。当然教師も味方だから、戦死しても怖がることはない。報酬はとくに無いが、各人の尊厳を保つために頑張ってくれ。どうだ？」

『『『乗った！』』』

「任せてくれ坂本。ここにいないFFF団員には会長である俺から説明しておく」

よし、これで仲間が増えた。

「待ちなよ君たち。動機がおかしくないか？」

「ん？ どうした久保。なにか不満でもあるのか？」

久保君が反論するなんて珍しい。なにか許せないことでもあつたんだろうか。

「不満なら大有りさ。物事の根本的な解決になっていないよ。向こうの女子の目的はなんだい？　まずはそれを知ることからだ。そうじゃないと協力なんて出来ないだろう」

なんていうかこう……凄い。彼の言葉には強い説得力があった。それはまるで政治家の演説のように。

「雄二、久保の言うことも最もじゃ」「確かにそうだな……」

凄い！　あの雄二を言葉で言い負かすなんて！　流石は学年三位と言っべきだろう。

「教えてくれ、坂本君。女子の目的は何なんだい？」

雄二は根負けしたのか、やれやれと首を振って言った。凄いよ久保君！

「明久の裸体だ」

「吉井君。全力で女子を叩きのめそう」

……………え？

問五十三（返討）

須川君が素早く連絡してくれたお陰で、八時より前に警備隊が大浴場の前に集合することができた。立ち会いの教師は鉄人と現国の寺井先生。それにFクラスの男子生徒全員と秀吉。指揮は雄二だ。

「ま、三人相手ならこれで十分だろ」

なるほど、頼もしいな。こいつの指揮なら安心だろうし。

「吉井君。ここは僕らを信用してくれ。蟻一匹通さないよ」

「う、うん。ありがとう久保君」

普通は頼もしかつたら安心出来るんだけど……なんだか別の意味で不安だ。

「して、雄二よ。ムツリーニは呼ばんで良かったのか？」

「ああ、立場上アイツはクラス代表だからな。ムツリーニを誘うということは、Cクラスの男子も巻き込むってことだ。鉄人から直々に命じられた俺は別として、クラスの長がこういう騒ぎに参加するのは好ましくないだろ？」

「なるほど……寂しいが仕方ないのう」

秀吉が少ししょんぼりと肩を落とした。可哀想だけど、雄二の言う通りだ。

「ところで雄二。作戦はどうなってるの？」

「ひとまず、現国のフィールドで明久を含めたFFF団のメンバー全員で島田と玉野を囲んで捕える。おれと秀吉が援護に回る」

「え？ それだと中林さんの相手は久保君？ 危くない？」

僕や先生たちの召喚獣と違い、久保君の召喚獣は物に触れられない。中林さんが直接攻撃を仕掛けてきたら、久保君が危険な目を見る。

「大丈夫だ。問題ない」

雄二が自信たっぷりに頷く。本当に大丈夫だろうか。

「お、お前らが警備隊か。これなら安心して風呂に入れそうだ」

心配に耽っていると、誰かから声をかけられた。あれ？ 彼はたしか、

「おや、根本じゃないか。何のようだ？」

「何のよう、って風呂に入りに来たに決まってるだろ？ 俺は20時から入浴だからな」

「……………俺もこれから入る」

「あ、ムツリーニ」

ムツリーニは根本君の後ろにひょこっとなついていた。小柄だから根本君に隠れて見えなかったよ。

「それじゃあお前ら、頑張ってくれよ」

「言われなくてもそのつもりだ」

雄二もいちいち突っかからなくていいのに。まったく子供だなあ。

「……………明久」

「ん？ 何？」

「……………覗くなよ（スタスタ）」

「待つんだムツツリーニ！ 今ものすごく否定しなきゃいけない誤解があつたから！」

僕の反論を聞く前にムツツリーニは廊下の奥へと消えていった。くそっ、まだ去年の体育祭のことを誤解されてるのか！

「明久、そこは入浴する生徒の通り道じゃから退いたほうがよいぞ」

秀吉に言われるままに退くと、次から次へとABCクラスの男子生徒たちが大浴場へと向かっていく。

だいたい二分もすると七十人全員が大体入つてしまった。

「雄二、こんなものかな？」

「ああ。あとは島田たちが来るのを待つだけだ。」

雄二が無作法に廊下に座る。雄二なりの余裕の表れなんだろう。

「それにしても、雄二も成長したんじやのう」

「ん？ どういうことだ秀吉」

「一緒のクラスじゃったときよりも指揮官らしくなったと思つての。去年とは別人のようじゃ」

「ん、そうか？ まあそういつてくれるなら嬉しいんだが」

「うむ、ワシの目に狂いはないぞ」

秀吉がキラキラの笑顔で返事をした。

「なにせ、去年は異性が相手になると作戦が通じなかったじゃろう？ 立派に対応策を考えておるではないか」

「……………あ。」

「ねえ雄二」

「何だ、明久」

「この作戦、雄二が作ったんだよね？」

「ああ。その通りだ」

「実は気づいちゃったんだけど」

「奇遇だな、俺もだ」

「本当？ 参ったなあ」

「ああ、本当に参ったよ」

「「あははっ」「」

「そうだ、この作戦は雄二が作ったんだ。それなら、

「「総員警戒体制っ！」「」

「女子には効かないはずだ。」

「な、何事じゃ！？」

「さっきの作戦は忘れる！ それぞれで徒党を組んで戦え！」

「じゃからなせ」

「敵襲だーっ！」

「遠くから見張りの生徒の声が聞こえた。もう迷ってる暇はない。」

「ちっ、このタイミングで……………」

「後悔してる暇はないよ雄二！ 早く対応策を！」

襲ってくる音から察するに、女子の数は三人では済まない。少なくとも一クラス分の戦力を確保していると見ていいだろう。

「須川！ 一時的に指揮権をお前に託す！ とりあえずFFF団で女子の数を減らせるだけ減らせ！」

「分かった！ 行くぞお前ら！」

『『『おうつつ！！』『』』

数で言えば互角。ここは須川君の作戦力に掛かっていると見えるだろう。

「須川君！ 早く召喚獣で先制を！」

「甘いな、吉井」

へっ？ な、何が？

「FFF団よく聞け！ 今から警護という名の下に触り放題だ！」

『『『ふおおおおおつっ！！』『』』

……そっか……これがFクラスの実体だったんだった。

変態が編隊を組んで女子へのボディタッチを試みる。それは普通の学園なら問題になるんだろうけど、この学園なら心配ない。なぜなら、

「どきなさいこの変態ども！！ ウチはアキの裸を見なきゃなんないのよ！」

『ギヤアアアツ！ 首が、首があああつ！？』

「お姉様に触れていいのは美春と葉月お嬢様だけですつ。ブタ野郎

どもはそこらの男同士でふれあってなさいっ！」

『グハアツツ！？ 腕の関節が増えたっ！？？』

タッチがデストロイになってリターンしてくるから。

問五十四（信念）

FFF団は女子による直接攻撃でT・K・Oとなっていた。暴徒と化した美波と清水さんを相手に肉弾戦を挑んだのは失敗だったね。

「ひ、怯むな！ 召喚獣で応戦しろ！」

『『『 試獣召喚！』』』

須川君の指示で生きているメンバーは体勢を切り替える。

「こちらも立ち向かうのですっ」

『『『 試獣召喚！』』』

『 Fクラス FFF団

現代国語 平均68点

vs

Dクラス 女子

現代国語 平均116点

「くそつ。島田たち、清水とDクラスを味方につけやがったか！」

「よりによって一番厄介な相手じゃのう……」

秀吉の言う通り、清水さんを含めてDクラスはいろんな意味でやりにくい。戦闘慣れしたメンバーが多いし、何より女子同士の結束が固い。正面から突っ込んでくる中林さんのほうが対処しやすいだけかもしれません。

「見つけたわよアキ！ その場で服を脱ぎなさいっ！」

「脱げと言われて脱ぐバカがいるもんか！」

「脱がないなら無理矢理にでも脱がすわ」

「変態だっ！！」

マズい。美波の中の常識がどんどん崩れていってる。これじゃ去年より事態が悪化してるよ！

「それに清水さん！ 君は男の子の裸なんかには興味ないんじゃないの？」

「黙りなさいブタ野郎！ 美春は今そんなことはどうでもいいのですっ」

「どうでもいいなら止めてくれないかな！？」

この時点で会話が成立しているか不安になる。

「美春は今怒り狂っているのです！ あの心理テストの結果を知ってから続くモヤモヤが晴れるまで美春は暴走を止めるつもりはありませんっ！」

「それ要するに憂さ晴らしじゃないっ！？」

「黙りなさいっ！ 気の済むまで暴れまくってやりますっ！」

もうダメだ。こうなったら清水さんは本当に止まらない。

「実力行使だ、明久あっ！」

「応っ！ 試獣召喚！」

呼び出した召喚獣を向かってくる女子の正面にたたせる。この通路は一本道、小細工は無用だっ！

「美春！ 行くわよ!？」

「はいっ!」

「試獣召喚っ!」

さすがに生身で僕の召喚獣と戦うのは恐れたのか、二人とも召喚獣を呼び出して応戦するらしい。

『Fクラス 吉井明久

現代国語 76点

VS

Fクラス 島田美波

& Fクラス 清水美春

現代国語 31点&83点

「よりによってウチの鬼門じゃない! アキっ、謀ったわね!？」
「僕だつて覗かれたくないもんねっ!」

こうやって美波が会話に気をとられている隙に間合いを詰める。

「ごめんね美波っ!」

「きっ、きゃああっ!？」

『Fクラス 島田美波

現代国語 0点

「お姉様っ!？」

「清水、お前の相手は俺たちだっ! 試獣召喚っ!」

『Bクラス 坂本雄二
& Fクラス 木下秀吉

現代国語 193点&105点』

「明久！ 清水はワシらに任せて、お主は須川たちの援護に行くのじゃ！」

「了解っ」

「吉井！ こっちだ！」

須川君の声のした方に目を向けると、あつちはだいぶ苦しそうな状況だった。

「待つてて、今行くよっ！」

召喚獣をに乱戦地帯のど真ん中へと突っ込ませる。僕自身も操作の為に人と人との間を掻い潜っていった。

「かかったわねアキっ！」

「へ？」

「道は開きましたっ。中林さんっ、頼みますっ」

中林さん？ どうしてそこで中林さんに頼るんだろう？

「しまった！ 明久、鉄人のところへ引き返せ！」

「させませんっ！ その為にこうして全員で男どもを押さえているんですからっ」

向こうから雄二の叫び声が聞こえた。でもこんな混戦じゃ引き返そうにも引き返せない。

「早くどうにかして戻るのじゃ明久！ 中林はドライバーを持って
おる！」

「えっ？ ドライバー？」

人の隙間からゴルフクラブを振り回す中林さんの姿が見えた。

「もう中林さんって何者なのさ！？」

鉄人も昨日の段階で荷物検査なりやっておけばよかったのに！

「明久、早くもどらんかつ！ 鉄人が崩されたら終わりじゃぞ！？」

「分かってる！ でもこの混戦じゃ無理だよ！」

「これが美春たちの作戦ですつ。あの西村先生さえやってしまえば
美春たちの勝ちです！」

くそつ、寺井先生は干渉を避けるために鉄人と離れてるし、もう
残る戦力だと、

「清水さん、一人忘れてやしないかい？」

そう言っつて中林さんの通る道に立ち塞がっているのは、

「く、久保君？ どうしてあなたがここに？」

突撃体勢だった中林さんは攻撃の手を止めて急停止した。さすが
に無抵抗の男子を殴るのは気が引けるんだろう。

「中林さん。僕の召喚獣はものに触れられないから召喚しても君に
は通用しない。だから僕は生身で君を止めるよ」

「く、久保よ。それは無茶じゃ！」

秀吉の言う通りだ。中林さんは手段を選ばないから最悪久保君にも手をあげる可能性がある。

「久保君。どうしてそこまでして私を止めるの？」

「僕にも譲れない信念というものがあってね」

「信念？ それはどんなものなの？」

「簡単さ」

久保君そこで遠い目をして何かを見ていた。淡い思い出を振り替えるかのように。

「吉井君の裸は、誰にも見せたくない」

次の瞬間、僕の目にはゴルフクラブを振り回しながら僕に突撃してくる中林さんの姿が映った。

問五十五（沈静）

「ふう……なんとか鎮圧出来たね。吉井君に万が一のことがなくて本当によかったよ」

「ざつと三十人といったところじゃのう。特に中林と島田、清水。それに玉野は主犯格じゃから、これからも用心しなければならんな」

鉄人の協力もあつて、暴走した中林さんたちをなんとか捕らえることには成功した。だけど、須川君たちFFF団は全員がなにかしら負傷して救護室送りに。無事なのは教師と雄二、僕と秀吉それに久保君だけだった。

「もとはと言えば雄二がちゃんとした対策を練っていればこんなことにはなつてなかつたじゃないか！ お陰で警備隊の大部分は点数補充しなきゃいけなくなつたし！」

「うるさい！ 思考回路がイカれてる清水たちをまともに相手に来るやつなんかいねえだろ！」

「なんだとこの妻帯者！ それでよく指揮官を名乗っていられるな！？」

「黙れバカ久！ お前こそ隊長のくせに騒動の原因じゃねえか！」

「……………」

「お互い泣くなら最初から罵倒などせねば良いのに……………」

な、泣いてないねっ。これは目から唾液が出てるんだもん！

「ご苦労だったな、吉井、坂本」

唾液を拭き取ってちらつと見ると、一仕事終えた鉄人が立っていた。

「おお西村教諭。お疲れさまなのじゃ」

「ああお疲れさま。ところで坂本。明日の戦力なんだが、Dクラスの男子全員と土屋を含めたCクラスの男子を警備隊に回すよう手配してきた」

「おおつ、それは助かるな。Bクラスの野郎共には俺が話をつけて連れてくるとして、ざっと百人近い戦力が揃えられるな」

多分Aクラスは根本君がいるから安心出来ないし、Eクラスは代表が中林さんだから頼りにできないだろう。これが現時点での最高戦力になる。

「平賀君とムツツリー二には秀吉と僕が説明しておくよ」

ムツツリー二には霧島さんから頼まれた写真の件もあるしね。

「そうか、それは助かるな。じゃあ今日はお開きにして風呂に入るとするか」

雄二が大きく伸びをして近くにあった時計に目をやった。今はだいたい22時、後半組が風呂から出る時間だ。

「ちよつと雄二、もしかしてちゃっかり入浴セットを持ってきてたりする？」

「もしかしなくても、だ。そこまで計算してこそ指揮官を名乗れるってもんだぞ」

「ああもう、着替えとか部屋に取りに行くのか……めんどくさい」
「ふははは！ 俺は先に大浴場を独占してやるぜっ！」

そう言っって一人先に大浴場へとダッシュする雄二。それを尻目に僕たちは部屋へと戻っていく。

「いやしかし、明久も芝居が上手くなったのう。見直したのじゃ」

「よしてよ秀吉。照れるじゃないか」

「芝居？ なんのことだい吉井君？」

「ああ、久保君は知らないんだっけ？ 実は」

『詐欺だー！ーっ！ー！』

風呂場からのゴリラの悲鳴は、施設全体を揺るがすようにこだました。

「お前コロス」

「あははっ、よしてよ雄二。顔が醜くなってるよ？」

「てめえのせいだっ！ お陰で俺は鉄人に背中を流される羽目になったじゃねえか！」

だからといってわざわざ部屋に怒鳴り込みになくてもいいと思うんだけど。

「じゃが、最初から雄二がちゃんとした対策で挑んでおればもっと早く片付いたのではないか？」

「ぐっ……痛いところ突かれたな」

諦めたように僕の胸ぐらから手を離す。コイツもちょっとは自覚があるってことかな。

「だが、明日はなんとかなるだろ。それに、これも回したしな」

「うん？ 坂本君、それは写真かい？」

「ああ、取って置きのだ。ムツツリーニが撮影してきた」

ムツツリーニが撮影？ いつの間に、というか何を撮ったのだから。

「明久、目をつむれ」

雄二に言われた通り目をつむる。

「目を開ける」

雄二に言われた通り目を開けた。

【秀吉の寝顔写真・浴衣バージョン】

「眼福じゃあぁっ！」

「一体何を ってまたワシの写真か！！ せめて許可をとるのじゃ！」

それは許可を取ったならばアチアチといいと言っことなのだろうか。秀吉も常識を無くしつつあるようだ。

「これを警備隊全員に見せるように回した。『守りきれたらこれ以上の写真を出す』と言ってやる気を出さしゃあ、女子なんか相手じゃねえ」

そう言って高笑いする雄二。やる気のスイッチが入ったってところか。

「……雄二。誰に背中を流して貰ったの？」

その前に命のスイッチが切れそう。

問五十六（寝起）

翌朝。

「うっん……」

「うん……？ なんだろ……んなっ！？」

目を開けるといきなり秀吉の寝顔が目の前にあった。

「ん……」

秀吉の口が小さく開いて吐息が洩れる。彼我の差はほんの数センチ。キスマであと一步の状態だ。

「どどどどうする！？ これはまたとないチャンスだ！ 今なら事故を装ってイける！ でも、こういうのは相手の同意がないとマズい気もするし……」

「やっちやえよ。て言うか既にファーストキスは美波としたし、姫路さんからもしてもらっただろ？」

「はっ！？ 貴様は僕の中の悪魔！ 久しぶりに出てきたと思ったらまた僕を悪の道に引きすりこもうとしゃがって！ ダメだ！ やっぱ僕にはそんな卑怯なまねはできない！」

「よく考えるよ。同じ布団で寝ているんだぞ？ これはもう何もしない方が失礼だとは思わないか？」

いや……でも……。

『悪魔の言葉に耳を貸しちゃダメだよ！ 秀吉は明久がホモ野郎だと信用して布団に入ってきているんだからね！』

僕の中の天使。君はもう出番を無くしてやる。

『さ、一気にいっちゃえよ。秀吉も待つてるぜ？』

い、いや！ 秀吉には好きな女の子がいるんだ！ それならその大切な唇はその子のためにとっておくべきだろう！

『いや、秀吉が好きなのは女の子なんかじゃないよ』

僕の中の天使。これ以上僕を惑わせるな。

怒りに任せて僕の中の天使を掴んでヘッドバッグを決めようとした。ヤツのおでこ僕のおでこが触れるまであと数センチ……

と、いうところで目が覚めた。

「夢オチ！？ せっかく天使に引導を渡せるハズだったのに！！」

『いや、その前に天使もお前の一部だろ。自分自身に攻撃を仕掛けてどうするんだ？』

あ。まだいたんだ僕の中の悪魔。

『まあ、そう気を落とすな。今のヘッドバッグのお陰でお前は九死に一生を得たんだからな』

ふえ？ 九死に一生つてなんのこと？

「うづん……」

なんて考えているその時、すぐ耳の傍から声が聞こえてきた。これは、まさか……？ 恐る恐る背中の方を見る。

「痛たた……」

「……え？」

そこにはおでこにたんこぶをつくった久保君がいた。

「久保君、朝からそんなところで何してるの？」

「よ、吉井君？ 起きてたのかい？」

「うづん、いまさつき起きたとこ。久保君はどうしたの？ たんこぶが出来てるけど」

「これかい？ 寝ていたら壁にぶつけてしまっただね。思わずそれで目が覚めたよ」

確か久保君は部屋の中央に寝ていたはずだ。それがどうやって壁におでこをぶつけられるんだろう。

「明久、助かったな。危うく寝込みを襲われるところだったんだぞ？」

久保君が、僕の寝込みを襲う？ 男同士だよ？

「そっだよ、久保君は男が大好きな狼なんだ！ 僕に感謝してもいいよっ。」

天使！ 貴様は所構わず嘘を言う癖をどうにかしろっ！

『いや、今回は天使言うことが正しいんだが……』

嘘だ！ 僕はそんな言葉には騙されないぞ！

というか久保君が付け加えられた今、その言葉を信じたくない。あと半年以上一緒のクラスで勉強するのに気まずいじゃないか。

「んむ？ なんじゃ明久、朝から一人でぶつぶつ言いおって」

目を擦りながら秀吉が上体を起こす。どうやら少し騒がしかったようだ。

「ごめんね秀吉。起こしちゃって」

「いや、大したことはないが……夢の続きが見れなかったのが残念じゃ」

「夢の続き？」

「うむ、明久や島田たちと遊ぶ夢じゃ。それはそれは楽しかったぞ。例えば最初はのう」

さっきまで見ていたであろう夢の話を楽しそうに語る秀吉。その語り口調を聞いているだけで心が和んでいく。

「で、明久が島田に関節技を決められての。雄二が高笑いしておったのじゃ」

「それは正夢になるんじゃない!？」

というか既に体験済みだ。

「ふわぁ……あ、もう朝か」

「おー、おはよう」
「うーん、よく寝たな」

いつの間にか須川君たちも起きてきた。まだ起床時間前だと言っているのに、身体だけは健康だ。

「須川君、おはよう」

「おお吉井、おはよう　　って、朝から木下に近づいてんじゃねえよ！！」

『『『KILL・YOSHII』』』

しまったっ、コイツら秀吉警護同盟（今名前付けた）を掲げているんだっ！　安易に秀吉と仲良く喋ったら処刑される！

「ま、待つのがじゃ！　明久とは他愛ない会話をしていただけじゃぞ？」

「ふむ、ならどんな話をしていたか教えてくれ」

ねえ、二分前までみんな熟睡中だったよね？　寝起きて日本語知ってる？

「本当に他愛ないぞ。ワシが明久や島田たちと遊びに行ったという話じゃ」

「なら吉井は何もしていないんだな？」

秀吉には好きな女の子がいるというんだから、それは当然だ。僕だってそこまでバカじゃない。

「いや、最終的に一緒の風呂に入ったのう」
「やれ」

『『『イエツサー』』』

待ってくれ、秀吉は『夢の話』というキーワードを忘れて
いるんだ。

ガチャッ

「おいお前ら！ 起床時間だ ぞ……？」

『死ね吉井！ 死んで詫びろ！ そして閻魔大王に舌を抜かれるんだ！』

『リアル針地獄を味あわせてあげるからあつ……！』

「助けて！ 全部夢なんだ！ お願いだから話を聞いて！」

「ええい落ち着くのじゃ皆の衆！ 西村先生、すまぬがこやつらを
取り押さえてくれ！」

「お願いです！ このままだと僕の吉井君が！」

「……お前らは毎年何をやっているんだ」

鉄人のお陰で、どうにか舌を抜かれずに済んだ。

問五十七（開祭）

「おはようムツツリーニ。今日はよろしくね」

「……………俺も覗かれたくはない。当然だ」

寝起きのバタバタも終えて朝食。僕はムツツリーニに声をかけた。

「それで、最初のカメラを設置した犯人は誰だと思う？ 鉄人が言うには昨日の取り調べで清水さんは関係ないって判断されたんだけど」

「……………わからない」

そうか、ムツツリーニでも犯人の目星がつかないのか。このままなら生徒全員を取り調べなきゃいけないのかもしれない。

「……………でも、犯人の目的は裸の撮影じゃない」

「え？ それってどういうこと？」

「……………この騒ぎを起こすのが目的」

ボソツと僕に耳打ちする。そこで会話は止まってしまった。ムツツリーニは朝食を食べ終えて席をたった。

「騒ぎを起こすのが目的？ そんなことして何になるんだろう？」

「カメラ設置の犯人、ですか？ さあ……私には想像もつきません」
「そっか……そうだよ。ありがとう姫路さん」

Aクラスとの合同自習の時間なんだけど、そんなの僕には関係ない。だって尊厳が架かってるんだもんね。

「そっだね。ボクは覗かれるなら全然構わないんだけど、覗いてみたいとは思わないかな？」

「工藤よ、須川や武藤が踊り出してしまうからそれ以上過激な発言は控えてくれ」

この非リア充の巣窟に工藤さんの存在は危険すぎると思うんだけど。鉄人たちも考慮しないのかな。

「そっか……。ねえ姫路さん」

「はい、何ですか明久君」

「姫路さんは僕の裸を見てみたいと思う？」

「は、はいい！？」

あれ？ 今何か変なこと言った？

「吉井君、君は少し婉曲表現を覚えた方がいい気がするよ」

「明久、今ここに警察がいたら職務質問されても不思議ではないぞ」

「……吉井は鈍感」

いや、美波があればほど僕の裸を見たがるってことは何かあるのかなと思っただけなんだけど。

っていつか久保君はいつの間に僕の横に来たんだろう。

「あつ、明久君！」

「何？ 姫路さん」

姫路さんの顔は真っ赤になっていた。昨日の工藤さんといい勝負だ。

「私は、明久君の裸ならいくらでも見たいですっ!!」

「あ、そうなんだ」

「「「え?」「」」

そうか、女性も異性の裸を見てみたいものなんだ。ちょっと意外かも。

「明久君……私が勇気を出して言ったのに、どうしてそんな反応しかしてくれないんですか?」

「……今のは吉井が酷い」

????? なんだか回りの目が冷たいような? やっぱり女の子の考えることってよくわからない。

「まあ、異性の裸を見たいと思うのは当たり前の反応かもしれんな」

「ひ、秀吉! 君まで男湯を覗くつもりかい!?!」

「待つのじゃ! お主はワシの性別を知らんのか!?!」

「一年の最初に胸を触って確認したじゃろ!?!」

— 昨年の記憶がじわじわと蘇ってくる。

う……今思うと恥ずかしくなってくるよ。

「木下君! あなたはどこまで明久君をたぶらかせは気が済むんですか!?!」

「じゃからワシは男じゃと言っておるっに!?!」

『野郎共！ 異端者並びに性犯罪者である吉井明久を滅するのだ！』

『『『ラジャー！』』』

「姫路さんに秀吉っ！ それ以上僕の生命活動を止めるような言動は控えるんだっ！！」

鉄人のお陰で事態はなんとか鎮静化。ホントにどうしたらここまで騒ぎが起こるんだらう。

「……吉井、話の続きはしなくていいの？」

「そうだね……これ以上騒ぎを起こしたくないから遠慮したいかな。もちろん、霧島さんが話したいなら構わないけど」

「……わかった、話す」

霧島さんはペンをおいて視線を僕たちに向けてくる。勉強の邪魔をして悪いなあ……。

「私は雄二の裸が見たい」

さいですか。

（明久、これはマズくないかの？）

秀吉が視線で伝えてくる。マズって何のことだらう。

(万が一、霧島が雄二の裸を覗くために覗き側に加わったら、ワシらでは到底太刀打ち出来んぞ?)

そ、そうか！ 霧島さんは学年首席だった。敵になるなら最悪の兵器になるだろう。

「…………でも安心して。私は吉井たちの味方」

お、おお。絶望は免れたみたいだ。良かった良かった。

「…………雄二の裸は、私しか見ちゃいけない」

「結局はそこなのじゃな」

なににせよ、最悪の事態が避けられたことを喜ぶべきだろう。これは雄二に知らせるまでもないかな。

「…………そういえば愛子」

「ん？ 何、代表」

「…………あれから土屋とはどう?」

「…………ッ！（ギクッ）」

おやおや、霧島さんはいたずら好きだねえ。

「明久君、顔がにやけていますよ? (どうしますか?)」

「そういう姫路さんこそ。何か楽しいことでもあったの?」 (Let's party!)」

「はい、それはもう楽しくてしょうがないことがすぐ近くに!」 (YES、OK!)」

注意、本音は()の中です。(笑)

「だ、だからムツツリー二君とは会ってないよ！ それに、ボクとムツツリー二君はそんな仲じゃないしねっ！」

「じゃあ、もし土屋君と会ったら普通の他愛ない会話を聞かせてくださいよ？」

「もちろんだよ。でもそうそう会う機会なんて」

ガラララッ

「……………西村先生。頼まれていたクラス男子の名簿を持ってきた」

L e t ' s f e s t i v a l ! !

問五十七（開祭）（後書き）

かねてから募集していた『久保良光』の設定公募ですが、今週の土曜日で締め切る予定です。何かありましたら、お早めに応募ください。

問五十八（恋話）

「ムツツリーニよ、なぜお主はそうちようどよいタイミングで現れるのじゃ？」

「秀吉、今はそんなこと言ってる場合じゃないよ」

「そうですね。せつかくのチャンスじゃないですか」「……楽しみ」「……………」

なににせよこれはいい機会だ。逃す手はないだろう。

「って、なんでムツツリーニ君がここに来るのさ！ ムツツリーニ君はCクラスでしょ！？」

「いや、警備隊の増員にあたってメンバーの確認をする必要があつてな。土屋には名簿の作成を頼んでたんだ」

ありがとう西村先生。あんた男だよつ。

「……………明久。俺に何か？」

「うん。ちよつと」

祭りをするから。

「……………早く済ませて欲しい」

そう言いつつ近くの席に座る。

「さ、工藤さん。早く済ませてあげて」

「頑張ってくださいね、愛子ちゃん」

「……愛子、あなたはやれば出来る子」
「もうっ、みんなからかわないでよっ！」

いや、だってこんなに楽しいこのをしないではいられないよ？

「……………工藤、俺に用って？」

「へ？ あ、ああうん。その……………」

何か言つべき言葉を探す工藤さん。さあ、本音をぶちまけちゃいなよっ。

「ムツツリー二君は、勉強頑張ってる？」

期待外れにも程がある。

(明久よ、これはあまり面白くないのう。何か仕掛けるかの?)

(うーん、ちょっと待ってみない？ ちょっかい入れるのはその後で)

(うむ、了解じゃ)

「……………(こくり)」

「あ、そ、それならよかった。あれからも勉強続けてくれたんだね」
「？」

「……………今の俺があるのは工藤のお陰。感謝してる」
「そっそんな、感謝なんてされなくても」

うん、やっぱりなにもしなくても大丈夫そう。

「……………何かお礼がしたい」

「お、お礼？」

「……………（コクコク）」

「急にそんなこと言われても……思い付かないなあ。思い付いたらまた後で伝えるよ」

ああっ、そこで会話を打ち切ったらダメじゃないかっ！　これからが面白いところなのに！

「あ、そうだ。ボクの水着の写真でも撮ってくれないかな？」

「……………ッ！（ボタボタ）」

あれ？　今の声って……………？

（明久よ、ここはワシに任せてもらおう）

そう言って目配せをする秀吉。そうか、さっきの声は秀吉の声真似か。

「ちょっとムツツリーニ君！？　今はボクじゃなくて」

「あ、ムツツリーニ君。せっかくなら写真集を作ってもいいよ？」

「……………写真集？（ボタボタボタ）」

どうやらムツツリーニは鼻血のせいで工藤さんと秀吉の声が聞き分けられないみたいだ。好都合好都合。

「それでね、もしよかったらでいいんだけど　裸＼シャツと

か興味ない？　ボク、一度はそんなエッチな格好してみようかなっ
って」

「……………ッ！！！？（ブバッ）」

「姫路さん、間欠泉だよ。綺麗だね」

「はい、ちょっと赤いのが気になりますけど」

長年一緒にいるけど、ここまでの勢いは初めてなんじゃないだろうか。

「むづ……ちょっとやり過ぎたかの。まさかここまで興奮するとは思わなかったのじゃ」

「……土屋は素直」

『……………（ぐったり）』

『ムツツリー二君大丈夫！？ かつて無いほどの勢いで鼻血が吹き出したんだけど！？』

『……………工藤、俺はもう逝く』

『ムツツリー二君！？ なんだか頭の辺りに白い影が出来てるんだけど！ 霊？ これ霊！？』

『……………大丈夫、もうこの世に未練はない』

『十八年の人生の終焉に言える台詞じゃないよね！？ 一体どれだけの経験をしたのさ！』

『……………』

『あぁっ、ちょっとムツツリー二君！？』

『……………いや、あの写真現像してない』

『結局は全部エロじゃないかっ！』

『結局、あの二人はあんな感じじゃの』

『……………お似合い』

『あはは……………』

ホントにくつつくかくつつかないかイライラするくらい近くにいら。でも、変にベタベタされるよりはマシなのかな？

「西村先生、済まぬがムツツリー二を救護室にでも運んでおいてく

れぬか？ ここには輸血用の血液パックがないからの」

「分かった、おい吉井。運ぶのを手伝え。お前は土屋の足を持つんだ」

「へーい」

ま、ここで死なれても困るからね。勉強もさぼれるし、こちらとしては願ったり叶ったりだ。

「西村先生。なんで救護の先生はあんなに怒ってたんですかね？」

「さあな。だが、土屋の出血はもう少しで致死量だったそうだ。それが原因かもな」

「へえ」。あれくらいの血が出たら命に関わるんですか」

あれくらいだったらいつも美波にやられていたアイアンクロウのほうはやバかったと思うんだけど。僕って常識から外れているんだろうか。

問五十九（前夜）

「オラやれえっ！！」

「女子ごとき蹴散らせっ！」

「ち、ちよつとなんなのよアンタたち！？ 妙に張り切り過ぎじゃない！」

「アキちゃん！ 明日こそ、明日こそワンピース着せてあげるからね！」

「な、なんだか凄いのう。今夜はワシらが手助けする間もなく女子を制圧してしまったのじゃ」

「ま、CDクラスが入ってくれたらこんなもんだらうな」

「……………秀吉の写真も効果抜群」

「うーん、まあできてよかったよ（後で買うからね）」

「明久。本音が混ざってるぞ」

ふっ。今さらそんなことを気にする僕じゃない。

「しかしまあ、これであと一回覗きを阻止すりゃあ俺たちの役割も終わりだな。長かったぜ」

「じゃが油断は禁物じゃぞ。島田たちも、最終日なら気合いを入れて来るからの」

秀吉の提案はもつともだけど、いくら美波たちが頑張っても問題は無いと思う。

「奴らの切り札である中林は久保が押さえているからな。つまり、奴らは久保を倒さないと先へ進めないってことだ」

「霧島さんと姫路さんは敵に回るはずもないしね。押し寄せてくる大多数は僕らでなんとか出来るから」

「……………楽勝」

「むう……………それならよいのじゃが……………」

「……………良くない報告がある」

女子を制圧して数分後。風呂に入る間もなく、ムツツリーニが僕らを集めてそう言った。

「良くない報告？ 一体なんだそりゃ」

「まさか、姫路たちが向こうの手に落ちたとかかの？」

「……………（こくり）」

「そ、そんな！」

あの真面目な姫路さんが覗きなんて真似をするはずはないと思っ
てたのにつ。

「……………霧島もその可能性がある」

「翔子まで！？ 畜生、何がどうなってやがるんだ！？」

霧島さんに限っては、今日の自習で完全に味方にしたつもりだっ
た。

「……………清水美春が、いかがわしい写真をエサに味方を増やして
いる」

「いかがわしい写真とな？ 向こうもこっちと同じ作戦をとってき
たと言うことかの？」

「これは困ったな……。向こうの戦力がいくら増えても問題は無い
が、久保を倒すほどの戦力の存在は厄介以外の何者でもない」

それは姫路さんと霧島さんのことだろう。学年主席と次席に攻め
こまれたらたまったもんじゃない。

「ムツツリーニ！ こうなったら雄二のヌード写真で霧島さんを買
収しよう！」

「……………いや、奴らの写真は、俺より写真の出来が良い」

そこは張り合うポイントじゃないはずだ。

「ムツツリーニより良い出来の写真ならば、こちらが写真をエサに
しても無駄じゃということか。これはマズいもの」

あ、そうか。それなら女子の勢いはもう止められないほどになる
のか。

清水さんの写真の腕はムツツリーニ以上だもんね。

「吉井君、ちよつといいかな？」

「ん？ どうしたのさ久保君」

「いや、僕にちよつと作戦があつてね」

久保君が、作戦？

『きゃああっ！ な、なんて可愛さなのっ！』

ん？ この声は玉野さん？ 何かさわいでいるみたいだけど。

『ありがとう清水さんっ。こんなにたくさんアキちゃんの写真をもらっちゃって』

ヤバい。僕の人生ヤバい……………ッ！

「く、久保君。どんな作戦なの？」

問六十（終夜）

「ふわぁ……………」

「お疲れのようじゃの、明久。昨晚は何をしておったのじゃ？」

「うん、久保君に勉強を教えてもらっていたんだ。今日の作戦に必要らしいからね」

それにしても、久保君の勉強は凄かった。さすがは学年三位の実力をキープするだけはある。

「そうか、それはご苦労様なのじゃ」

「うん、ありがとう」

秀吉の笑顔で癒される。やっぱり秀吉はみんなの癒しだ。

「ねえ、秀吉」

「む？ なんじゃ？」

「秀吉の好きな人って誰なの？」

「な、なんじゃ急に！ 頭でもぶつけたのか！？」

「いや、出来るなら応援くらいしたいからさ。僕にはそれくらいしか出来ないし」

「む、むう……………。そういうことなら嬉しいのじゃ」

「で、誰？」

「……………正直に言って、ワシも誰が好きなのはよく分からん」

「あれ、そうなの？」

「じゃが、ワシとて色恋に興味があるとわかってもらえれば十分な

のじゃ」

「そういうものなのかな？」

「そうじゃ」

「そっかー」

「野郎ども、準備は良いか？」

『『『心ッ！』』』』

時刻は20時10分。前半組の男子が脱衣を終えて全員が入浴する頃だろう。今が警戒体勢のピークに違いない。

「最終日の参謀は久保だ。今日の指揮権は全て久保に託す。皆も久保の指示に従うように」

『『『了解』』』』

「ありがとう坂本君。まさか君が全て任せてくれるとは思わなかったよ」

「ふんっ、翔子相手じゃ俺の作戦は通用しねえからな。となるとお前しかないだろ？」

秀吉つて手もあるけど、万が一お姉さんが作戦に絡んでたら大変だからね。

「さすがはBクラス代表だ。状況を冷静に判断出来ているね」

「ちっ。お前に言われると嫌みにしか聞こえねえな」

「それは褒められていると受け取っていいのかい？」

「けっ、好きにしる」

雄二は唾を吐き捨てて所定の位置に戻る。コイツが指揮のプライドを捨ててまで戦うんだ。全力で協力してやる。

「吉井君、頼んだよ。君は今回の作戦の切り札なんだから」

「任せてよ久保君。Fクラス代表の意地を清水さんたちに教えてあげるからね」

「うん、それでこそアツキ　　吉井君だ」

うん、この寒気は武者震いに違いない。

「明久、お前も早く立ち位置に向かいやがれ。女子が攻めてくるぞ」
「あ、うん。それじゃ」

えっと、確か僕のポジションは、

「……………脱衣所の正面」
「あつ、ムツツリーニ？」

いつの間にか横には黒装束姿のムツツリーニがいた。さて、何で黒装束？

「……………鉄人と一緒」

「金を出す。僕の言うことを聞いてくれないか？」

鉄人と一緒に脱衣所の正面で二人きり？ そんな思い出は僕のメモリーにはこれっぽっちも必要ない。

「……………安心しろ、俺も一緒だ」

心のそこから感謝するって、きつとこついうことなんだろうな……。

「女子も写真でパワーアップしてるな。一筋縄じゃいかねえだろ」

今更ながら、清水を味方につけておけなかったのを後悔する。写真に関してはムツツリー二をも上回る、その一点を突かれたせいで女子全員が敵に回ってしまった。

「……雄二つ、見つけた……ッ！」

無論、俺の幼馴染みも例外ではない。

ちっ、点数勝負で翔子に勝てるわけが、

「……って何をしているんだ翔子!？」

「……黙って。これから夫婦の営みをする」

俺の幼馴染みはスリもビックリの技で俺のベルトを抜き取っていた。

「ち、ちよつとなに考えてるんだ翔子！ お前、少しおかしいぞ!？」

いつも突拍子のないことばかりするヤツだが、今夜はなんだか様子がおかしい。まるで媚薬を飲んだみたいだ。媚薬？

「ハッ？ 清水の写真か！ さては俺の裸でも映ってたな？」

ムツツリー二ほどではないが、盗撮のエキスパートである清水が撮ったんだ。さぞかし過激なものだったのだろう。

「……違う」

「違う？ 何が違うってんだ？」

「……裸より凄い」

「おい、誰が来てくれ！ 翔子の目が据わっているんだっ！」

「……あんな写真見て、興奮しないわけがない」

「わ、わっ、翔子！？」

「……ここで、したい」

翔子の顔は、真っ赤だった。

「ここは通させないよ、清水さん」

「退きなさい平賀源二。美春はお姉様の活路を開くという役目があるのです」

「ここは通させないよ。姫路さん」

「退いてください久保君。私はもう我慢出来ないんです」

「冷静になって考えてみてよ。Fクラスの君がDクラス代表の僕には勝てないだろう？」

「ああ、確かに僕は君には勝てないだろうね」
「それなら、大人しく降伏してください」

「それは出来ません。なぜなら、これが美春の使命だからです」
「……僕には、どうして君が自信たっぷりなのかわからないね」

「自信の理由？ それは君がよく知ってるはずだよ」
「えっ、私ですか？」

「ええ、姫路さんが言っていました。それを美春も信じてます」
「じゃあ、それ、とはなんなんだよ？」

「いや、至極簡単だ。それは」

『好きな人のためなら頑張れる』

『Dクラス 平賀源二』
古典 125点

VS

Fクラス 清水美春
古典 『166点』

『Aクラス 姫路瑞希』

古典 399点

VS

Fクラス 久保利光
古典 『431点』

問六十一（尊厳）

「吉井、土屋。一瞬たりとも気を抜くなよ」

「わかってますって。僕らの尊厳がかかっているんですからね」

「……………負けれない」

僕らの持ち場は脱衣所の目の前。つまり、ここを突破されたら僕らの負けになる。それだけはなんとしても避けなければいけない。

「っていつか西村先生。その両手にはめているものは何ですか」

「？ ボクシンググローブだが？」

そう言っつて拳をバシバシと鳴らす。この教師もいよいよFクラスに毒されてきたか……………。

「いや、俺だつてさすがに女子を本気で殴るのは気が引けるしな。

それに上手く使えば中林の凶器攻撃も防御出来る」

「凶器攻撃……………って、確か中林さんの武器は全て没収したんじゃ？」

金属バットにゴルフクラブにヌンチャク……………鉄人がありとあらゆる凶器をカバンごと回収したと聞かされている。もう中林さんは武器を所持していないはずだ。

「それなんだがな、気づかれないように戻しておいた。他の先生たちには内緒だぞ」

「は、はあっ！？　なんでそんなこと！」

そんなの敵に砂糖……じゃなくて、塩を送るようなものじゃないか！

「俺とてマズいことだとは自覚しているんだが……そのくらいのハ
ンデがないと不公平だろう？」

「……………本音は？」

「凶器で襲われる経験なんて滅多に出来ないから是非とも手を合わ
せたい」

誰か聞いてくれっ、ここに変態がいるっ。

「そんなことは置いといて、お前たち、作戦は大丈夫なんだろうな
？」

「もちろんです。先生こそ間違っつて召喚フィールドを展開しないで
くださいよ？」

「ふんっ、俺はそんなへまはしない」

「ムツツリー二も、通信機はどう？」

「……………問題ない。感度良好」

作戦確認も兼ねて軽いコミュニケーションをとる。思えばこの教
師とも二年の付き合いだ。いつの間にか、軽口をたたきあう仲にま
でなっただしね。

「……………来た。相手は四人」

「「ッ！」」

「待たせたわね、アキ」

「美春の気が済むまで暴れますっ。骨も残らないと思いなさいっ」
「吉井……絶望って感覚をその身に焼き付けてあげるわ……」

走って目の前に現れるや否や、美波と清水さん、それに金属バットを持った中林さんが僕らの前に立ちふさがった。いつになく、そのオーラが邪気を帯びている。

「あれ？ あと一人は？」

ムツツリーニ、さつき四人って言ったよね？

「ふふっ、アキ。アンタの命もここまでよ」

「うん？ 別に命が危険なわけじゃないと思うんだけど？」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん？ それじゃ何？」

「ここまでたどり着いた最後の一人だけど」

美波が楽しそうに、本当に心から愉しそうに告げる。

「最終兵器、船越先生よ」

聞いた瞬間、僕は尻尾を巻いて逃げ出したくなった。

「今は後ろで邪魔が入らないように守備をしてくれてる。ちなみに、召喚フィールドはここも範囲内だからね？」

「マズいな……船越先生は数学教師。島田の得意科目じゃないか」
「当然ですっ。美春が立てた作戦は完璧なのですっ。教師を味方につけることくらいたやすいことですっ！」

となると、僕らは美波という障害を最悪の状態で迎えるわけだ。

これは中々にキツイ。

「おしゃべりはここまでよ、アキ。一刻も早く、ウチが男子に興味があるって認識させなきゃっ！」

「「「試獣召喚！」「」」

「ムツツリーニッ！」

「「「試獣召喚！」「」

「さあ、中林。全力でかかってこい」

「言われなくても。吉井をぶった押すためなら、先生だって容赦しませんよ？」

「いい心がけだ」

言い終わるより早く、鉄人が中林さんに向けて突っ込んでいく。

「ムツツリーニは清水さんをお願いっ！ 僕はなんとか美波を押しさえて見せる！」

「……………任せろ…………っ！」

『Fクラス 島田美波

数学 174点

VS

Fクラス 吉井明久

「ア、アンタいつの間に頭がよくなったのよ？」

「昨夜久保君に教わってね。一時的なものだけど、わりかし効果はあるよ」

「ア、アキのくせにっ」

美波の悲痛な叫びが聞こえる。得意科目が僕にこされたんだ、当たり前前の反応かもしれない。

『くっ……敵しいな』

『覚悟してください西村先生っ！今すぐそっちで処理しますっ！』

む？ この声は鉄人と中林さん？ 見こたえありそうだけど、

鉄人が負けては元も子もない。今ここで負けたら、この先の尊敵は跡形もなく消え去るだろう。となると作戦は一つ。

「鉄人っ！今すぐ僕が援助に行きますっ！

一二重召喚っ

！」

問六十三（秘策）

「吉井つ、邪魔しないでよ！」

「ごめん中林さんつ。どうしてもここは譲れないんだっ！」

新たに召喚した副獣を鉄人の応援に向かわせる。小柄な召喚獣の体格を生かして、中林さんの足下から翻弄していった。

「くつ、ちょこまかと！」

「中林！ 余所見は禁物だぞ！」

その隙に鉄人が中林さんへ殴りかかる。狙いはもちろん急所を外し、中林さんの手にある金属バットへと打撃をくらわした。

「きゃっ!?!」

「こつちも忘れないでねっ」

鉄人に意識がいった一瞬、バランスを失った足目掛けて木刀を振り切った。

「いいったあいつ!！」

よし、これであともう二三発加えれば、

「調子に乗らせないわよ？ 相手はこつちにもいるんだからねっ！」

「わっ、美波!?!」

操作の隙を突かれ、主獣が美波の召喚獣から一撃くらった。二重

召喚のせいで点数が逆転した分、フィードバックのダメージがキツイ。

「こつちもちゃんと操作しなさいよ!」

気を放した際に、副獣のほうも中林さんから攻撃を受けた。

くそつ、やつぱり越冬コンビみたいな戦闘慣れしていない相手じゃないと二人相手はキツイか……。

「しつかりしろ、吉井!」

「はっ、鉄人?」

「耐えろ! 作戦が次の段階に入るまでになんとか耐えるんだ!」

そつだ。まだ作戦は始まったばかり。これからが本番だつ!

「何ですか? まだあなた方は本気を出していないと言っているのですか?」

「……………その通り。お前たちを押さえつける作戦があるんだ」

「なら早く見せてご覧なさいよ! さつさとしないと全員ブチ倒すわよ!」

「言われなくても……………そうしたいよっ!」

久保君の作戦によると、次の作戦は、久保君からの指示がムツツリー二に行く。その指示があつたら次の段階に移るといふものだ。

「やりたくても出来ないといったところですか……………。お姉様、ここは手加減する必要はありません。作戦とやらが決行されるまえにケリをつけましょう」

「ええ。中林さんもそれでいい?」

「ええっ! 問題ないわっ!」

マズいっ。このままじゃいずれ防衛線が突破されてしまうっ。

プルルル……プルルル……

『吉井君、土屋君、西村先生！ 聞こえますかっ！？』

「くっ、久保君？」

ムツッリーニが用意しておいた無線からそんな声が聞こえてきた。これは間違いなく久保君の声だ。

『こっちのやるべきことは終えた。いま、木下君が先生を連れてそっちへ向かっているよ』

「ありがとう久保君！ 引き続きよろしくねっ」

ブツッ

「ふふふっ……」

「な、何よアキ。意味のわからない笑いをして」

「残念だったね美波。君たちの快進撃もここまでだよ」

「？ 何言ってるの？ 何の根拠があるのよ？」

「今に分かるさ」

一旦、美波との会話を中断させてもう一方を見た。

「鉄人！ 作戦覚えてますよね！？」

「ああっ分かるさ。吉井、中林を一瞬俺から話してくれ！」

「わかりました！ ほいっ」

「きゃあっ！」

言われた通り、中林さんを力づくで押し倒す。

「承認っ！」

その一瞬で鉄人は召喚フィールドを形成し、

「か、干渉!？」

「まさか、そんなことが？」

船越先生の形成した数学フィールドを打ち消した。

「どういうつもりなの、アキ。私たちと直接争う気？」

美波の冷たい視線が身体に突き刺さる。召喚獣を呼べないまま、
そう受け取られても仕方ないけど、

「残念。僕はあくまでも召喚獣で勝負するさ」

「じ、じゃあなんで」

「待たせたのじゃ！」

女子の背後から可愛らしい秀吉が現れた。久保君の作戦通り、世界史教師を連れてきて。

「先生っ、承認を！」

秀吉に促された教師は、秀吉に言われるがままに召喚フィールドを決めていた。

「明久、思いつきりやるがよいぞ！」

「ありがとう秀吉！ 試獣召喚！」

「くっ、試獣召喚！」

「よりよってアキの得意な世界史！？ ついてないわねっ！」

「島田よ、明久はこれで終わりではないぞ？」

「何、どういこと？」

秀吉が女子の間をすり抜け、僕の横に立つ。

「いくよ秀吉！ 『交雑』っ！」

問六十四（大人）

「赤金の腕輪ね。学園長も余計なことをしてくれたわ」

新たに召喚された僕と秀吉の召喚獣を見て美波が毒づく。僕としてはこんな凄い能力を手に入れられて、学園長には感謝したい気分だ。

『Fクラス 吉井明久＋

Fクラス 木下秀吉

世界史 251点＋158点』

「明久、随分点数が上がったのう。もはやAクラス級の強さじゃ」「秀吉こそなかなかいいじゃない。また演劇関係？」「うむ、今度はシェイクスピアをやるのじゃ。相当勉強したぞ」

確か去年は源氏物語の原文を読み込むほど勉強したらしい。毎度のことながら、秀吉の集中力には驚かされる。

「……………明久、お遊びはここまで」

「わかってるよムツツリーニ。君も早く倒しちゃいな」

『Cクラス 土屋康太

地理 179点

V S

Fクラス 清水美春

世界史 98点』

意外と勝負は呆気なく終わった。

「……………造作ない」

「くっ、悔しいですっ。こうなったら意地でも覗いて」

バチバチッ

「しっ、痺れますっ」

「……………任務完了」

よし、これで残すは美波たちだけだね。

「中林さん！ こうなったら意地でもアキに一撃加えるわよ！」

「ええわかったわ！」

「ねえもうこれって覗きじゃないよね！？ ただ僕を傷つけるかどうかの話に刷り変わってるんだけど！」

手段が手段だから本来の目的を忘れている女子二名。さすがはFクラスの生徒と言える。

「アキ、覚悟しなさいっ」

「アバラの一本くらい粉々にしないと気が収まらないわよっ！」

あ、もう聞こえてないみたい。

「明久、腕輪を！」

「う、うん！」

学園長からもらった赤金の腕輪。これの真の力は点数の合計なんかじゃない。本当の凄さは、その合計が400点を越えたとき、交

雑先の相手

つまり、

「く、来るわ！」

秀吉の腕輪の力を呼び起こせることだっ！

「いけえっ！」

左手を前に突きだし、その掌を強く握りしめる。すると、僕の召喚獣はまばゆい光につつまれて

「何も起こらなかったじゃないかっ！」

「な、何がどうなっておるのじゃ？ 点数は400点を越えているはずじゃぞ！？」

「……………不具合？」

あのババアがやった仕事だ。ムツツリーニの言うこともあながち間違っではない。やっぱりあらかじめ練習なりなんなりしておくんだっ。たっ。

「なんだか知らないけど、腕輪の力は使えないみたいね？ これなら思いつきりブチのめせるわっ！」

「いきましよう島田さんっ！ 二人ならなんとかこのバカをやれるかもしれないわっ！」

あわてふためいている隙に二人が突っ込んできた。マズいっ。この攻撃はどうしても避けられな

シュッ

「「え？」」

「いことはなかった。」

「あ、明久。今の動きはどうやったのじゃ？ お主、そこまで細かく操作出来るようになったのか！？」

「いや、操作も何も……指一本動かしてないんだけど？」

それとも間違っただけで操作しちゃったとか？ それにしては上手く動きすぎだ。

「ま、まぐれよ！ もう一回っ！」

シュツ

「どうして当たらないのよっ！？」

「今度も僕は操作していない。これは……？」

「……………秀吉の召喚獣の能力」

「え？ それ本当なの？」

「……………おそらく、打撃を受け流す能力」

「そうか、それなら納得がいく。さすがは秀吉の召喚獣。攻撃的な要素が無いのは貴重かもしれない。」

「打撃が効かない！？ ならどうしろってのよ！」

「……………お前も腕輪を手に入れたらいい」

「うっ……………（グサツ）」

中林さんが地面にへたりこむ。ムツツリー二の宣告は、実を言えば『400点を取れ』ということだ。彼女には無理な話だろう。

「それで美波。どうするのさ」

「ど、どうするのって？」

「だって打撃が効かないんだよ？ 美波と中林さんだったら勝ち目は無いしね」

「痛いところ突いてくるわね……」

美波が帰るのを躊躇う。もちろん帰るしか方法は無い。だけど、それは処分を受けることと、僕らに負けたことを認めるということの二つの意味がある。プライドのある去年の美波なら速攻で断っていただけ、

「……わかったわ。ウチたちの負け」

美波のしゃんとした声が廊下に響き渡る。

こうして、覗き騒動は終わりを迎えた。

「……私も長年教師をやっていますが、まさか生徒の裸を覗こうとする教師がいるとは思っていませんでしたよ、船越先生」

引き返す途中、大人の厳しい世界を見た気がした。

問六十五（後日）

「明久、おはようなのじゃ」

「あ、秀吉。おはよ……」

「どうしたのじゃ？ 元気がないようじゃが、何か悩みごとかの？」

「うん……。どうして美波や姫路さんがあんなにも僕らの裸を見たかったのかがよく分からなくて」

「そ、それは本人たちですらわからぬかもしれんことじゃ。覗きについて深く追求するのは野暮というものじゃぞ？」

「そうだね……。ところで覗きと言えば、例の初日に脱衣所にカメラを設置した真犯人なんだけど」

「む？ 真犯人？ 誰かわかったのか？」

「うん。それが、どうやら船越先生が本当の犯人だったみたい」

「な、なんじゃと！？」

「この前鉄人にこつそり聞いたんだ。教師の権限で鍵を勝手に使ったらしいよ。幸い未遂だったから、学校側は取り立てて騒がないらしいけど」

「それじゃ、清水や島田たちは……」

「本当にただの便乗犯だね。ま、本人たちに非がないわけじゃないしね」

「あ、あはは……」

「ん。そろそろ朝のホームルームの時間だね。急ごうか」

「うむ。そうじゃな」

「それじゃ、これから一週間、女子は秀吉だけで寂しいけど仲良くやるうね」

「じゃからワシは男じゃ！」

【処分通知】

文月学園第二学年

全女子生徒

総勢151名

上記の者たち全員を一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

「……雄二」

「なんだ、翔子。お前確か謹慎処分くらってなかったか？ どうして俺の家にいるんだ？」

「……合宿の間、雄二といちゃいちゃ出来なかったから」

「うん。会話のキャッチボールが出来ていないことを自覚しような。それに勉強を目的とした合宿でそんな機会があるわけないということに気が付け」

「……最後の覗き騒動で、雄二といやらしいことをするつもりだったのに」

「もしもし警察ですか？ 強制猥褻の現行犯です」

「……」

「おおっ！？ 何故か携帯が一瞬で灰に！」

「……おいたがすぎる」

「その言葉そっくりそのまま返すわ！あと覗き騒動の最終日に関しては俺に責任はないだろ！？」

「……どうして？」

「お前が俺を押し倒して、そのまま俺の上で気を失ったからだ！
お前、あのまま何をする気だったんだ！？ 危うく大惨事だったぞ
！」

「……だって、恥ずかしいから」

「気を失うくらい恥ずかしいなら最初から押し倒すなっ！」

「……雄二は酷い」

「けっ、なんとも言え」「……でも雄二。私、嬉しかった」

「あ？」

「……雄二、あのとき嫌がらなかったから」

「ツツツ！？」

「……雄二は照れ屋さん」

「もしもし、美波ちゃんですか？」

『何、瑞希？ 今謹慎中のハズよね？』

「ええ、美波ちゃんとは一度お話したいなと思ってました。合宿の
日、どうしてあんなにも覗きに必死になっていたんですか？」

『あー、うん。実はね』

『と、言うわけなの』

「電車の中でそんなことがあったんですね……。明久君、相変わら
ず凄い勘違いです」

『そうでしょ？ だからウチは男の裸に興味があるって行動で示し
たのよ。最終的にアキが気づいてくれるかどうかが問題だけど』

「あそこまでやったんですから明久君も気づいてくれますよ。自信
持ってください」

『はあ……。ありがとう瑞希。なんだか気が楽になったわ』

「これくらいでしたらいつでもさせてくださいいね」

『そうね。……ねえ瑞希』

「はい？」

『最後は久保に負けちゃったみたいだけど、瑞希はどうして覗こうとしたの？』

「ふえっ!？」

『だいたい予想はつくけどね。あの写真でしょ？』

「……はい……」

『あれは確かに絶品よね。そりゃ瑞希も燃え上がっちゃっわよ』

「うっ……美波ちゃんは酷いですっ」

『あはは。でもね、瑞希。お詫びといっちゃあなんなんだけど』

「？」

『美春に頼んでもう2バージョン現像してもらっわ』

「ほ、本当ですか!？ ありがとうございます!」

『うん。……ねえ瑞希』

「？」

『お互い頑張ろうね』

「………はいっ!」

「おはようムッツリーニ。なにしてるの?」

「……… 郵送販売を始めたからその運営」

「へえ、それは便利だね。僕もなにか頼もっかな」

「……… 郵送料は一枚300円」

「遠慮しておこう」

「……… なかなか客足が伸びない」

「そりゃそうだろうね……。今まで買ってくれた人はいるの?」

「……… いる。だけど、何故か俺の写った写真はかり買っていく」

「ムッツリーニのファン? 珍しいね」

「やつほー、優子。暇してる?」

「あのね愛子。今私たちは謹慎中なのよ? あまり出歩かないでね」

「まあいいじゃない。同じ風呂を覗こうとした仲なんだから」

「さも当然のように言わないでよ。だいたい私は秀吉が変なことしないようにトツチメに行ったただけなんだから」

「なーんだ。玉野さんなんか『絡み合う男の子たちの勇姿を見たかったの!』なんて発言してたのに」

「へ、へえ……」

「ま、ボクは楽しかったから別にいいけどね。覗きたい男の子がいるわけでもないし」

「え? でも、アンタは確か土屋君の」

「わー、わーっ!」

「姫路さんに工藤さん、それに木下さんか。我ながらよく倒せたものだ。四人ほど隙を突かれて通してしまっただけど、吉井君になにもなくて良かったし。」

「ああっ、吉井君! 君と一緒に入浴出来なかったことが唯一の心残りだよ!」

「兄ちゃん……ッ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5210x/>

バカと新学年と受験戦争

2011年12月17日00時45分発行